

2013年度 地域課題研究

2014年3月

北九州市立大学都市政策研究所

目 次

北九州市民の住宅・居住地の選好性に関する調査研究	
北九州市立大学都市政策研究所 教授 伊藤 解子	1
地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題	
北九州市立大学都市政策研究所 教授 内田 晃	39
地域活性化のツールとしてのフットパス観光	
—公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して—	
北九州市立大学基盤教育センター 講師 廣川 祐司	59
北九州市立大学生の大学・学部を選択要因と満足度に関する調査	
北九州市立大学大学院社会システム研究科 博士後期課程	
鈴木 優香	77
イノベーションを担う人材の幸福度	
北九州市立大学都市政策研究所 教授 吉村 英俊	97

北九州市民の住宅・居住地の選好性に関する調査研究

伊藤 解子

1 はじめに

(1) 調査研究の背景

北九州市は1963年に門司、小倉、若松、八幡、戸畑の5市の対等合併によって誕生した。旧5市は、それぞれ人口10～30万人規模に見合った都市基盤や都市機能を形成していたが、合併によって大都市にふさわしいまちづくりが推進されるようになり、北九州市は多くの市民が住みやすいと評価するまちになった。

市政発足時、「住」は市民が最も期待する施策のひとつであった。住宅不足解消のための公的住宅建設や持家政策は郊外の農地や山林を住宅地に変え、さらにモータリゼーションがライフスタイルを変えて郊外開発を後押しした。その結果、この50年間に宅地面積は約3倍、自動車保有台数は約12倍に増加し、一方、農地は約7割、民有林は約3割減少した。

このような「拡がり過ぎた」ともいえる市街地は、市政にとっても市民生活にとっても「負荷」とならざるを得ない。欧米都市では早くからコンパクトな都市づくりが志向されてきたが、わが国でも、今世紀を迎える頃から、拡大基調の都市政策が見直されるようになった。北九州市では、2003年に策定した都市計画マスタープランにおいて都市づくりの基本方向を見直し、はじめて「街なか」重視の方針を打ち出した。そこで「街なか」とされたのは、概ね1965年の人口集中地区、つまり北九州市発足時の市街地にほぼ相当する区域である。モータリゼーション以前に形成された「歩いて暮らせる」街であり、旧5市時代から多様な都市機能が形成されてきた街である。

以降の都市政策は「街なか」に軸足を置いて進められるようになった。ただし、「郊外居住」の衰退につながる「街なか居住」の促進について、行政の立場として慎重とならざるを得ない。しかし、そのような施策によらなくても、「街なか居住」を選択する人は確実に増えている。図1は2000年以降の人口動態であるが、合併直後から減少が続いていた「街なか」の人口は近年ようやく増加に転じた。公共施設や公共交通などのインフラが比較的整ったインナーシティの住み良さが再評価される傾向は既に全国的なものとなっている。そのような市民の居住地選択動向や環境負荷低減の課題に対応し、北九州市にふさわしいコンパクトな都市づくりが求められている。

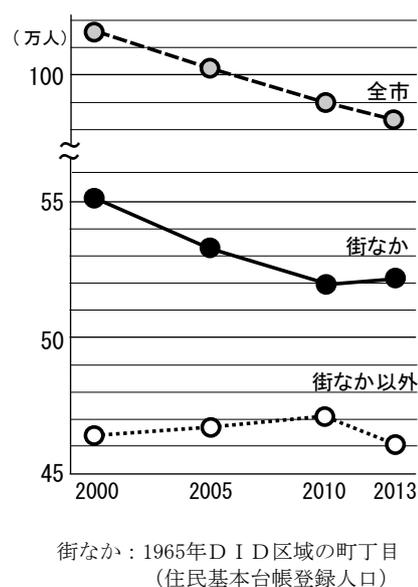


図1 市街地区別の人口推移

(2) 調査研究の目的・研究方法

以上のような認識に基づき、本調査研究では、市民の住宅・居住地の選好性や生活環境、都市環境に関する意識等の把握を目的に、北九州市の居住者を対象とするインターネット方式によるアンケート調査を実施した。

調査内容は、居住地の住み良さに関する評価、居住地の将来予想とそれを踏まえた居住継続意向、住み替えを想定した場合に選ばれる住宅や居住地の条件、及び、これからの都市のあり方や都市づくりの方策等に関する意識や考え方についてである。

表 1-1 アンケート調査の実施概要

対象者	20歳以上の北九州市居住者
調査方法	インターネット調査 (株マクロミル)
調査期間	2014年12月22日～27日
有効回答者数	1,034人

表 1-2 回答者の属性

	回答数 (人)	構成比率 (%)																								
		計	居住区							市街地区分			北九州市居住歴					職業								
			1 門司区	2 小倉北区	3 小倉南区	4 若松区	5 八幡東区	6 八幡西区	7 戸畑区	1 市街化区域 (街なか)	2 市街化区域 (その他)	3 市街化調整区域	1 生まれたときから	2 5年未満	3 5～10年未満	4 10～20年未満	5 20年以上	1 正規雇用者 (役員を含む)	2 非正規雇用者 (契約社員や派遣社員など)	3 パートやアルバイトなどの雇用者	4 自営業主	5 家族従事者	6 主婦	7 学生	8 無職 (退職者を含む)	9 その他
計	1,034	100	10	19	20	9	6	29	7	56	43	1	26	14	9	14	37	37	6	12	10	1	19	3	11	1
20代・男性	50	100	12	18	10	10	8	36	6	50	48	2	26	26	14	16	18	38	6	12	4	-	-	24	16	-
30代・男性	123	100	11	17	21	7	6	30	8	54	44	2	29	19	11	14	28	72	5	5	7	1	1	1	8	1
40代・男性	129	100	12	25	19	5	7	28	3	59	40	2	27	10	16	18	29	71	5	2	19	-	-	-	5	-
50代・男性	112	100	12	22	17	14	3	25	7	58	41	1	22	5	4	18	51	58	6	2	21	2	1	-	7	4
60代以上・男性	103	100	8	12	21	6	11	32	11	59	41	-	22	3	2	3	70	20	12	5	24	-	1	-	36	2
20代・女性	102	100	2	25	28	5	5	32	3	52	47	1	32	35	16	11	6	20	6	14	3	-	29	20	7	2
30代・女性	113	100	13	19	21	9	2	27	9	51	46	3	22	24	19	12	23	20	6	16	2	3	42	-	10	1
40代・女性	103	100	6	20	17	13	9	29	6	55	43	2	26	12	4	21	37	24	9	28	4	2	28	-	5	-
50代・女性	139	100	10	21	17	10	6	28	9	58	41	1	29	6	5	14	45	18	3	22	7	1	39	-	10	1
60代以上・女性	60	100	13	10	30	12	3	22	10	52	45	3	18	2	3	12	65	5	2	13	3	3	58	-	13	2

	回答数 (人)	構成比率 (%)														
		計	家族構成						住宅の種類							
			1 1人世帯	2 2世代世帯 (夫婦だけ)	3 2世代世帯 (20歳未満の子のみ)	4 2世代世帯 (20歳以上の子を含む)	5 3世代世帯 (親と子と孫)	6 その他	1 家族または自身の持ち家 (一戸建)	2 家族または自身の持ち家 (マンションなど)	3 民間の賃貸住宅 (一戸建)	4 民間の賃貸住宅 (マンション、アパートなど)	5 公営・公社・URの賃貸住宅	6 勤め先の給与住宅 (社宅や官舎など)	7 その他	8 わからない
計	1,034	100	14	22	27	28	6	3	43	18	3	25	7	3	0	0
20代・男性	50	100	32	8	12	36	10	2	30	4	2	38	14	8	-	4
30代・男性	123	100	18	15	32	27	7	2	41	16	3	28	6	5	-	-
40代・男性	129	100	16	12	44	19	5	3	47	16	2	26	5	3	-	-
50代・男性	112	100	15	19	18	37	7	4	50	20	5	12	10	3	1	-
60代以上・男性	103	100	17	48	2	26	5	2	58	26	2	5	7	2	-	-
20代・女性	102	100	22	14	29	26	8	1	22	9	2	47	10	9	1	1
30代・女性	113	100	7	12	56	20	4	1	35	15	4	40	3	2	1	1
40代・女性	103	100	11	19	45	16	7	3	39	16	8	30	7	1	-	-
50代・女性	139	100	7	32	8	46	4	3	53	24	3	13	6	1	1	-
60代以上・女性	60	100	5	53	2	27	5	8	52	30	-	10	8	-	-	-

2 アンケート結果

2-1 居住地の現況評価

(1) 現在の居住地の良いところ・良くないところ

まず、現在の居住地について、「市内の他の場所に比べて」良いところ・良くない（不満を感じる）ところについて問いかけを行った。

それぞれの回答率を項目別に比較すると、ほとんどの項目で「良い」が「良くない」をかなり上回る。ただし、「高齢者のための施設」と「子育て支援施設」の利用しやすさについては「良くない」が「良い」を上回る。

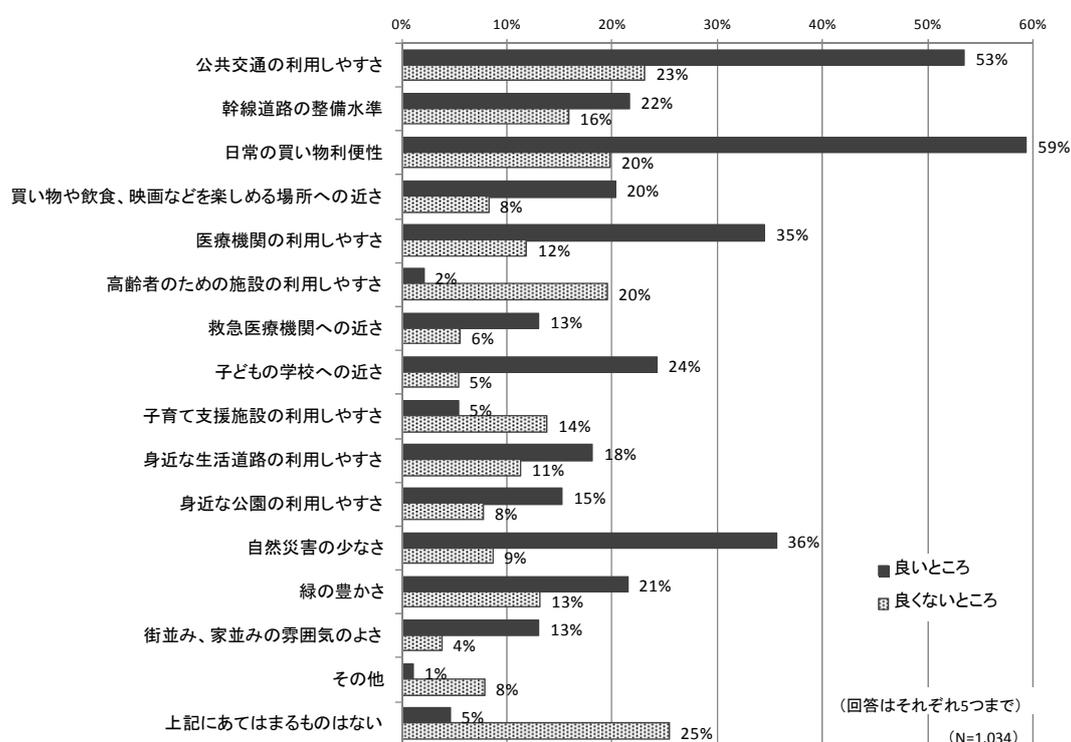


図2-1-1 (1) 現在の居住地の良いところ・良くないところ

① 良いところ

最も多いのは「日常の買い物が便利」、次いで「公共交通（バス、モノレール、筑豊電鉄、JR）が利用しやすい」が多く、いずれも過半数である。続いて「自然災害が少ない」「医療機関が利用しやすい」が3割を超え、以下、「子どもの学校が近い」「幹線道路が整備されている」「緑が豊か」等の順となっている。

項目別・属性別の回答傾向をみていくと、年齢が高いほど、市内居住年数が長いほど「良いところ」を多く挙げており、また、戸畑区、八幡東区、小倉北区の居住者、主婦、持ち家（一戸建）の居住者等が良いところを比較的多く挙げている。

上位の「日常の買い物が便利」や「公共交通が利用しやすい」については、街なかの居住

者の評価が他の地域の居住者に比べてかなり高く、買い物よりも公共交通に対する評価の差が大きい。日常の買い物については50代以上、主婦や無職、夫婦だけの世帯等の回答率が比較的高く、主婦や退職者など地域における生活時間の長い人にとって、買い物は重要な居住地評価の要件であることがわかる。一方、公共交通は、学生、単身世帯、持ち家（集合住宅）や公営・公社・UR賃貸の居住者等の回答率が比較的高く、地域との関わりが弱いと思われる人の方が重視する傾向がみられる。

「自然災害が少ない」については、50代以上、とりわけ、60代以上の男性の回答率が高く、また、市内居住年数別が20年以上の人や自営業主等の回答率が比較的高い。市内で長く暮らしている人や事業活動を行っている人ほど、経験的に自然災害が少ないと感じていることがうかがわれる。

また、「医療機関が利用しやすい」については60代以上、「子どもの学校が近い」については30～40代の女性等、ライフステージに対応した評価がみられる。

行政区別では、「医療機関が利用しやすい」で戸畑区、八幡東区、「緑が豊か」で若松区、門司区、「買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い」で小倉北区、戸畑区の評価が高い。

② 良くないところ

最も多かったのは「あてはまるものはない」、つまり不満はないという回答であり、女性よりも男性の方が不満が少ないという傾向がみられる。また、自営業主、公営・公社・UR賃貸や持ち家（集合住宅）の居住者等で、不満はないとする回答率が比較的高い。

不満が最も多かったのは「公共交通が利用しにくい」、次いで「道路が狭いところが多い」「買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が遠い」「救急医療機関が遠い」「日常の買い物が不便」の順となっている。

項目別・属性別の回答傾向をみていくと、男性よりも女性の方が「良くないところ」を多く挙げており、なかでも30代・女性が多い。また、若松区、市内居住歴5年未満、パート・アルバイト、子どもを抱える核世帯等で比較的多い。

「公共交通が利用しにくい」については、街なか以外での回答率が高く、街なかとの差が実感されていることがわかる。行政区別では若松区の評価が特に低い。また、20～40代の女性や子どもを抱える世帯、パート・アルバイト等で、不満を感じている人が比較的多い。

「道路が狭いところが多い」については、八幡東区の回答率が比較的高い。また、20～40代の女性や子どもを抱える世帯の回答率が比較的高く、子どもの交通事故や自身の運転技術への不安等がその理由として考えられる。

「買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が遠い」については、門司区、若松区の回答率が比較的高い。また、20代女性、学生、市内居住歴5年未満等の回答率が比較的高く、都会的な楽しみを求める気持ちが強いことが不満となって現れているといえる。

また、行政区別では、「救急医療機関が遠い」「日常の買い物が不便」「子どもの学校が遠い」は若松区、「身近な生活道路が狭い」は小倉南区、「緑が少ない」は小倉北区、戸畑区、「医療機関が利用しにくい」は八幡東区の回答率が比較的高い。

表2-1-(1)-① アンケート集計表(1)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																	
		2-1-(1)-① 現在の居住地の良いところ																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
		回答率・累計(累計1~15)(%)	公共交通が利用しやすい	幹線道路が整備されている	日常の買い物便利	買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い	医療機関が利用しやすい	高齢者のための施設が利用しやすい	救急医療機関が近い	子どもの学校が近い	子育て支援施設が利用しやすい	身近な生活道路が利用しやすい	身近な公園が利用しやすい	自然災害が少ない	緑が豊か	街並み、家並みの雰囲気が良い	その他	上記にあてはまるものはない	
合計・平均	1,034	337	53	22	59	20	35	2	13	24	5	18	15	36	21	13	1	5	
性別	男性	517	329	53	28	57	19	32	2	12	21	3	17	15	35	19	14	2	7
	女性	517	350	54	15	62	22	37	2	14	28	7	20	16	36	24	12	1	3
年齢	20代	152	286	55	11	50	22	32	2	10	24	6	13	15	25	11	9	1	11
	30代	236	309	45	17	54	19	28	1	10	28	12	16	19	28	18	11	3	6
	40代	232	344	54	23	59	24	34	1	13	29	3	21	12	34	24	12	1	4
	50代	251	373	60	27	65	24	36	2	12	23	3	21	16	42	23	18	1	2
	60代以上	163	379	54	29	67	9	46	5	22	15	2	19	15	50	31	15	-	2
	年齢・性別	20代・男性	50	252	52	20	40	22	22	-	10	16	2	8	16	28	6	10	-
	30代・男性	123	291	47	23	50	19	25	2	9	24	7	15	16	24	15	11	4	8
	40代・男性	129	338	57	30	59	24	33	2	10	24	3	19	11	33	22	9	2	5
	50代・男性	112	344	57	33	58	21	31	1	11	23	2	14	18	35	21	18	1	4
	60代以上・男性	103	381	50	31	68	9	47	6	21	13	2	21	13	56	25	19	-	3
	20代・女性	102	301	57	6	55	23	36	3	10	27	8	15	15	24	13	8	1	6
	30代・女性	113	329	42	10	58	20	30	1	12	33	18	17	22	32	21	12	1	3
	40代・女性	103	351	50	15	60	24	34	1	17	35	3	22	13	35	26	15	1	3
	50代・女性	139	393	62	22	71	27	40	3	12	22	4	26	14	47	25	17	1	1
	60代以上・女性	60	368	60	25	65	8	45	3	23	18	3	15	18	38	40	7	-	-
居住区	門司区	102	318	51	17	49	9	29	1	12	25	8	15	20	30	34	17	1	6
	小倉北区	201	352	71	29	68	38	35	1	14	19	5	17	11	25	9	10	0	4
	小倉南区	209	322	55	16	54	10	32	1	11	27	4	19	16	35	29	11	2	3
	若松区	91	294	24	16	46	7	21	3	2	19	5	26	12	52	38	22	1	5
	八幡東区	60	359	53	27	65	17	42	3	22	23	7	15	13	35	27	10	-	3
	八幡西区	298	348	48	23	62	21	38	2	15	29	4	19	16	41	16	13	1	6
	戸畑区	73	379	67	22	64	34	47	4	12	21	11	15	21	32	12	16	1	3
	居住地	市街化区域(街なか)	574	345	64	23	63	23	36	2	16	21	6	18	13	33	15	11	1
	市街化区域(その他)	445	334	41	20	55	17	33	2	9	28	5	18	18	40	30	16	2	4
	市街化調整区域	15	273	27	7	53	13	27	-	13	33	7	27	13	13	33	7	-	13
市内居住歴	生まれたときから	269	331	52	20	55	22	33	2	12	28	6	17	13	38	22	10	1	5
	5年未満	143	298	55	15	55	18	30	1	15	20	10	17	15	20	13	12	2	7
	5~10年未満	96	323	52	21	59	20	41	3	13	21	13	13	19	20	17	11	-	9
	10~20年未満	145	318	51	19	57	22	29	2	14	28	2	17	14	26	21	14	2	5
	20年以上	381	369	55	26	65	19	38	2	13	23	3	21	16	47	25	15	1	2
職業	正規雇用	380	336	56	24	57	22	33	2	12	26	6	19	16	28	19	14	2	4
	非正規雇用	61	294	51	23	59	11	18	3	15	15	2	18	10	23	26	20	-	11
	パート・アルバイト等	120	316	47	13	52	18	29	3	15	30	11	16	11	37	24	9	1	5
	自営業主	104	352	56	31	63	24	38	3	9	15	-	16	10	54	21	11	1	6
	家族従事者	11	362	45	18	55	18	18	9	27	27	-	27	18	55	27	9	9	9
	主婦	199	377	49	18	68	26	43	1	14	31	8	22	23	35	24	15	-	1
	学生	33	283	67	12	42	21	27	3	12	21	-	15	3	39	12	6	3	12
	無職(その他)	114	344	57	23	65	11	39	3	15	17	2	12	14	46	23	15	2	4
家族構成	単身世帯	148	286	59	24	55	22	31	1	14	5	2	18	9	28	11	6	1	9
	夫婦だけ	231	353	56	23	67	20	38	3	17	11	2	23	16	36	23	17	1	3
	親と子(20歳未満)	275	350	48	16	57	20	32	0	13	48	14	15	23	27	21	15	1	4
	親と子(20歳以上)	290	345	57	27	60	19	35	2	10	22	2	18	11	46	24	11	1	4
	親と子と孫	61	352	38	16	54	25	38	5	8	30	5	20	16	48	34	13	2	5
住宅	持ち家(一戸建)	449	336	43	22	52	15	32	4	10	25	5	20	14	44	29	19	2	4
	持ち家(集合住宅)	186	388	68	30	68	24	47	1	22	24	6	17	17	34	19	10	1	3
	民間賃貸(一戸建)	34	346	44	12	65	24	32	3	6	41	12	18	21	35	24	9	-	6
	民間賃貸(集合住宅)	254	314	58	16	65	26	32	1	13	19	5	19	15	25	12	7	1	5
	公営・公社・UR賃貸	71	355	66	25	69	18	30	-	14	35	4	10	18	38	18	10	-	6
	給与住宅	32	320	59	22	53	38	41	3	16	22	13	13	19	6	6	9	-	13

※1：複数回答のため合計は100%にならない ※2：その他・不明を除くため合計は1,034にならない

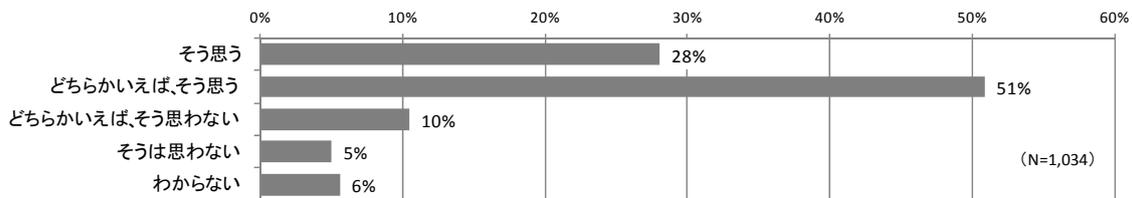
表2-1-(1)-② アンケート集計表(2)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																
		2-1-(1)-② 現在の居住地の良くない(不満を感じる)ところ																
		1 公共交通が利用しにくい	2 道路が狭いところが多い	3 日常の買い物が不便	4 買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が遠い	5 医療機関が利用しにくい	6 高齢者のための施設が少ない	7 救急医療機関が遠い	8 子どもの学校が遠い	9 子育て支援施設が近くにない	10 身近な生活道路が狭い	11 身近な公園が少ない	12 自然災害の不安がある	13 緑が少ない	14 街並み、家並みが雑然として雰囲気がよくない	15 その他	16 あてはまるものはない(不満はない)	
合計・平均	1,034	177	23	20	14	20	8	11	16	5	4	13	9	6	8	12	8	25
性別																		
男性	517	160	20	18	13	17	8	12	14	5	4	12	7	5	7	10	8	31
女性	517	193	26	22	15	22	8	11	18	5	4	15	10	6	9	13	8	20
年齢																		
20代	152	184	27	23	14	29	7	7	7	4	5	10	11	2	13	16	10	21
30代	236	203	30	24	14	19	6	6	19	8	5	14	12	8	14	15	11	17
40代	232	177	22	20	17	16	10	9	17	8	5	12	6	8	7	12	9	23
50代	251	153	20	14	12	16	8	15	16	4	2	14	9	6	4	8	6	33
60代以上	163	164	16	20	12	21	7	21	17	3	3	15	6	2	6	10	4	33
年齢・性別																		
20代・男性	50	144	20	18	14	20	4	8	2	-	4	6	4	2	10	16	16	34
30代・男性	123	177	24	20	12	16	4	6	17	7	2	13	8	7	13	15	12	23
40代・男性	129	152	17	17	13	12	11	9	12	10	5	9	6	5	6	11	9	29
50代・男性	112	151	23	11	13	20	9	13	15	3	2	13	10	8	3	3	5	36
60代以上・男性	103	166	17	23	12	20	8	21	16	3	5	16	6	2	6	10	3	34
20代・女性	102	204	30	25	15	33	9	6	9	6	5	12	14	2	15	17	7	15
30代・女性	113	231	35	28	15	23	9	5	22	8	7	15	16	9	14	14	10	11
40代・女性	103	209	29	24	21	20	9	10	23	5	4	16	7	12	8	13	9	16
50代・女性	139	155	17	17	11	14	7	17	17	4	3	15	8	4	4	12	6	32
60代以上・女性	60	160	15	13	13	23	7	20	20	3	-	15	5	3	5	12	5	30
居住区																		
門司区	102	189	19	18	22	31	10	9	17	6	6	13	11	13	1	8	5	25
小倉北区	201	157	15	22	10	10	6	7	9	2	4	16	9	5	15	16	11	26
小倉南区	209	179	24	22	14	23	7	11	15	4	2	18	8	4	6	12	9	23
若松区	91	212	51	12	24	27	11	9	27	13	2	4	9	5	4	9	5	20
八幡東区	60	185	25	32	8	22	13	15	12	7	3	17	3	3	3	15	7	32
八幡西区	298	170	23	17	12	20	7	14	18	6	5	9	9	4	8	12	6	26
戸畑区	73	160	11	21	11	4	5	12	16	7	3	15	11	8	18	7	11	29
居住地																		
市街化区域(街なか)	574	171	15	21	13	19	7	11	12	5	4	14	10	6	11	14	9	28
市街化区域(その他)	445	182	34	19	15	20	8	12	21	6	3	12	7	5	4	9	7	23
市街化調整区域	15	200	7	7	13	27	13	7	13	7	7	20	13	13	20	20	13	20
市内居住歴																		
生まれたときから	269	178	25	22	16	20	5	13	15	5	4	15	9	5	9	10	5	26
5年未満	143	201	23	26	17	26	10	6	9	7	5	14	13	6	14	15	10	17
5～10年未満	96	163	25	17	14	11	5	4	13	3	5	10	13	7	11	16	9	29
10～20年未満	145	178	27	19	16	21	10	11	14	6	3	10	7	6	7	12	9	23
20年以上	381	169	20	18	10	18	9	14	20	6	3	13	7	6	6	11	8	28
職業																		
正規雇用	380	176	22	20	14	19	8	9	14	8	4	13	9	8	10	11	7	23
非正規雇用	61	164	26	18	15	18	3	16	10	3	-	13	8	5	8	16	5	26
パート・アルバイト等	120	206	29	28	18	21	11	10	18	4	6	14	10	6	8	13	10	18
自営業主	104	164	20	16	13	19	12	13	14	3	4	9	10	1	9	14	7	35
家族従事者	11	162	27	27	18	9	18	-	18	9	-	9	-	-	9	-	18	36
主婦	199	177	27	18	12	18	6	10	21	7	5	13	10	6	7	10	7	27
学生	33	171	15	12	15	39	9	15	6	3	-	12	9	-	15	12	9	21
無職(その他)	114	167	17	18	11	17	7	18	18	2	3	16	4	5	6	13	12	27
家族構成																		
単身世帯	148	149	16	21	12	21	6	9	7	-	3	11	6	3	14	13	7	31
夫婦だけ	231	153	18	17	13	17	5	12	13	6	3	12	7	4	7	12	7	32
親と子(20歳未満)	275	200	29	24	16	17	10	6	22	8	6	15	12	8	9	11	7	19
親と子(20歳以上)	290	177	22	17	12	21	9	16	17	3	3	14	7	4	8	14	10	24
親と子と孫	61	214	36	26	18	25	5	18	18	18	-	10	13	7	3	10	7	21
住宅																		
持ち家(一戸建)	449	193	31	22	18	22	9	13	18	7	3	13	8	6	5	11	7	20
持ち家(集合住宅)	186	138	12	11	13	16	5	12	11	4	4	12	8	5	9	10	6	35
民間賃貸(一戸建)	34	208	29	26	15	21	9	21	15	6	3	12	6	9	6	21	9	24
民間賃貸(集合住宅)	254	174	20	21	9	20	8	8	16	4	4	14	11	5	12	13	9	24
公営・公社・UR賃貸	71	134	13	15	4	13	4	13	17	1	4	11	7	3	8	11	10	39
給与住宅	32	221	28	19	9	22	9	3	6	9	9	19	13	9	22	28	16	16

※1：複数回答のため合計は100%にならない ※2：その他・不明を除くため合計は1,034にならない

(2) 現在の居住地に対する総合的な評価

「良いところ、良くないところを考え合わせて、あなたが住んでいる場所は、市内の他の場所に比べて住み良い方だと思いますか。」という問いに対して、約1/4が「そう思う」と感じており、「どちらかといえば、そう思う」を合わせると、約8割が住みやすいと評価している。



(市内の他の場所に比べて住み良いと思うか)

図2-1-(2) 現在の居住地に対する総合的な評価

年齢が高いほど、また市内居住歴が長いほど「そう思う」と「どちらかといえば、そう思う」を合わせた肯定的な回答が多い。

行政区別では、「そう思う」の回答率が最も高いのは門司区、小倉北区であり、「どちらかといえば、そう思う」を合わせると八幡東区の回答率が最も高い。一方、若松区は「そうは思わない」が1割を超え、そのため肯定的な回答率は他の区をやや下回る結果となっている。

市街化区域では街なかとそれ以外の場所ではほとんど差はなく、どちらの居住者も総合的には住みやすいと感じていることがわかる。一方、市街化調整区域はサンプル数が少ないが、肯定的評価は5割程度であり、市街化区域をかなり下回る。

2-2 居住地の将来予想と居住継続意向

(1) 空き家の増加や日用品店舗の減少等への不安

「今後、高齢化や人口減少が進む地域では、空き家の増加や日用品店舗の撤退などが予想されていますが、あなたが住んでいる地域についてそのような不安を感じていますか。」という問いに対して、「すでに空き家が増えつつあり、お店もなくなって、不安や不便を感じている」という回答は1割程度であるが、「近い将来にそうなる」という人を合わせると約3割を占める。さらに、「今は心配してないが将来はそうなる」という人も合わせ、居住地の現況や将来に不安を感じている人が約6割を占める。

「いずれ引っ越しを考えているので、あまり不安や心配は感じていない」という人は約1割で、不安を感じていても転居を考える人は今のところ少ない。

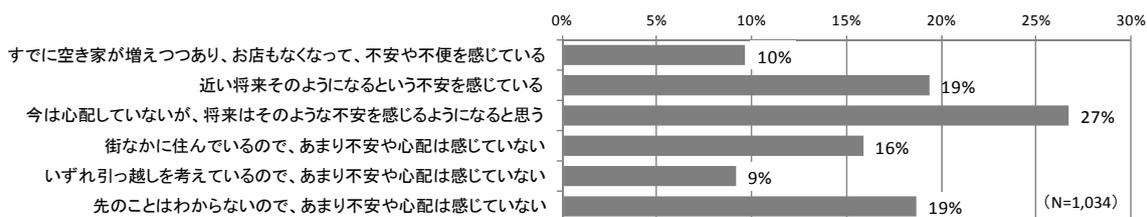


図 2-2-(1) 空き家の増加や日用品店舗の減少等への不安

「すでに空き家が増えつつあり、お店もなくなって、不安や不便を感じている」という差し迫った不安については、若松区、門司区、また60代以上の回答率が比較的高く、場所の問題とともに加齢が不安感を強めていることがわかる。また、「近い将来そのようになる」を合わせると、八幡東区、戸畑区も、若松区、門司区と同様に回答率は4割を超える。

一方、小倉北区では、「街なかに住んでいるので、あまり不安や心配は感じていない」が最も多く約3割であり、「いずれ引っ越しを考えている」「先のことはわからない」を合わせて、不安を感じていない人が約6割を占める。

また、「先のことはわからない」については、小倉南区、八幡西区の回答率が比較的高い。ただし、両区とも、現況や将来に不安を感じている人は既に過半数となっている。

(2) 空き家の増加と居住継続意向

上記の設問で、現況や将来に不安を感じていると回答した人に「今後、周囲がどのくらい空き家（集合住宅の場合は空き部屋）になったときに、住み続けるのが難しく感じるようになりますか。」と問いかけた。その結果、「空き家の方が多い、と感じられるようになったとき」に、困難を感じると思う人が半数を超えた。しかし「空き家がかかなり多くなって、今の場所に住み続けたい」が1割を超え、また「わからない」も2割近く、困難を感じても住み続ける選択をする人は少なくないと思われる。

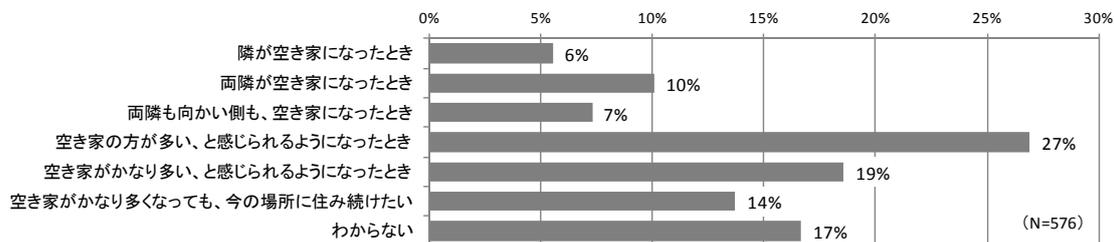


図 2-2-(2) 空き家の増加によって住み続けるのが難しく感じる時

「空き家がかかなり多くなって、今の場所に住み続けたい」という意向は年齢が高いほど、居住歴が長いほど強く、男性が女性を上回る。また、若松区、八幡東区、戸畑区は、他の区に比べて住み続けたいという意向が強い。三世帯世帯や持ち家（一戸建）の場合も居住継続意向が比較的強い。

(3) 店舗の減少と居住継続意向

上記と同様に、不安を感じている人を対象に「今後、食料品や生活用品などの買い物がどのくらい不便になったときに、住み続けるのが難しいと感じるようになると思いますか。」と問いかけた結果、困難を感じると思う人は「バスなどの公共交通を利用しないと買い物できなくなったとき」に半数近くとなり、「自家用車を利用しないと買い物できなくなったとき」には約6割となり、さらに「移動販売などに頼らないといけなくなったとき」に8割を超える。

一方、「福祉サービスや家族などの支援を受けながら今の場所に住み続けたい」という人は1割未満であり、上記の、空き家の増加の場合よりも少なく、買い物の不便さの方が生活への影響が深刻とみなされる傾向にあることがわかる。

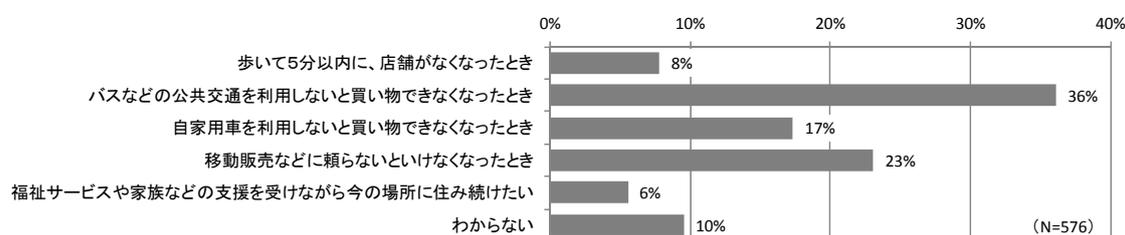


図2-2-(3) 店舗の減少によって住み続けるのが難しいと感じるとき

買い物の利便性の低下によって、住み続けることに難しさを感じる傾向が強いのは、30代女性、20代男性、学生、単身世帯、市内居住歴5年以上10年未満、民間賃貸住宅の居住者等である。また、市街化区域内では街なかの居住者の方がその傾向がやや強く、なかでも小倉北区の居住者はその傾向が強い。

「福祉サービスや家族などの支援を受けながら今の場所に住み続けたい」という意向は年齢が高いほど、居住歴が長いほど強い。また、小倉南区では他の区に比べて住み続けたいという意向がやや強い。三世帯世帯や持ち家（一戸建）の場合も居住継続意向が比較的強い。

2-3 住み替えるなら選みたい住宅・居住地

(1) 選みたい住宅の種類（所有関係・建て方）

「あなたが住み替えることになった場合、あなたはどのような住宅を選みたいですか。」という問いに対して、「持ち家（一戸建）」が最も多く約1/3を占め、次いで「民間の賃貸住宅（集合住宅）」と「持ち家（集合住宅）」がほぼ並んでいる。

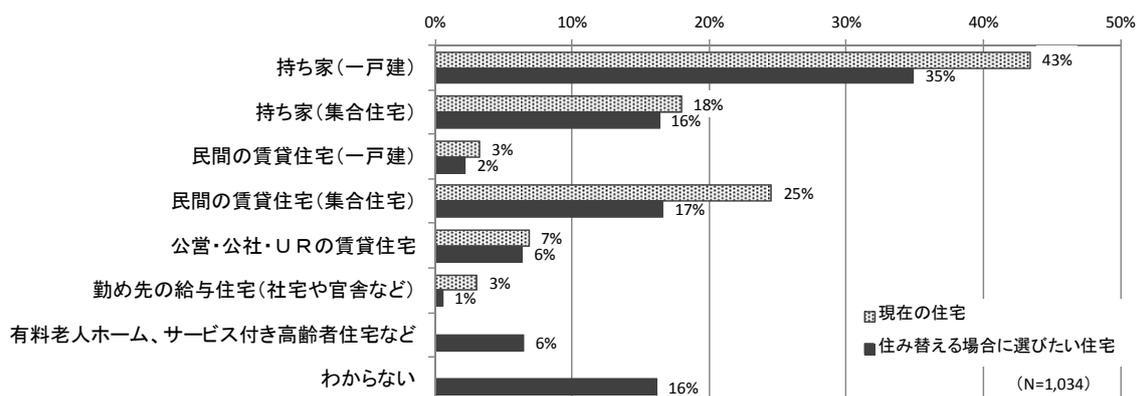


図2-3-(1) 住み替えるなら選みたい住宅

現住居と同様の住宅を選ぶ傾向があるが、現在、持ち家（一戸建）に住んでいる人も約4割は集合住宅を選びたいと回答しており、持ち家（一戸建）にこだわらない人は増えていると思われる。

「持ち家（一戸建）」を選びたいという意向は、女性よりも男性の方が強く、また30代、40代、若松区、北九州市出身者、子どもがいる世帯等で比較的強い。

「持ち家（集合住宅）」については、30代男性、50代女性、門司区、小倉北区、市内居住歴10年未満、夫婦だけの世帯等で選択意向が比較的強い。

表2-2-(3)・表2-3-(1) アンケート集計表(4)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1													
		2-2-(3) 店舗の減少によって住み続けるのが難しいと感じるとき ※3							2-3-(1) 住み替えるなら選みたい住宅						
		1	2	3	4	5	7	1	2	3	4	5	6	7	9
		1	2	3	4	5	7	1	2	3	4	5	6	7	9
		歩いて5分以内、店舗がなくなつたとき	歩いて5分以内、店舗がなくなつたとき	歩いて行ける場所に店舗がなく、バスなどの公共交通を利用しないと買い物ができなくなつたとき	歩いて行ける場所に店舗がなく、バスなどの公共交通を利用できなくなつたとき	公共交通も利用できず、自家用車を利用しないと買い物ができなくなつたとき	公共交通も、自家用車も利用できず、移動販売などに頼むと買い物ができなくなつたとき								
合計・平均	1,034	8	36	17	23	6	10	35	16	2	17	6	1	6	16
性別															
男性	517	8	35	17	22	6	11	38	16	3	14	6	1	4	18
女性	517	7	38	18	24	5	8	32	17	2	19	7	0	9	15
年齢															
20代	152	10	40	20	23	2	5	33	12	4	34	2	2	1	12
30代	236	9	45	13	20	3	9	42	15	3	21	4	1	2	13
40代	232	7	32	21	28	4	8	40	17	1	14	7	-	3	18
50代	251	9	30	19	23	6	11	29	19	2	9	7	0	14	20
60代以上	163	3	37	13	20	13	12	30	18	2	10	12	-	13	15
年齢・性別															
20代・男性	50	17	38	13	17	4	13	24	6	8	32	-	4	-	24
30代・男性	123	6	39	18	20	3	12	41	15	2	21	6	1	-	15
40代・男性	129	10	33	19	25	4	10	44	22	2	10	3	-	1	19
50代・男性	112	11	26	18	29	6	9	34	14	4	10	8	1	8	21
60代以上・男性	103	3	40	13	17	13	14	37	17	2	8	11	-	12	14
20代・女性	102	6	42	25	28	-	-	37	15	2	35	3	1	1	6
30代・女性	113	12	51	8	20	3	6	42	15	4	20	3	1	4	12
40代・女性	103	5	30	24	32	3	6	34	12	-	19	12	-	6	17
50代・女性	139	8	33	20	19	6	13	24	22	1	8	6	-	18	20
60代以上・女性	60	3	33	14	25	14	8	18	20	2	13	13	-	15	18
居住区															
門司区	102	8	32	20	28	6	6	39	21	3	12	3	-	7	16
小倉北区	201	12	42	15	17	5	10	30	21	1	19	5	1	3	18
小倉南区	209	8	35	20	21	9	5	38	12	2	19	8	-	6	14
若松区	91	7	38	21	25	3	6	44	13	1	10	10	-	7	15
八幡東区	60	2	42	17	17	6	17	28	15	-	18	5	2	7	25
八幡西区	298	7	33	11	29	5	14	33	16	3	18	6	1	8	15
戸畑区	73	8	36	26	18	4	8	36	12	5	10	10	1	10	15
居住地															
市街化区域(街なか)	574	8	39	18	20	3	11	32	19	2	17	5	1	6	17
市街化区域(その他)	445	7	32	17	27	8	8	39	13	2	16	8	0	7	14
市街化調整区域	15	20	50	-	10	20	-	40	7	-	20	7	-	-	27
市内居住歴															
生まれたときから	269	6	36	16	25	5	12	42	12	2	16	6	-	5	17
5年未満	143	8	40	19	21	4	9	34	21	3	27	2	3	3	8
5~10年未満	96	26	37	12	21	-	5	26	22	4	20	4	1	3	19
10~20年未満	145	2	34	23	24	-	16	29	16	3	15	10	1	10	17
20年以上	381	8	36	17	22	9	6	35	17	1	13	8	-	8	18
職業															
正規雇用	380	10	29	20	28	4	8	41	19	2	15	6	1	4	13
非正規雇用	61	15	32	24	15	6	9	33	16	5	16	10	-	5	15
パート・アルバイト等	120	7	43	18	17	7	8	33	13	3	16	11	-	7	18
自営業主	104	9	36	14	21	6	14	33	15	4	17	5	-	4	21
家族従事者	11	-	33	-	50	-	17	18	-	-	-	-	-	36	45
主婦	199	4	37	14	27	5	11	36	17	2	14	5	1	10	17
学生	33	-	71	14	14	-	-	18	6	6	48	-	3	-	15
無職(その他)	114	5	47	15	15	11	7	22	17	2	20	9	-	11	19
家族構成															
単身世帯	148	16	48	16	13	2	5	26	17	3	28	5	2	3	14
夫婦だけ	231	7	30	16	25	7	13	29	23	1	14	8	-	11	13
二世代(子20歳未満)	275	6	36	18	26	5	9	45	16	2	13	5	1	3	15
二世代(子20歳以上)	290	8	37	19	22	5	9	32	12	2	18	8	-	8	21
三世代(親と子と孫)	61	3	36	10	26	13	10	46	18	3	8	3	-	7	15
住宅															
持ち家(一戸建)	449	6	32	16	26	8	11	44	12	1	11	6	-	10	17
持ち家(集合住宅)	186	7	39	18	21	4	11	22	37	2	9	2	-	10	19
民間賃貸(一戸建)	34	14	41	14	23	5	5	32	6	26	15	6	-	3	12
民間賃貸(集合住宅)	254	13	48	15	17	1	6	29	15	2	37	4	1	1	12
公営・公社・UR賃貸	71	9	31	31	13	3	13	28	10	4	6	30	-	1	21
給与住宅	32	-	22	33	33	-	11	47	9	-	16	3	13	-	9

※1:その他・不明を除くため合計は100%にならない ※2:その他・不明を除くため合計は1,034にならない
 ※3:表2-2-(1)の1~3の回答者を対象としている

(2) 住宅資産価値の重視

上記の問いに対し持ち家を選びたいと回答した人に、「家や土地の購入を検討する場合、不動産としての資産価値を重視しますか。」とたずねたところ、「ある程度重視する」が最も多く、「かなり重視する」を合わせて約2/3が資産価値を重視している。

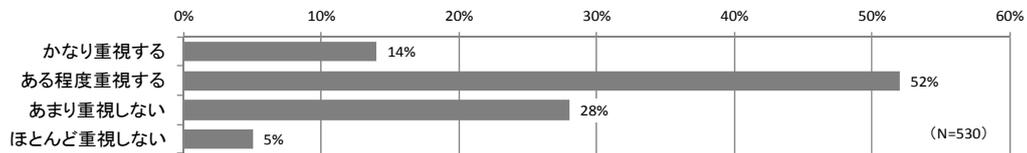


図 2-3-(2) 住宅購入時の資産価値の重視

市街化区域では、街なかとそれ以外の場所による差はほとんどみられない。市街化調整区域では、サンプル数が少ないが、資産価値を重視する傾向は市街化区域よりも強い。

行政区別にみると、「かなり重視する」と「ある程度重視する」を合わせると小倉北区が最も高い。ただし「かなり重視する」の回答率は、戸畑区、若松区、門司区が比較的高い。

「かなり重視する」は男性の方が多く、とりわけ20代男性では約1/3を占める。「ある程度重視する」を合わせると女性の方が多く、とりわけ30代女性では8割を超える。

年齢が若いほど、また市内居住歴が短いほど、資産価値を重視する傾向がみられる。

また、持ち家よりも賃貸住宅等の居住者の方が資産価値を重視する傾向が強く、所有・取得経験のない人の方が資産価値への関心が高いことがわかる。

(3) 選びたい住宅の条件

住み替えることになった場合、選びたい住宅の条件として、「日照やプライバシー」「騒音」「眺望」「建物の外観のデザイン」及び「自然災害に対する安全性」について、どの程度重視するかをたずねた。

その結果、重視度が最も高いのは「自然災害に対する安全性」であり、「かなり重視するので、満足できる物件しか選ばない」が約6割を占める。

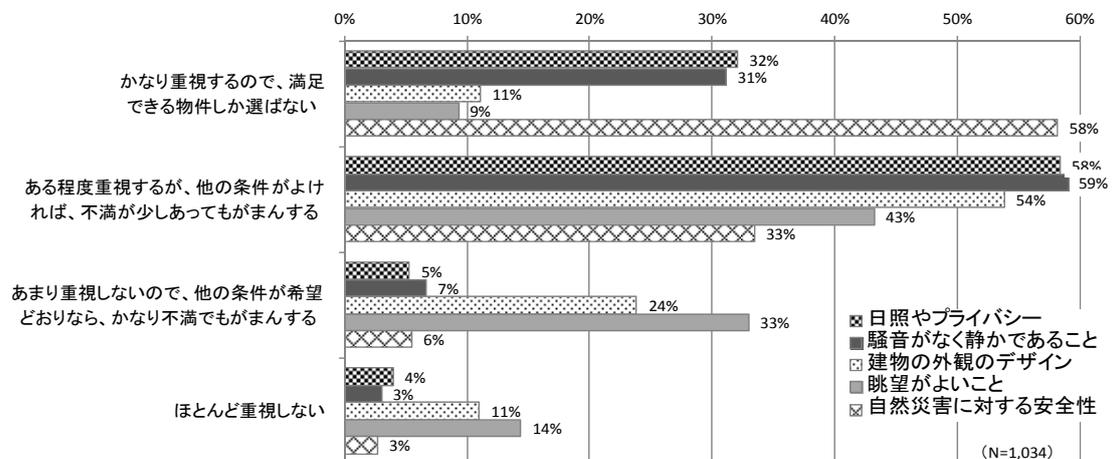


図 2-3-(3) 住宅を選ぶとき重視すること

表 2-3-(2)(3) アンケート集計表(5)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1															
		2-3-(2) 住宅購入時の資産価値の重視 ※3				2-3-(3) 住宅を選ぶとき重視すること											
						日照・プライバシー				騒音がないことや静かさ				住宅の外観やデザイン			
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
合計・平均	1,034	14	52	28	5	32	58	5	4	31	59	7	3	11	54	24	11
性別																	
男性	517	14	48	30	7	27	59	8	6	31	57	7	5	9	48	26	17
女性	517	13	57	27	2	37	57	3	2	32	61	6	1	13	59	22	5
年齢																	
20代	152	22	57	21	-	22	68	6	5	27	57	13	3	11	51	28	11
30代	236	15	62	20	3	31	62	4	3	28	62	6	3	11	57	26	6
40代	232	14	51	28	5	30	61	3	5	27	63	4	5	10	53	23	13
50代	251	10	50	33	7	35	57	4	3	34	59	5	2	10	53	24	13
60代以上	163	10	36	45	8	42	42	10	6	40	51	7	2	14	53	19	13
年齢・性別																	
20代・男性	50	33	47	20	-	20	56	12	12	30	48	14	8	4	36	40	20
30代・男性	123	13	59	22	6	24	67	7	2	24	62	9	5	8	51	31	10
40代・男性	129	18	48	26	7	27	62	4	7	26	63	5	7	10	48	24	18
50代・男性	112	11	48	33	7	24	65	7	4	34	58	5	3	8	48	23	21
60代以上・男性	103	9	36	44	9	37	43	13	8	41	50	7	3	13	51	17	18
20代・女性	102	19	60	21	-	23	74	3	1	25	61	13	1	14	59	22	6
30代・女性	113	17	66	17	-	38	58	1	3	33	63	4	1	14	64	20	2
40代・女性	103	9	55	32	2	34	60	3	2	29	64	4	2	11	60	21	7
50代・女性	139	9	52	32	6	45	51	2	2	35	60	5	1	12	57	24	6
60代以上・女性	60	13	35	48	4	50	40	7	3	38	53	7	2	17	57	22	5
居住区																	
門司区	102	16	52	26	5	31	62	3	4	28	63	7	2	11	52	29	8
小倉北区	201	13	63	19	2	29	61	3	5	30	60	4	4	12	53	22	12
小倉南区	209	11	53	31	4	33	60	5	2	31	59	8	2	12	55	27	6
若松区	91	17	37	40	6	42	51	8	-	37	59	2	1	15	58	18	9
八幡東区	60	12	46	31	12	40	45	8	7	45	45	8	2	8	58	25	8
八幡西区	298	14	50	31	5	28	61	6	5	27	60	8	4	9	52	23	15
戸畑区	73	17	54	23	6	37	52	7	4	34	56	7	3	10	53	22	15
居住地																	
市街化区域(街なか)	574	14	53	27	5	32	59	5	4	30	60	7	3	11	53	24	12
市街化区域(その他)	445	13	51	31	5	33	58	5	3	33	59	7	2	11	55	24	9
市街化調整区域	15	29	43	29	-	20	53	13	13	33	47	7	13	13	40	20	27
市内居住歴																	
生まれたときから	269	12	50	31	8	31	58	7	4	32	57	8	3	10	50	24	15
5年未満	143	23	56	19	1	32	58	6	4	28	59	11	2	14	52	27	8
5~10年未満	96	15	65	15	2	28	58	4	9	31	59	3	6	14	60	15	11
10~20年未満	145	12	60	25	3	34	60	3	2	35	57	6	2	10	60	19	11
20年以上	381	12	47	35	5	33	58	5	3	30	62	5	3	10	53	27	9
職業																	
正規雇用	380	14	55	27	5	28	64	5	3	30	59	7	4	10	53	26	10
非正規雇用	61	17	43	33	7	28	64	5	3	28	62	8	2	13	56	23	8
パート・アルバイト等	120	16	50	30	4	40	50	6	4	41	47	8	5	10	53	24	13
自営業主	104	14	46	28	8	36	55	7	3	35	58	5	3	13	53	19	15
家族従事者	11	-	100	-	-	27	55	18	-	9	82	9	-	-	64	27	9
主婦	199	9	59	30	1	39	56	1	3	30	64	5	1	17	59	21	3
学生	33	63	-	38	-	21	58	9	12	30	55	9	6	9	52	15	24
無職(その他)	114	16	48	25	11	26	56	10	8	25	64	7	4	6	46	28	19
家族構成																	
単身世帯	148	21	41	33	5	30	59	6	5	31	53	11	5	14	50	22	14
夫婦だけ	231	10	56	31	2	39	54	4	3	32	62	4	2	13	54	25	8
親と子(20歳未満)	275	16	57	25	1	31	61	3	4	29	61	7	2	12	60	20	8
親と子(20歳以上)	290	9	50	32	9	29	60	7	5	29	61	7	3	7	50	28	14
親と子と孫	61	15	54	21	10	30	62	8	-	43	51	3	3	15	62	18	5
住宅																	
持ち家(一戸建)	449	13	49	32	6	33	56	7	4	36	56	6	2	10	54	24	12
持ち家(集合住宅)	186	13	53	30	2	36	58	2	4	28	64	6	2	15	55	23	8
民間賃貸(一戸建)	34	-	77	15	8	32	65	3	-	35	62	3	-	9	76	9	6
民間賃貸(集合住宅)	254	18	55	25	2	30	61	4	6	29	59	6	6	10	54	24	13
公営・公社・UR賃貸	71	19	48	19	15	31	59	6	4	25	59	14	1	8	48	31	13
給与住宅	32	11	61	17	6	16	72	9	-	13	72	9	3	13	47	28	9

※1:その他・不明を除くため合計は100%にならない ※2:その他・不明を除くため合計は1,034にならない

※3:表2-3-(1)の1~2の回答者を対象としている

次いで、重視度が高いのは「日照やプライバシー」「騒音がなく静かであること」であり、以上の3条件については、「あまり重視しない」「ほとんど重視しない」という回答は1割に満たない。住宅価格、家賃、交通などの諸条件がいくら希望どおりでも、「自然災害に対する安全性」「日照やプライバシー」及び「騒音」の3条件に問題があれば、選ばれる可能性は小さいといえる。

一方、「眺望」「建物の外観のデザイン」については、「かなり重視する」は1割程度であり、他の諸条件次第で「不満があってもがまんする」という回答が多い。

「自然災害に対する安全性」については、女性の方が男性よりも重視度が高く、また年齢が高いほど、市内居住年数が長いほど重視傾向にある。また、主婦、パート・アルバイト、夫婦だけの世帯、持ち家（集合住宅）の居住者等の重視度が高い。

「日照やプライバシー」については、女性の方が男性よりも重視度が高く、また、年齢が高いほど重視する傾向にある。また、主婦、パート・アルバイト、夫婦だけの世帯、持ち家（集合住宅）の居住者等の重視度が高く、「自然災害に対する安全性」の結果と似た傾向がみられる。また、若松区、八幡東区で「かなり重視する」の回答率が高い。

「騒音」については、男女差は小さいが、これも、年齢が高いほど重視する傾向がみられる。集合住宅よりも戸建て住宅の居住者の方が重視度が高く、また「日照やプライバシー」と同様に、若松区、八幡東区で「かなり重視する」の回答率が高い。

「建物の外観のデザイン」については、女性の方が重視度が比較的高く、世代間の差はあまりない。また、主婦や持ち家（集合住宅）の居住者等の重視度が比較的高い。

「眺望」については、男女差は小さいが、年齢が高いほど重視する傾向にあり、また、単身世帯や持ち家（集合住宅）の居住者等の重視度が比較的高い。

(4) 住宅周辺の望ましい土地利用

「住宅を選ぶとき、周辺の土地はどのような場所として利用されているのがよいと思いますか。」という問いに対して、最も多かったのは「住宅専用」、次いで「住宅が大部分、一部が商業」「住宅と商業が共存」「住宅と農地や自然地が共存」の順となっている。

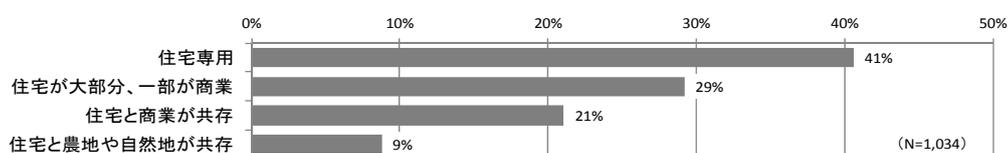


図 2-3-(4) 住宅周辺の望ましい土地利用

年齢が若いほど、市内居住年数が短いほど「住宅専用」を望む傾向にある。男女差はあまりみられないが、30代男性、40代女性でその傾向が強い。また、門司区、正規雇用者、子どもがいる世帯、一戸建て住宅の居住者等で、その傾向が比較強い。

一方、「住宅と商業が共存」を望む傾向は20代と50代以上で比較強く、20代では男女とも約1/3が住商共存を望ましいと感じている。また、街なか、小倉北区、戸畑区、自営業主、学生、単身世帯、公営・公社・UR賃貸、給与住宅の居住者等で、その傾向が比較強い。

表 2-3-(3)(4) アンケート集計表(6)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																				
		2-3-(3) 住宅を選ぶとき重視すること								2-3-(4) 住宅周辺の望ましい土地利用												
		眺望				自然災害に対する安全性																
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4									
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4									
		できる物件しか選ばない	かなり重視するので、満足	しあつてもがまんする	ある程度重視するが、他の条件がよければ、不満が少	かなり不満でもがまんする	の条件が希望どおりなら、他	あまり重視しないので、他	ほとんど重視しない	ほとんど重視しない	かなり重視するので、まっ	たたく不安のない物件しか	選ばない	かなり重視するが、他の条件がよければ、不安が少	しあつてもがまんする	ある程度重視するが、他の条件が希望どおりなら、他	あまり重視しないので、他	ほとんど重視しない	住宅専用	住宅が大部分で、一部が商業	住宅と商業が共存	住宅と農地や自然地が共存
合計・平均	1,034	9	43	33	14	58	33	6	3	41	29	21	9									
性別																						
男性	517	9	41	33	17	50	39	7	4	42	28	22	8									
女性	517	10	45	32	12	66	28	4	2	40	30	20	10									
年齢																						
20代	152	5	35	38	22	47	40	10	3	42	17	34	7									
30代	236	7	43	39	11	52	39	7	3	45	30	12	13									
40代	232	8	43	33	16	52	38	6	3	42	32	18	7									
50代	251	11	47	29	14	68	27	3	2	37	33	23	7									
60代以上	163	15	47	26	12	72	21	3	3	37	30	24	9									
年齢・性別																						
20代・男性	50	6	30	40	24	30	48	16	6	44	8	34	14									
30代・男性	123	6	41	40	13	40	49	8	3	49	28	16	7									
40代・男性	129	7	40	33	20	47	43	5	5	37	35	21	6									
50代・男性	112	11	40	31	18	56	36	5	3	43	29	21	8									
60代以上・男性	103	13	50	25	12	72	21	4	3	36	31	25	8									
20代・女性	102	5	37	37	21	55	36	7	2	41	22	33	4									
30代・女性	113	9	45	38	8	65	28	5	2	42	33	7	19									
40代・女性	103	9	47	33	11	59	33	6	1	48	28	15	9									
50代・女性	139	12	52	27	10	77	21	1	1	32	36	25	6									
60代以上・女性	60	20	40	27	13	73	22	2	3	38	28	22	12									
居住地																						
門司区	102	13	44	32	11	58	36	3	3	46	27	20	7									
小倉北区	201	11	42	32	14	54	33	9	3	37	28	28	7									
小倉南区	209	7	42	40	11	57	34	5	3	42	32	15	11									
若松区	91	12	53	26	9	58	36	5	-	44	27	20	9									
八幡東区	60	10	43	33	13	60	28	8	3	40	32	18	8									
八幡西区	298	7	40	34	19	61	33	3	3	40	30	20	10									
戸畑区	73	11	51	22	16	59	32	7	3	40	25	29	7									
居住地																						
市街化区域(街なか)	574	10	44	32	14	57	34	7	3	37	30	25	8									
市街化区域(その他)	445	9	43	34	14	60	34	4	2	45	29	16	10									
市街化調整区域	15	7	33	27	33	67	13	7	13	47	20	13	13									
市内居住歴																						
生まれたときから	269	10	38	34	17	57	33	6	4	38	28	23	12									
5年未満	143	9	43	34	13	52	38	9	1	48	24	19	10									
5~10年未満	96	9	39	33	19	53	31	7	8	48	22	21	8									
10~20年未満	145	8	46	32	14	58	38	3	1	40	32	19	8									
20年以上	381	9	47	32	12	62	31	5	2	38	33	22	7									
職業																						
正規雇用	380	8	46	34	11	55	36	7	2	45	27	20	8									
非正規雇用	61	13	43	34	10	57	34	7	2	30	39	23	8									
パート・アルバイト等	120	11	43	33	13	67	24	4	5	41	25	23	11									
自営業主	104	11	35	34	21	55	38	7	1	31	32	31	7									
家族従事者	11	-	36	36	27	55	45	-	-	45	27	9	18									
主婦	199	10	47	29	14	66	27	6	2	42	34	15	9									
学生	33	9	24	36	30	42	45	6	6	33	21	30	15									
無職(その他)	114	8	42	32	18	54	38	2	6	38	30	22	10									
家族構成																						
単身世帯	148	16	32	35	17	49	37	10	4	31	25	32	11									
夫婦だけ	231	11	48	29	12	69	26	3	2	40	33	20	7									
二世帯(子20歳未満)	275	7	45	35	13	58	32	7	2	49	28	12	11									
二世帯(子20歳以上)	290	7	43	33	17	55	38	4	4	36	31	26	8									
三世帯(親と子と孫)	61	8	51	33	8	54	41	5	-	44	30	20	7									
住宅																						
持ち家(一戸建)	449	9	43	35	13	60	33	4	2	46	28	17	10									
持ち家(集合住宅)	186	15	50	23	13	66	28	5	1	34	36	23	7									
民間賃貸(一戸建)	34	3	53	35	9	44	53	-	3	47	41	9	3									
民間賃貸(集合住宅)	254	7	35	39	18	52	35	9	4	37	29	22	11									
公営・公社・UR賃貸	71	11	46	30	13	59	32	4	4	35	21	37	7									
給与住宅	32	-	53	31	13	50	34	13	-	41	16	38	3									

※1:その他・不明を除くため合計は100%にならない ※2:その他・不明を除くため合計は1,034にならない

(5) 選びたい居住地の条件

「住む場所を選ぶとき、あなたはどのような条件を重視したいですか。」という問いに対し、順位をつけて3つの回答を求めた。その結果、1～3位までを合わせて、「日常の買い物便利」が最も多く、ほぼ並んで「公共交通が利用しやすい」が多い。次いで「医療機関が利用しやすい」「自然災害が少ない」の順となっており、現居住地の「良いところ」(2-1)と同様の条件が上位に選ばれている。ただし、現居住地に対する評価と比較して、日常の買い物や公共交通利便性への期待度はかなり高く、一方、「医療機関」や「自然災害」についてはそれほどでもない。また、1位についてみると、「街並み、家並みの雰囲気が良い」「買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い」が「医療機関」よりも多くなっている。安全や安心は居住地選択の基礎的な条件であるが、そのような条件は市内全域的にかなり充足されてきたことから、街の美観や雰囲気、楽しさといった付加的な条件が重視されるようになってきたと思われる。

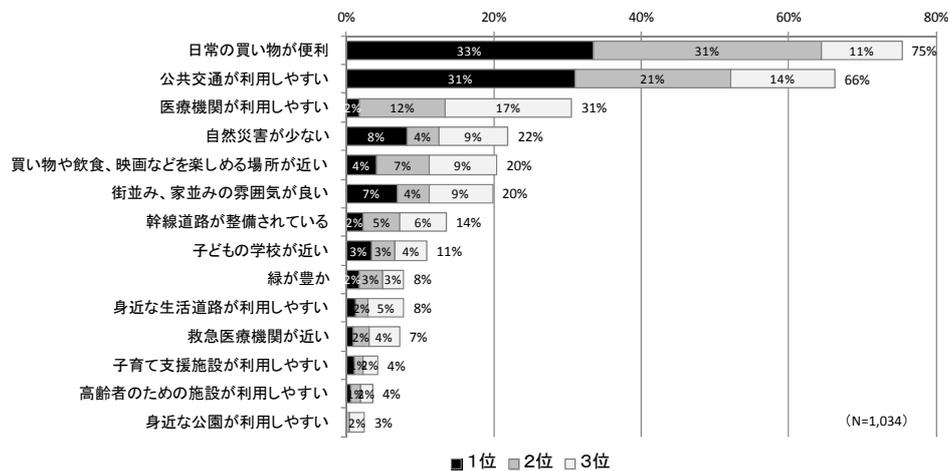


図2-3-(5) 住み替え場所を選ぶとき、重視すること

1～3位までを合わせた結果についてみていくと、回答数が多かった「日常の買い物が便利」については、50代女性、非正規雇用者、学生、小倉北区、八幡東区の居住者等で、また、「公共交通が利用しやすい」については、20代、街なか、小倉北区、小倉南区、戸畑区、非正規雇用者、学生、単身世帯、子どもがいる世帯、集合住宅の居住者等の回答率が比較的高い。

次いで多かった「医療機関が利用しやすい」については60代以上の男性、50代以上の女性、門司区、主婦、無職、持ち家（集合住宅）等で、「自然災害が少ない」については50代以上の女性、小倉南区、若松区、主婦、夫婦だけの世帯、持ち家（一戸建）の居住者等で、「買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い」については、20代、街なか、戸畑区、学生、単身世帯等で、さらに、1位に選んだ人が比較的多かった「街並み、家並みの雰囲気が良い」については、20代男性、40代女性、門司区、若松区、非正規雇用者等の回答率が比較的高い。

表2-3-(5) アンケート集計表(7)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1															
		2-3-(5) 住み替え場所を選ぶとき、重視すること (1位)															
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
		筑鉄(JR)が利用しやすい	公共交通(バス、モノレール、幹線道路が整備されている)	日常の買い物が便利	買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い	医療機関が利用しやすい	高齢者のための施設が利用しやすい	救急医療機関が近い	子どもの学校が近い	子育て支援施設(保育所、学童保育など)が利用しやすい	身近な生活道路が利用しやすい	身近な公園が利用しやすい	自然災害が少ない	緑が豊か	街並み、家並みの雰囲気が良い	その他	あてはまるものはない
合計・平均	1,034	31	2	33	4	2	1	1	3	1	1	-	8	2	7	1	2
性別																	
男性	517	29	3	32	6	2	0	1	3	1	1	-	7	2	8	2	3
女性	517	33	2	35	3	2	1	1	3	1	2	-	10	1	6	1	0
年齢																	
20代	152	42	1	32	5	-	-	-	3	1	1	-	5	1	9	1	1
30代	236	30	3	28	4	1	-	1	8	4	1	-	8	2	7	3	2
40代	232	29	3	36	3	2	1	1	5	-	2	-	6	3	6	1	2
50代	251	33	2	35	3	2	-	-	0	0	2	-	12	1	7	1	2
60代以上	163	23	2	38	7	5	2	4	-	-	-	-	10	1	6	1	1
年齢・性別																	
20代・男性	50	46	2	30	6	-	-	-	2	-	-	-	2	-	12	-	-
30代・男性	123	29	4	24	7	1	-	1	8	2	1	-	5	2	8	4	4
40代・男性	129	27	4	37	4	2	1	1	5	-	-	-	7	5	5	1	3
50代・男性	112	30	2	30	4	3	-	-	1	1	3	-	11	2	10	1	4
60代以上・男性	103	23	2	37	10	5	1	5	-	-	-	-	7	1	7	1	2
20代・女性	102	40	1	33	4	-	-	-	3	1	1	-	6	2	7	1	1
30代・女性	113	31	2	31	1	1	-	1	7	5	2	-	11	2	6	1	-
40代・女性	103	31	1	34	2	2	2	1	6	-	4	-	5	2	8	2	1
50代・女性	139	35	3	38	3	1	-	-	-	-	1	-	12	-	5	1	-
60代以上・女性	60	22	2	40	3	5	5	2	-	-	-	-	17	2	3	-	-
居住地																	
門司区	102	28	-	39	4	2	2	1	2	1	2	-	5	3	6	2	3
小倉北区	201	34	1	35	6	1	-	0	2	1	1	-	6	2	6	1	1
小倉南区	209	34	3	29	3	2	-	2	3	0	0	-	11	2	6	2	2
若松区	91	24	2	31	2	1	2	-	3	-	2	-	11	2	15	1	2
八幡東区	60	33	3	33	-	2	3	-	8	-	-	-	5	2	10	-	-
八幡西区	298	30	3	33	4	2	0	1	4	1	2	-	9	1	6	1	2
戸畑区	73	29	3	40	7	1	-	-	1	4	-	-	8	-	5	1	-
居住地																	
市街化区域(街なか)	574	33	2	36	5	1	1	1	3	2	1	-	6	1	6	1	2
市街化区域(その他)	445	29	3	31	4	3	0	1	4	0	2	-	11	2	7	2	1
市街化調整区域	15	20	-	27	-	-	-	-	-	-	-	-	13	-	20	-	20
市内居住歴																	
生まれたときから	269	30	1	33	4	2	0	0	4	0	3	-	10	3	6	1	2
5年未満	143	45	4	24	4	1	-	1	2	2	-	-	6	1	8	1	1
5~10年未満	96	31	4	30	3	1	-	-	4	5	-	-	6	1	6	3	4
10~20年未満	145	34	1	34	3	1	1	-	6	1	1	-	8	3	7	1	-
20年以上	381	25	2	38	5	3	1	2	2	0	1	-	9	1	8	1	2
職業																	
正規雇用	380	32	4	30	4	1	0	1	5	1	2	-	7	2	7	2	3
非正規雇用	61	38	2	28	3	2	-	-	2	-	2	-	8	-	15	2	-
パート・アルバイト等	120	37	1	35	-	2	1	3	-	2	2	-	6	2	8	3	1
自営業主	104	28	3	38	5	1	-	1	3	-	-	-	9	4	9	-	1
家族従事者	11	-	-	55	9	-	-	-	9	-	-	-	27	-	-	-	-
主婦	199	26	2	37	4	3	1	1	6	1	1	-	12	2	7	-	-
学生	33	48	-	30	9	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3	-	3
無職(その他)	114	29	2	37	6	5	3	3	1	-	-	-	8	-	4	1	2
家族構成																	
単身世帯	148	34	4	32	5	-	1	-	-	-	-	-	6	1	9	2	5
夫婦だけ	231	31	2	33	6	3	1	1	0	-	0	-	10	1	8	1	1
二世帯(子20歳未満)	275	27	3	29	3	1	-	0	12	4	2	-	7	3	7	2	1
二世帯(子20歳以上)	290	35	1	37	4	1	1	1	-	0	1	-	10	1	6	1	1
三世帯(親と子と孫)	61	21	3	41	3	3	3	2	2	-	2	-	7	2	8	-	3
住宅																	
持ち家(一戸建)	449	26	3	34	2	3	1	1	4	1	1	-	11	2	7	1	2
持ち家(集合住宅)	186	39	1	30	8	2	1	2	1	-	2	-	7	2	6	-	1
民間賃貸(一戸建)	34	18	-	44	6	-	-	-	3	-	-	-	3	-	18	6	3
民間賃貸(集合住宅)	254	33	4	33	4	2	-	-	4	2	1	-	5	1	7	2	2
公営・公社・UR賃貸	71	39	-	35	3	-	-	3	1	-	3	-	6	3	4	-	3
給与住宅	32	34	3	38	9	-	-	-	3	-	-	-	9	-	-	3	-

※1:複数回答のため合計は100%にならない ※2:その他・不明を除くため合計は1,034にならない

表 2-3-(5) アンケート集計表 (8)

	回答者数 (人) ※2	回答率 (%) ※1														
		2-3-(5) 住み替え場所を選ぶとき、重視すること (1~3位計)														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
		筑鉄公共交通 (JR) が利用しやすい	幹線道路が整備されている	日常の買い物が便利	買い物や飲食、映画などを楽しめる場所が近い	医療機関が利用しやすい	高齢者のための施設が利用しやすい	救急医療機関が近い	子どもの学校が近い	子育て支援施設 (保育所、学童保育など) が利用しやすい	身近な生活道路が利用しやすい	身近な公園が利用しやすい	自然災害が少ない	緑が豊か	街並み、家並みの雰囲気が良い	その他
合計・平均	1,034	66	14	75	20	31	4	7	11	4	8	3	22	8	20	2
性別																
男性	517	63	18	73	22	27	5	8	10	3	8	3	19	9	20	2
女性	517	69	9	78	19	34	3	6	11	5	8	2	25	6	20	3
年齢																
20代	152	80	9	78	32	25	-	5	9	7	7	3	15	5	20	1
30代	236	55	12	73	21	23	1	8	22	11	10	4	21	6	22	5
40代	232	66	17	75	19	27	3	6	15	2	8	2	17	9	22	3
50代	251	71	17	78	16	34	4	8	4	1	7	2	27	9	17	1
60代以上	163	63	9	72	19	46	11	10	1	1	7	2	28	10	17	1
年齢・性別																
20代・男性	50	80	16	78	42	14	-	10	6	4	10	2	8	6	24	-
30代・男性	123	53	15	70	26	21	2	8	18	9	10	3	19	5	22	7
40代・男性	129	66	24	75	19	24	3	6	15	2	6	2	16	11	19	2
50代・男性	112	63	21	75	15	27	4	8	7	2	9	3	24	13	17	1
60代以上・男性	103	64	11	68	17	44	13	10	2	-	7	4	24	11	19	1
20代・女性	102	80	6	78	27	30	-	3	11	8	6	3	19	4	19	2
30代・女性	113	57	9	76	15	26	-	7	27	12	10	4	23	8	22	4
40代・女性	103	67	9	76	18	30	4	5	15	3	10	3	19	7	26	5
50代・女性	139	78	13	81	16	40	3	7	1	1	6	1	30	5	17	1
60代以上・女性	60	60	7	78	22	50	8	12	-	2	7	-	35	8	12	-
居住区																
門司区	102	66	10	67	20	42	5	6	9	3	7	-	21	12	24	2
小倉北区	201	73	17	81	23	26	1	5	9	4	6	2	19	5	20	2
小倉南区	209	71	14	71	17	27	4	9	8	5	10	2	27	9	16	3
若松区	91	63	12	78	14	25	4	5	12	-	8	2	26	11	31	1
八幡東区	60	63	8	82	10	35	8	5	17	7	10	5	13	12	18	5
八幡西区	298	59	14	74	22	34	4	8	13	4	8	3	22	7	18	2
戸畑区	73	71	12	78	30	26	1	11	14	7	5	1	18	3	21	1
居住地																
市街化区域 (街なか)	574	70	14	77	23	30	3	8	9	5	6	2	18	6	19	2
市街化区域 (その他)	445	62	14	73	17	31	4	6	13	4	10	3	27	10	21	3
市街化調整区域	15	40	-	60	7	47	-	-	7	7	-	-	33	13	27	-
市内居住歴																
生まれたときから	269	65	12	75	23	28	4	7	13	3	10	3	24	10	16	2
5年未満	143	73	13	72	24	27	1	10	10	9	13	3	16	3	20	3
5~10年未満	96	66	14	78	21	27	-	5	14	11	4	4	13	4	21	5
10~20年未満	145	61	13	80	25	31	3	2	13	4	5	2	22	8	27	3
20年以上	381	67	15	74	15	34	6	9	8	1	7	2	25	9	20	2
職業																
正規雇用	380	66	17	72	20	24	3	6	13	6	9	3	21	9	19	3
非正規雇用	61	80	15	82	13	26	-	5	5	5	10	2	21	5	26	3
パート・アルバイト等	120	74	8	79	21	29	3	10	5	5	8	1	21	8	23	3
自営業主	104	63	23	72	21	28	6	7	6	1	8	3	21	16	19	1
家族従事者	11	73	18	73	9	27	-	9	18	-	-	-	45	9	9	9
主婦	199	59	8	79	21	38	3	8	19	5	8	3	26	4	20	1
学生	33	85	9	82	33	30	-	3	-	-	3	-	21	6	15	3
無職 (その他)	114	64	10	75	20	46	10	11	4	1	6	4	19	7	16	1
家族構成																
単身世帯	148	74	16	74	28	25	2	5	1	1	7	-	16	9	22	3
夫婦だけ	231	66	16	78	23	33	4	8	4	2	6	2	23	7	23	2
二世帯 (子20歳未満)	275	57	12	70	16	26	2	8	33	10	10	5	16	5	21	5
二世帯 (子20歳以上)	290	72	11	78	20	36	3	7	2	2	6	2	29	10	17	1
三世帯 (親と子と孫)	61	59	13	79	16	28	10	8	10	7	8	-	23	11	18	-
住宅																
持ち家 (一戸建)	449	59	15	74	16	33	6	7	11	4	9	2	27	10	21	2
持ち家 (集合住宅)	186	71	12	77	24	37	3	9	9	2	5	4	18	6	19	-
民間賃貸 (一戸建)	34	65	9	76	29	15	-	9	15	6	12	9	15	-	26	6
民間賃貸 (集合住宅)	254	72	14	76	22	27	1	6	13	7	6	3	17	4	20	5
公営・公社・UR賃貸	71	72	6	80	25	27	6	10	4	1	14	-	23	13	11	-
給与住宅	32	75	31	69	28	22	-	6	22	6	3	-	16	3	16	3

※1：複数回答のため合計は100%にならない ※2：その他・不明を除くため合計は1,034にならない

(6) 住みたい市区町村

「住むなら、あなたはどの市区町村がよいと思いますか。」という問いに対し、順位をつけて3つの回答を求めた。その結果、1位についてみると、「小倉北区」が最も多く、ほぼ並んで「八幡西区」が次に多く、続いて「小倉南区」「門司区」「戸畑区」「八幡東区」「若松区」「福岡市」の順となっている。1～3位を合わせてると、「小倉北区」が約6割を占め、次いで「八幡西区」「小倉南区」が約4割を占める。また、2位、3位に「八幡東区」を挙げる人が比較的多いことから、1～3位を合わせると「八幡東区」が「門司区」「戸畑区」を上回る。

また、市外は1～3位を合わせても約1割であり、市内での居住意向は強い。

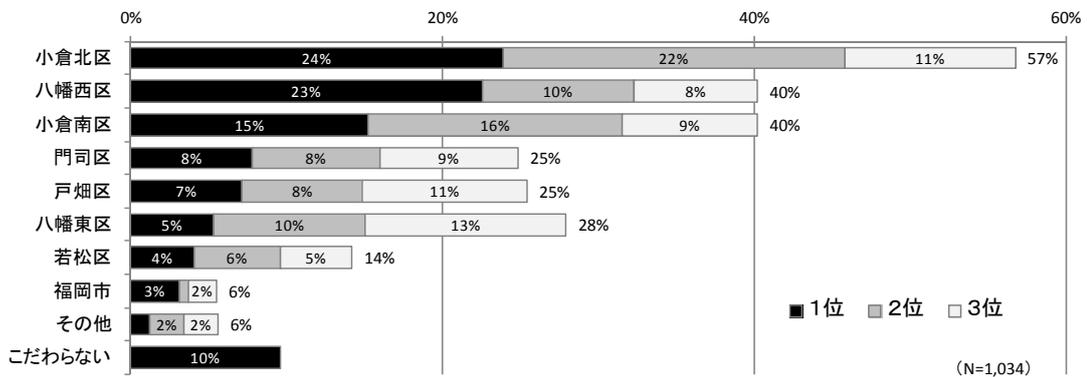


図2-3-(6) 住み替え場所として選みたい市区町村

現在の居住区を選ぶ傾向は強いが、その傾向が最も強いのは小倉北区であり、約8割が1位に「小倉北区」を選んでいる。一方、若松区で1位に「若松区」を選んだ人は約4割である。1～3位までを合わせると、門司区、小倉北区、戸畑区で9割以上、小倉南区、八幡東区、八幡西区で8割以上、若松区では7割以上が、現在の居住区を選んでいる。

1～3位までを合わせて、現在の居住区以外の選択傾向をみていくと、門司区では「小倉北区」「小倉南区」、小倉北区では「小倉南区」、小倉南区では「小倉北区」、若松区では「八幡西区」、八幡東区では「小倉北区」「八幡西区」、八幡西区では「八幡東区」「小倉北区」、戸畑区では「小倉北区」の回答率が比較的高い。

また、回答が最も多かった「小倉北区」の選択傾向が比較強いのは、20代女性と60代以上の女性である。

(7) 公共交通の便利な場所での居住意向

① 駅の近くやバス利用ができる場所での居住意向

住む場所を選ぶときに、「JR」「モノレールまたは筑豊電鉄」及び「バス」の利用に関する条件について、どの程度重視するかをたずねた。

その結果、重視度が最も高いのは「バス」であり、「住むなら、バスが利用できる場所がよいと思いますか。」という問いに対して、約1/4が「強くそう思う」と回答し、「そう思う」を合わせて約7割を占める。

表2-3-(6) アンケート集計表(9)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																										
		2-3-(6) 住み替え場所として選びたい市区町村																										
		1位							1~3位計																			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
門司区	小倉北区	小倉南区	若松区	八幡東区	八幡西区	戸畑区	北九州市圏	福岡市	その他福岡都市圏	その他県内	その他県外	その他市外	こだわらない	門司区	小倉北区	小倉南区	若松区	八幡東区	八幡西区	戸畑区	北九州市圏	福岡市	その他福岡都市圏	その他県内	その他県外	その他市外		
合計・平均	1,034	8	24	15	4	5	23	7	0	3	0	-	1	0	10	25	57	40	14	28	40	25	3	6	1	-	2	0
性別																												
男性	517	9	22	15	4	6	24	8	0	1	1	-	1	0	9	26	54	40	14	27	43	26	2	4	1	-	2	0
女性	517	7	25	16	4	5	21	6	0	5	-	-	0	-	10	24	60	41	15	29	38	25	3	7	2	-	2	-
年齢																												
20代	152	6	30	13	2	6	20	7	1	5	-	-	3	-	9	25	63	36	9	37	42	30	2	7	1	-	5	-
30代	236	8	23	16	3	5	23	7	1	4	1	-	-	-	10	27	52	36	13	30	39	24	3	6	2	-	2	-
40代	232	8	25	16	3	6	27	5	-	3	0	-	-	-	8	22	59	49	14	28	45	24	3	4	1	-	-	-
50代	251	8	25	14	6	4	22	8	-	2	-	-	0	0	10	25	57	37	18	22	39	25	1	5	1	-	2	0
60代以上	163	9	16	18	6	6	20	10	-	3	-	-	1	-	11	26	53	43	15	27	35	26	2	6	1	-	1	-
年齢・性別																												
20代・男性	50	12	28	4	2	4	22	10	-	-	-	-	6	-	12	28	52	28	8	28	48	34	-	-	-	-	10	-
30代・男性	123	7	22	15	2	6	28	7	1	2	2	-	-	-	9	25	49	33	11	32	45	26	2	6	2	-	2	-
40代・男性	129	11	28	16	2	6	24	3	-	1	1	-	-	-	8	26	63	54	12	26	42	23	2	2	1	-	-	-
50代・男性	112	8	21	16	8	4	21	9	-	2	-	-	-	1	9	27	55	35	19	22	42	25	2	4	-	-	1	1
60代以上・男性	103	8	15	16	7	7	21	13	-	2	-	-	1	-	12	24	48	41	15	26	41	28	3	5	1	-	1	-
20代・女性	102	3	30	17	2	7	19	6	1	7	-	-	1	-	8	24	69	39	10	41	39	27	3	10	1	-	2	-
30代・女性	113	9	25	17	4	4	18	6	1	6	-	-	-	-	11	28	56	41	15	28	33	21	5	7	2	-	3	-
40代・女性	103	4	22	15	4	6	30	7	-	5	-	-	-	-	8	17	55	42	17	29	49	24	5	8	1	-	-	-
50代・女性	139	9	27	12	5	4	22	6	-	2	-	-	1	-	12	24	58	39	17	21	37	26	1	5	2	-	3	-
60代以上・女性	60	12	18	23	3	3	18	7	-	5	-	-	-	-	10	28	63	47	15	28	25	23	2	8	2	-	-	-
居住地																												
門司区	102	68	15	4	-	-	3	2	-	-	1	-	1	-	7	90	63	54	4	5	13	14	-	2	2	-	3	-
小倉北区	201	0	82	5	1	0	1	1	-	2	-	-	1	-	5	26	92	53	6	28	17	26	0	5	-	-	3	-
小倉南区	209	2	12	65	-	1	2	0	0	4	0	-	0	-	11	31	65	83	4	14	13	15	4	8	1	-	2	-
若松区	91	1	8	1	42	2	18	7	-	9	-	-	-	-	13	14	26	8	73	21	55	26	1	11	2	-	-	-
八幡東区	60	-	10	-	2	65	7	10	-	2	-	-	-	-	5	7	47	18	7	85	42	48	-	2	2	-	-	-
八幡西区	298	1	7	2	-	3	68	1	1	3	0	-	0	0	13	7	35	17	15	35	82	15	5	5	2	-	1	0
戸畑区	73	3	11	3	-	1	1	74	-	1	-	-	1	-	4	12	62	16	11	32	27	93	-	3	-	-	1	-
市内居住歴																												
市街化区域(街なか)	574	11	36	5	3	7	16	10	-	2	0	-	1	-	9	28	64	34	13	32	35	32	0	4	1	-	2	-
市街化区域(その他)	445	4	8	29	5	3	32	3	1	4	0	-	0	0	11	21	47	48	17	23	47	17	5	7	2	-	1	0
市街化調整区域	15	7	27	13	7	-	20	-	-	7	-	-	-	-	20	20	67	40	7	20	33	27	-	7	-	-	-	-
生まれたときから	269	9	22	15	4	7	23	9	-	2	1	-	0	-	9	23	54	39	13	29	43	26	1	3	1	-	1	-
5年未満	143	5	26	14	3	5	20	8	1	5	-	-	1	-	12	20	57	39	11	31	33	31	5	7	1	-	4	-
5~10年未満	96	7	26	14	3	5	19	10	-	4	-	-	-	-	11	26	58	38	15	31	41	29	6	5	1	-	-	-
10~20年未満	145	5	28	12	3	4	29	6	1	2	-	-	1	1	10	25	54	39	14	28	43	27	3	5	1	-	3	1
20年以上	381	9	23	18	5	5	22	5	0	3	0	-	1	-	9	27	59	43	16	25	39	22	1	7	2	-	1	-
職業																												
正規雇用	380	8	24	15	4	6	27	7	0	2	0	-	-	-	8	23	56	40	15	29	45	29	2	4	0	-	1	-
非正規雇用	61	15	21	18	2	7	16	8	-	5	-	-	2	-	7	34	57	48	8	25	31	31	3	7	-	-	2	-
パート・アルバイト等	120	6	25	11	8	4	19	8	-	3	1	-	2	-	14	26	54	33	15	25	38	26	2	7	2	-	3	-
自営業主	104	11	28	10	4	4	20	10	-	1	1	-	-	-	13	24	58	38	11	31	43	17	5	4	2	-	3	-
家族従事者	11	27	-	9	-	9	27	-	-	-	-	-	-	-	27	45	55	36	9	18	45	-	9	-	-	-	-	-
主婦	199	5	23	18	5	8	19	7	1	5	-	-	1	-	11	20	60	42	17	32	36	26	3	6	3	-	2	-
学生	33	3	21	15	-	3	21	9	-	9	-	-	6	-	12	27	48	36	6	30	36	27	-	12	-	-	15	-
無職(その他)	114	9	25	19	4	4	24	4	-	4	-	-	-	-	6	31	59	46	16	21	39	18	4	11	2	-	1	-
家族構成																												
単身世帯	148	5	31	10	2	1	22	7	1	3	1	-	2	1	13	28	55	34	11	23	37	26	5	8	3	-	5	1
夫婦だけ	231	7	22	16	4	8	20	9	3	0	0	-	0	-	9	19	59	38	16	28	40	32	1	6	1	-	1	-
二世帯(子20歳未満)	275	6	22	18	4	6	27	7	0	1	-	-	-	-	8	23	55	45	16	33	45	22	4	2	1	-	1	-
二世帯(子20歳以上)	290	11	24	15	4	4	19	6	-	5	-	-	1	-	10	30	58	41	13	26	37	24	1	7	1	-	2	-
三世帯(親と子と孫)	61	8	15	10	5	8	34	5	-	2	-	-	-	-	13	23	51	39	13	25	48	20	2	7	-	-	-	-
住宅																												
持ち家(一戸建)	449	8	18	17	6	4	26	7	-	3	0	-	1	0	10	25	49	40	17	24	46	24	2	6	1	-	2	0
持ち家(集合住宅)	186	12	31	10	2	6	20	9	-	2	-	-	-	-	10	30	65	40	13	28	32	27	1	4	-	-	1	-
民間賃貸(一戸建)	34	9	15	21	-	6	29	9	3	-	-	-	-	-	9	24	47	41	12	29	38	26	9	3	3	-	-	-
民間賃貸(集合住宅)	254	5	33	16	2	6	19	6	1	4	1	-	1	-	7	23	66	43	10	32	39	24	4	6	2	-	2	-
公営・公社・UR賃貸	71	6	23	23	7	6	21	6	-	3	-	-	-	-	7	21	63	42	15	24	37	27	1	7	-	-	-	-
給与住宅	32	6	19	-	3	9	13	16	-	6	-	-	3	-	25	19	44	19	13	41	31	44	-	6	6	-	3	-

※1：複数回答のため合計は100%にならない ※2：その他・不明を除くため合計は1,034にならない

「住むなら、JR駅に近い場所がよいと思いますか。」という問いに対する回答も「バス」の場合とほぼ同様であり、「バス」も「JR」も居住地選択の条件として同じように重視されていることがわかる。

また、「モノレールまたは筑豊電鉄」については、「強くそう思う」「そう思う」を合わせて約3割を占める。

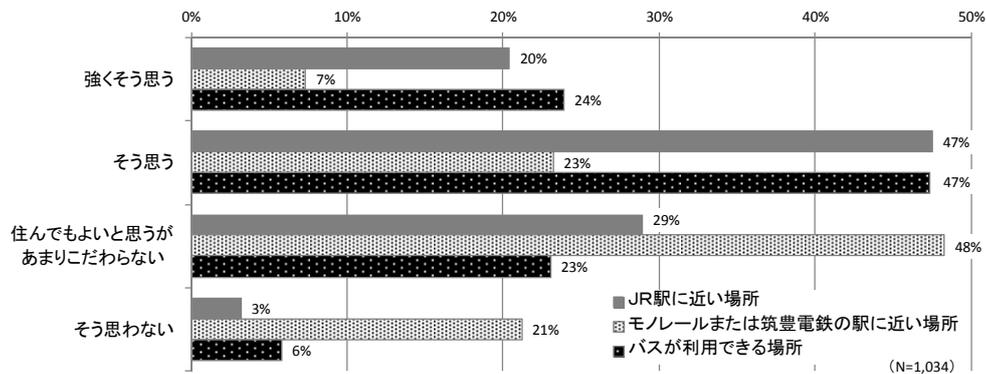


図2-3-(7)-① 駅の近くやバス利用ができる場所での居留意向

公共交通については女性の方が男性よりも重視しており、とりわけバスについて、その傾向が強い。公共交通への依存度が高い学生も必然的に重視傾向が強い。そのほか、「JR駅周辺」については20代、戸畑区、居住歴5年未満等で、「モノレールまたは筑豊電鉄駅」については20代女性、小倉南区等で、また、「バス」については、20代女性、60才以上の女性、小倉北区、戸畑区、パート・アルバイト、主婦等で重視度が高い。

② 選びたい駅周辺地区（JR駅）

さらに、「住むなら、どの駅の近くがよいと思いますか。」という問いかけを行い、順位をつけて3つの回答を求めた。駅周辺の居住希望は、公共交通の利便性だけでなく、駅周辺の街の魅力や住みやすさに関する評価である。

まずJR駅について、1位として選ばれたなかで最も多かったのは「小倉駅」で、約1/3を占め、かなり差があつて「黒崎駅」、「折尾駅」と続く。次いで「戸畑駅」「下曾根駅」「門司駅」「八幡駅」の順で並び、その差は小さい。

1～3位を合わせると、「折尾駅」に対する「黒崎駅」の優位性が高まり、また、「戸畑駅」が「折尾駅」を上回る。また、「八幡駅」の順位も上がり「戸畑駅」「折尾駅」と肩を並べる。

③ 選びたい駅周辺地区（モノレール駅、筑豊電鉄駅）

モノレール駅、筑豊電鉄駅については、上記のJR小倉駅、黒崎駅の周辺部と重ならない区間の主要駅についてたずねた。まず、モノレール駅について、1位として選ばれたなかで最も多かったのは「三萩野駅」、次いで「守恒駅」であった。また、筑豊電鉄駅については、1位として選ばれたなかで最も多かったのは「三ヶ森駅」であるが僅差で「穴生駅」が並ぶ。

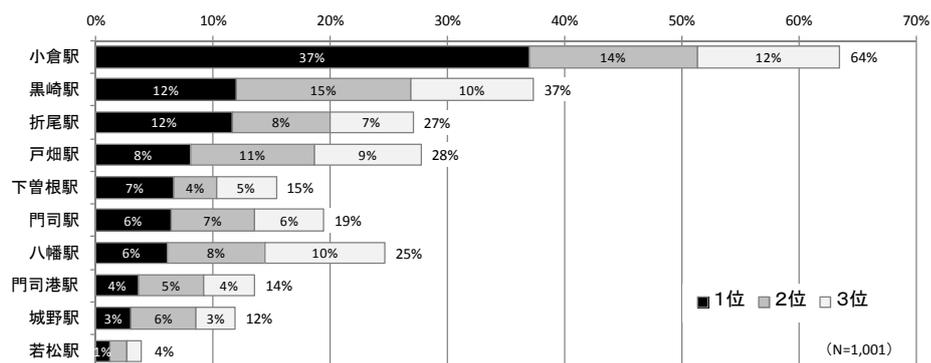


図 2-3-(7)-② 選びたい駅周辺地区 (JR 駅)

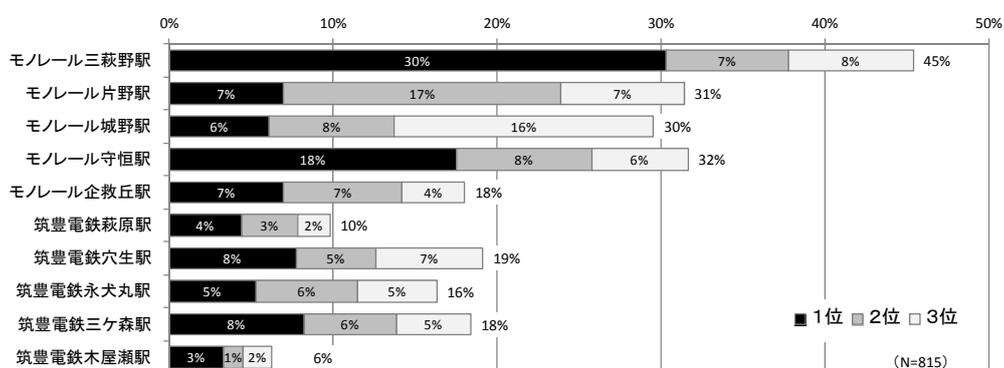


図 2-3-(7)-③ 選びたい駅周辺地区 (モノレール駅・筑豊電鉄駅)

④ バスが利用できる場所に住みたい理由

「バスが利用できる場所に住みたい理由を教えてください」という問いに対して、「高齢になると、車の運転ができなくなるときが来ると思うから」が最も多く、約4割を占める。次いで「マイカーもバスも利用したいから」「自分で車が運転できないから」の順となっている。「運転できない」は女性、「マイカーもバスも利用したい」は男性、また、「経済的理由でマイカーが所有ができなくなるときが来ると思うかもしれない」は30代の回答率が比較的高い。

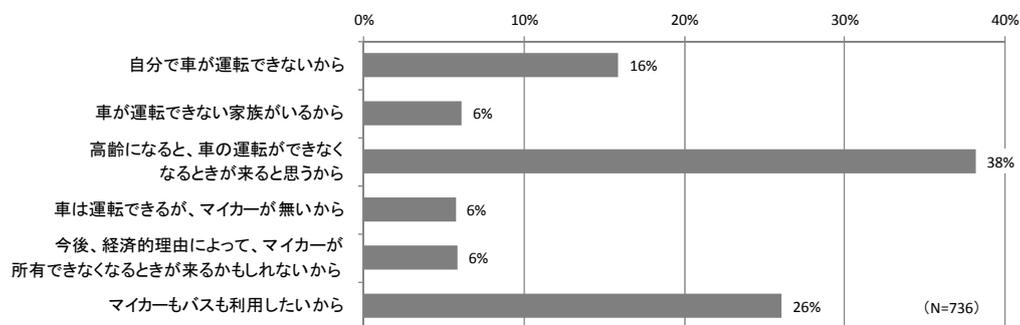


図 2-3-(7)-④ バスが利用できる場所に住みたい理由

表2-3-(7) アンケート集計表(10)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																										
		2-3-(7) JR駅に近い場所での居住意向																										
		①居住意向				②選みたい駅周辺地区(近くの駅)																						
						1位											1~3位計											
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
		強く思う	そう思う	まわりこたわらない	住んでもよいと思うが、あまりこたわらない	そう思わない	門司港駅	門司駅	小倉駅	戸畑駅	八幡駅	黒崎駅	折尾駅	若松駅	城野駅	下曽根駅	その他	門司港駅	門司駅	小倉駅	戸畑駅	八幡駅	黒崎駅	折尾駅	若松駅	城野駅	下曽根駅	その他
合計・平均	1,034	20	47	29	3	4	6	36	8	6	12	11	1	3	6	4	13	19	62	27	24	36	26	4	12	15	9	
性別																												
男性	517	17	47	32	4	3	7	31	8	7	12	13	2	3	7	3	13	19	56	25	22	36	28	4	12	16	7	
女性	517	24	48	26	2	4	5	40	8	5	11	9	0	3	6	6	13	18	67	29	26	37	25	3	11	14	10	
年齢																												
20代	152	34	46	17	3	3	3	47	5	8	11	10	-	3	3	6	11	17	70	30	33	44	32	1	11	9	8	
30代	236	18	49	30	3	2	8	33	8	6	14	11	-	3	8	5	11	20	60	26	28	36	25	4	13	17	8	
40代	232	19	50	29	2	5	6	35	7	7	12	12	1	3	7	2	14	18	63	25	22	41	28	4	10	15	9	
50代	251	19	47	31	3	4	8	36	9	5	10	12	2	3	5	3	18	21	62	28	20	29	24	5	11	13	9	
60代以上	163	15	44	36	6	3	6	31	9	4	11	12	2	2	8	6	10	17	54	26	20	32	22	4	12	20	9	
年齢・性別																												
20代・男性	50	26	48	22	4	6	4	38	8	8	12	12	-	4	-	4	16	20	60	28	30	42	38	2	8	8	6	
30代・男性	123	20	50	26	5	1	7	25	10	6	17	12	-	4	10	3	9	19	53	24	27	38	29	2	13	17	7	
40代・男性	129	18	47	33	3	6	8	36	4	9	9	14	1	4	6	1	16	22	62	26	21	37	26	4	13	16	8	
50代・男性	112	13	52	32	4	2	8	33	6	6	12	13	5	3	6	3	14	21	59	23	19	30	25	8	13	13	10	
60代以上・男性	103	12	40	43	6	3	6	27	11	6	11	15	3	2	9	3	12	15	48	25	18	33	25	5	11	23	5	
20代・女性	102	38	45	15	2	1	2	51	3	8	11	9	-	2	5	7	8	16	75	30	34	45	29	1	12	10	9	
30代・女性	113	17	49	34	1	4	8	41	7	5	10	9	-	3	6	7	13	22	67	28	28	35	20	5	13	18	11	
40代・女性	103	19	54	25	1	4	3	35	12	5	17	10	1	2	9	3	12	12	63	25	22	46	31	5	7	14	11	
50代・女性	139	24	43	29	3	6	7	38	11	4	9	12	-	4	4	3	20	22	64	32	21	29	24	2	9	14	8	
60代以上・女性	60	22	50	23	5	3	7	37	7	2	12	7	2	2	7	12	8	20	65	27	22	30	17	2	15	13	17	
居住地																												
門司区	102	21	50	27	2	21	49	23	2	-	1	-	1	-	2	1	55	83	65	10	4	8	7	2	1	16	4	
小倉北区	201	19	47	31	2	0	1	78	1	1	-	1	-	0	5	1	6	10	20	88	35	17	26	7	1	20	11	13
小倉南区	209	19	47	29	4	2	4	41	1	2	0	0	-	9	30	5	12	20	67	14	12	11	5	1	33	50	11	
若松区	91	18	51	27	4	4	-	26	11	5	2	29	12	-	-	5	12	7	49	30	27	42	60	25	1	-	7	
八幡東区	60	18	43	33	5	2	-	18	15	50	3	5	-	-	-	2	5	3	50	42	75	45	17	-	2	2	3	
八幡西区	298	21	46	30	3	2	1	16	2	6	38	29	-	-	-	3	5	5	44	16	30	69	55	3	2	2	7	
戸畑区	73	30	49	19	1	-	-	29	64	-	-	1	-	-	-	4	5	5	64	95	33	26	12	3	-	4	10	
居住地																												
市街化区域(街なか)	574	23	48	26	3	4	8	44	11	7	10	6	1	3	1	4	14	22	68	35	26	35	20	4	9	7	8	
市街化区域(その他)	445	18	46	32	4	3	4	26	4	4	13	18	1	3	14	4	12	15	53	16	21	38	34	4	14	25	9	
市街化調整区域	15	13	47	33	7	13	-	33	-	7	20	13	-	7	-	-	20	13	67	20	20	40	13	-	7	13	-	
市内居住歴																												
生まれたときから	269	23	42	31	4	5	7	32	9	6	15	7	1	4	7	3	13	19	61	27	26	38	23	3	11	14	4	
5年未満	143	31	50	17	2	1	3	42	7	6	13	11	1	3	5	6	9	15	64	31	31	38	29	4	10	12	8	
5~10年未満	96	25	51	22	2	2	6	40	13	7	9	11	-	1	6	2	13	20	65	32	30	42	28	2	9	9	9	
10~20年未満	145	19	51	30	1	3	6	41	9	5	10	14	-	3	6	3	13	19	62	26	19	37	32	3	11	14	9	
20年以上	381	14	48	33	4	4	7	33	6	6	10	13	2	3	7	4	15	20	60	24	20	32	25	5	13	18	12	
職業																												
正規雇用	380	21	51	24	4	3	7	32	7	7	12	12	2	4	7	2	12	18	59	29	26	38	27	6	12	14	8	
非正規雇用	61	18	54	28	-	8	8	38	5	8	7	11	-	3	7	5	16	33	64	30	25	30	16	-	10	20	10	
パート・アルバイト等	120	20	47	28	6	3	9	28	12	3	13	10	2	4	5	4	16	18	57	26	23	30	28	4	10	12	8	
自営業主	104	18	36	42	4	7	6	37	13	4	9	16	-	-	2	4	18	22	63	23	14	36	29	1	11	13	7	
家族従事者	11	9	45	45	-	9	18	36	-	-	27	-	-	-	9	-	9	36	82	9	-	45	36	-	-	9	-	
主婦	199	20	51	27	2	2	3	44	8	5	10	10	1	2	8	7	9	16	68	32	28	38	24	4	13	15	10	
学生	33	36	52	9	3	-	3	48	6	9	12	3	-	3	-	12	15	12	70	24	30	36	33	-	9	12	21	
無職(その他)	114	22	37	39	2	5	5	36	4	5	15	12	2	3	9	2	13	17	58	18	21	38	29	4	12	22	9	
家族構成																												
単身世帯	148	19	56	22	3	3	5	43	7	3	11	10	2	3	3	6	16	18	62	28	22	37	28	5	8	7	14	
夫婦だけ	231	18	44	35	2	3	5	40	7	7	10	13	1	3	5	4	11	16	64	29	25	37	25	3	9	13	7	
二世帯(子20歳未満)	275	19	52	26	3	2	7	31	8	8	12	12	1	4	8	4	11	17	57	29	29	38	29	4	13	18	8	
二世帯(子20歳以上)	290	25	41	30	4	6	8	35	7	4	12	10	1	3	6	3	16	24	64	23	21	32	23	3	13	15	8	
三世帯(親と子と孫)	61	18	51	31	-	7	5	31	7	7	18	11	-	-	11	2	15	21	59	21	21	44	34	-	10	20	5	
住宅																												
持ち家(一戸建)	449	18	46	32	4	4	6	30	8	5	12	14																

表 2-3-(7) アンケート集計表 (11)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1																										
		2-3-(7) モノレールまたは筑豊電鉄の駅に近い場所での居住意向																										
		①居住意向				③選みたい駅周辺地区(近くの駅)																						
						1位			1~3位計																			
1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11														
強く思う	そう思う	あまりよくない かわらない	住んでもよ いと思うが、 あまりよ くない	そう 思わ ない	モノレール 三萩野 駅	モノレール 片野 駅	モノレール 城野 駅	モノレール 守恒 駅	モノレール 企救 丘駅	筑豊電鉄 萩原 駅	筑豊電鉄 永大 丸駅	筑豊電鉄 三ヶ 森駅	筑豊電鉄 木屋 瀬駅	その他														
合計・平均	1,034	7	23	48	21	30	7	6	18	7	4	8	5	8	3	45	31	30	32	18	10	19	16	18	6	4		
性別																												
男性	517	7	22	49	23	29	8	4	18	9	5	10	5	7	4	42	30	26	32	21	10	21	16	18	7	4		
女性	517	8	25	48	20	32	7	8	17	5	4	6	6	9	2	48	33	33	32	15	10	17	17	19	5	3		
年齢																												
20代	152	13	26	45	15	37	6	9	17	3	3	4	3	12	3	53	38	35	30	12	7	14	18	20	8	3		
30代	236	5	22	51	22	31	5	7	19	5	3	10	7	9	2	43	29	37	31	18	7	17	19	15	3	3		
40代	232	8	22	50	19	28	8	4	21	4	6	8	5	6	5	4	47	29	25	33	16	11	24	16	18	7	5	
50代	251	7	23	48	22	29	8	4	16	9	5	7	6	9	5	3	43	31	27	31	20	14	24	16	21	7	3	
60代以上	163	4	25	45	26	27	7	9	13	15	5	8	6	6	1	3	41	33	24	33	26	9	13	12	17	7	4	
年齢・性別																												
20代・男性	50	8	22	52	18	39	12	2	12	7	-	7	2	12	2	2	54	34	29	20	22	10	12	20	20	5	2	
30代・男性	123	3	21	52	24	24	5	7	18	6	4	14	6	9	2	3	35	26	31	32	18	9	23	19	15	2	4	
40代・男性	129	10	23	49	18	28	8	1	27	5	7	8	2	4	7	4	49	29	27	37	18	8	25	14	18	8	5	
50代・男性	112	10	17	49	24	31	6	2	15	12	5	9	5	6	7	2	40	31	26	32	24	14	22	13	19	9	2	
60代以上・男性	103	3	26	43	28	26	8	7	11	15	4	9	7	9	1	3	38	32	16	31	24	9	16	14	18	11	4	
20代・女性	102	16	28	42	14	36	3	11	19	1	5	2	3	11	3	3	53	40	38	35	7	6	15	17	20	9	3	
30代・女性	113	7	22	50	21	37	6	7	20	3	1	7	7	9	2	1	52	33	44	30	18	6	11	18	16	4	1	
40代・女性	103	6	21	51	21	28	7	7	12	4	6	9	9	10	2	5	44	28	22	27	12	14	21	17	19	5	5	
50代・女性	139	5	27	47	21	28	10	5	16	7	5	5	6	11	3	3	45	31	27	31	17	14	25	19	23	5	4	
60代以上・女性	60	7	22	50	22	30	4	13	17	15	6	6	4	-	4	4	47	34	36	36	28	9	9	11	17	2	4	
居住区																												
門司区	102	4	11	61	25	51	8	8	17	12	-	-	1	-	1	3	65	42	42	30	21	4	4	1	3	4	3	
小倉北区	201	8	23	47	22	59	14	5	17	2	-	1	1	1	-	1	80	58	44	37	14	1	4	1	4	1	3	
小倉南区	209	15	33	37	15	16	4	14	45	16	1	-	-	1	-	4	38	35	46	69	44	1	3	2	2	2	4	
若松区	91	4	10	56	30	25	13	-	5	9	5	23	9	9	-	2	33	20	11	13	11	20	41	25	25	2	2	
八幡東区	60	3	18	55	23	24	7	4	17	11	15	7	2	7	-	7	37	24	20	22	17	26	22	15	11	2	7	
八幡西区	298	6	28	48	18	14	3	1	3	2	9	18	13	22	10	4	25	12	9	10	5	19	40	40	46	16	4	
戸畑区	73	1	11	53	34	52	6	13	10	4	4	2	2	2	2	2	58	35	42	23	6	4	13	10	8	2	2	
居住地																												
市街化区域(街なか)	574	6	20	52	23	42	9	6	14	5	6	8	2	6	1	2	57	38	33	27	12	12	18	9	12	2	3	
市街化区域(その他)	445	10	27	45	19	16	5	6	22	10	3	7	9	11	6	4	30	23	26	38	26	7	21	25	26	11	4	
市街化調整区域	15	-	40	27	33	40	10	-	10	20	10	-	-	10	-	-	60	20	10	20	20	10	10	10	10	10	-	
市内居住歴																												
生まれたときから	269	8	19	52	20	32	7	8	14	6	4	10	3	9	3	2	46	31	30	27	13	13	21	12	19	6	2	
5年未満	143	9	27	48	17	37	4	8	17	6	3	10	3	5	3	4	45	30	34	35	23	5	18	17	14	7	5	
5~10年未満	96	8	25	44	23	39	7	24	3	5	1	3	5	3	3	5	51	39	36	35	16	11	16	15	16	3	3	
10~20年未満	145	5	23	54	18	24	9	2	18	6	8	8	7	9	3	6	45	31	31	29	15	10	22	18	18	3	7	
20年以上	381	7	25	44	24	26	7	6	18	10	4	7	8	9	3	2	44	30	25	34	21	9	18	19	20	8	3	
職業																												
正規雇用	380	8	24	49	19	29	6	4	19	8	6	9	5	6	4	3	44	30	27	32	20	12	23	17	17	6	4	
非正規雇用	61	10	33	39	18	36	4	2	32	10	2	4	2	4	2	2	52	44	26	52	32	6	12	6	6	6	2	
パート・アルバイト等	120	7	21	44	28	27	13	7	20	2	1	10	3	9	5	2	44	29	33	31	14	7	23	14	23	9	3	
自営業主	104	6	15	53	26	30	13	3	12	10	3	8	5	8	5	4	48	38	26	26	18	8	13	13	17	12	4	
家族従事者	11	-	18	55	27	13	-	-	25	13	13	13	13	13	-	-	13	13	15	13	13	13	25	25	-	-	-	
主婦	199	8	24	53	16	34	5	11	15	5	4	4	8	8	2	3	49	33	38	29	17	10	15	19	20	3	3	
学生	33	21	15	42	21	38	-	8	27	-	-	4	-	15	4	4	46	31	38	42	8	4	15	19	23	4	4	
無職(その他)	114	4	27	41	27	28	6	8	11	10	4	11	7	12	-	4	43	28	25	27	13	8	20	20	23	6	5	
家族構成																												
単身世帯	148	9	20	45	26	38	10	6	13	5	5	5	5	10	3	3	53	41	31	29	13	6	14	15	19	8	3	
夫婦だけ	231	6	19	53	22	33	6	5	17	9	4	6	4	8	2	4	47	29	24	29	22	11	16	17	19	4	6	
二世帯(子20歳未満)	275	8	24	51	18	25	6	9	21	6	4	10	7	5	4	2	38	30	34	34	17	10	24	19	18	6	3	
二世帯(子20歳以上)	290	6	26	47	21	30	7	6	17	7	4	8	5	11	3	3	49	31	31	33	18	8	19	14	18	6	3	
三世帯(親と子と孫)	61	15	31	38	16	29	4	2	22	6	6	6	8	8	8	2	45	29	20	29	16	20	22	24	22	12	2	
住宅																												
持ち家(一戸建)	449	7	22	48	23	25	7	4	16	8	4	10	8	11	5	3	38	26	24	32	20	10	24	21	25	10	3	
持ち家(

表 2-3-(7)(8) アンケート集計表 (12)

	回答者数(人) ※2	回答率 (%) ※1																								
		2-3-(7) バスが利用できる場所での居住意向										2-3-(8) 住宅と場所のどちらを優先するか														
		①居住意向				④理由																				
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5										
		強くそう思う	そう思う	ないが、あまりこたわら	住んでもよいと思う	そう思わない	ないから	自分から運転できない	族が運転できない家	車が運転できないから	ら、運転できると、車の	高年齢になると、車の	マイカーが無いから	から、マイカーが所有	が、マイカーが所有	て、マイカーが所有	経済的理由によつ	用したいから	マイカーもバスも利	住宅を優先する	住宅を優先する	どちらかといえば、	どちらともいえない	どちらかといえば、	場所を優先する	
合計・平均	1,034	24	47	23	6	16	6	38	6	6	6	6	6	6	26	5	24	31	35	4						
性別																										
男性	517	15	48	29	8	6	8	36	5	8	35	6	26	31	31	6										
女性	517	33	47	17	4	24	5	40	6	4	19	5	22	31	39	3										
年齢																										
20代	152	32	37	23	8	22	8	9	18	3	19	7	26	28	38	2										
30代	236	17	49	26	8	13	9	27	4	13	29	6	26	31	32	5										
40代	232	25	48	22	5	11	8	40	6	4	28	5	24	34	32	6										
50代	251	24	48	23	5	18	4	50	2	5	22	2	25	30	40	3										
60代以上	163	23	53	20	4	18	2	57	3	3	14	9	21	32	31	7										
年齢・性別																										
20代・男性	50	22	34	34	10	11	11	4	18	4	54	10	26	42	22	-										
30代・男性	123	11	47	31	11	7	10	21	4	13	41	6	28	32	29	5										
40代・男性	129	19	46	28	8	4	8	37	6	4	35	6	29	29	28	7										
50代・男性	112	15	48	31	5	6	7	39	3	11	34	2	26	30	38	4										
60代以上・男性	103	13	57	25	5	7	4	58	3	6	22	8	21	28	32	11										
20代・女性	102	37	38	18	7	26	6	10	18	3	34	5	25	21	46	3										
30代・女性	113	25	50	20	4	19	8	32	4	14	20	6	24	30	35	4										
40代・女性	103	33	50	16	1	17	7	43	6	3	22	3	17	40	37	4										
50代・女性	139	32	47	17	4	25	2	57	1	1	14	1	24	30	42	3										
60代以上・女性	60	42	47	10	2	34	-	55	4	-	4	12	22	38	28	-										
居住区																										
門司区	102	23	49	24	5	14	8	48	3	1	26	9	19	33	32	7										
小倉北区	201	30	46	21	2	21	4	26	10	6	31	4	28	30	33	4										
小倉南区	209	20	48	25	7	18	5	35	9	5	25	7	22	30	37	4										
若松区	91	24	57	14	4	8	12	43	3	8	22	1	23	37	38	-										
八幡東区	60	27	57	13	3	12	8	44	-	4	28	7	20	25	42	7										
八幡西区	298	21	43	27	8	15	5	41	5	6	27	4	27	32	33	5										
戸畑区	73	29	41	23	7	18	6	47	-	12	18	5	25	30	33	7										
居住地																										
市街化区域(街なか)	574	26	48	21	5	18	6	36	7	5	27	4	25	31	34	5										
市街化区域(その他)	445	21	47	25	6	14	6	40	5	7	25	6	23	31	36	4										
市街化調整区域	15	27	40	27	7	-	10	70	-	-	20	13	27	33	27	-										
市内居住歴																										
生まれたときから	269	29	48	17	6	17	7	36	6	3	29	4	27	31	33	4										
5年未満	143	25	38	29	8	21	7	26	9	11	23	7	29	26	32	6										
5~10年未満	96	19	46	27	8	11	6	24	10	8	39	8	26	28	32	5										
10~20年未満	145	18	48	29	5	11	4	42	6	6	28	5	24	35	35	1										
20年以上	381	24	50	22	4	16	6	46	4	5	21	5	21	32	37	5										
職業																										
正規雇用	380	20	47	26	7	7	8	36	4	7	35	4	26	28	37	5										
非正規雇用	61	16	56	21	7	16	5	39	7	7	27	2	30	21	46	2										
パート・アルバイト等	120	33	44	18	5	31	6	32	6	3	17	8	18	47	27	2										
自営業主	104	14	49	31	6	9	6	47	6	3	23	7	19	31	37	7										
家族従事者	11	-	73	27	-	-	-	75	-	-	25	-	27	45	27	-										
主婦	199	30	46	20	5	23	4	42	2	5	22	6	28	30	35	2										
学生	33	39	24	27	9	19	5	5	38	5	29	-	30	30	36	3										
無職(その他)	114	25	54	18	4	21	6	43	8	7	16	8	24	29	31	9										
家族構成																										
単身世帯	148	20	38	33	9	18	2	21	18	5	35	5	24	32	32	7										
夫婦だけ	231	18	52	24	6	17	2	45	3	9	20	4	26	28	37	5										
二世帯(子20歳未満)	275	26	44	23	7	11	10	31	4	7	33	6	27	29	34	4										
二世帯(子20歳以上)	290	30	50	17	3	18	6	43	6	4	22	4	22	34	38	2										
三世帯(親と子と孫)	61	23	49	21	7	16	9	50	-	2	23	8	25	33	26	8										
住宅																										
持ち家(一戸建)	449	21	54	19	6	11	7	51	3	5	21	8	22	31	35	4										
持ち家(集合住宅)	186	27	42	25	6	18	6	37	5	3	30	2	25	34	33	6										
民間賃貸(一戸建)	34	24	44	26	6	17	13	26	-	13	30	9	24	24	35	9										
民間賃貸(集合住宅)	254	26	44	24	6	20	6	21	12	8	29	4	28	30	33	5										
公営・公社・UR賃貸	71	28	37	30	6	28	4	28	7	7	24	3	18	32	44	3										
給与住宅	32	19	34	41	6	6	-	18	12	-	65	3	38	25	34	-										

※1：その他・不明を除くため合計は100%にならない ※2：その他・不明を除くため合計は1,034にならない
 ※3：居住意向の1~2の回答者を対象としている

(8) 住宅と場所のどちらを優先するか

「あなたが住みたい場所に、希望どおりの住宅（賃貸住宅や高齢者施設を含む）が見つからない場合、住宅と場所、どちらを優先して住み替え先を選ぶと思いますか。」という問いに対して、「住宅を優先する」または「場所を優先する」という明確な回答は少ない。「どちらからかといえば」という回答を合わせて「場所を優先する」の方がやや多く約4割、「住宅を優先する」「どちらともいえない」がそれぞれ約3割である。

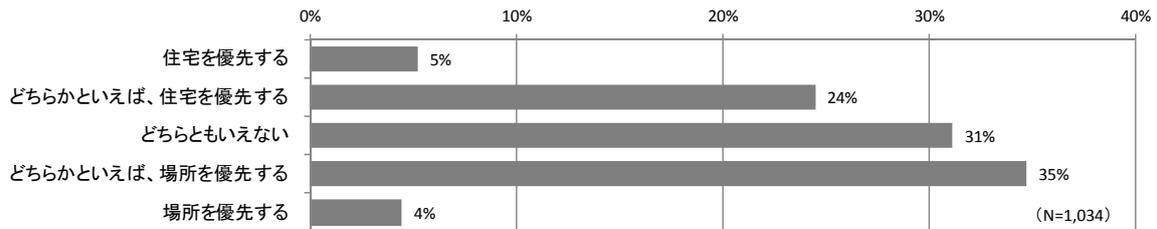


図2-3-(8) 住宅と場所のどちらを優先するか

男性は「住宅」、女性は「場所」を優先する傾向がみられる。

「場所」を優先する傾向が比較的強いのは、20代女性、50代女性、八幡東区、非正規雇用、自営業主、公営・公社・UR賃貸住宅の居住者等である。

2-4 都市づくりに関する意識・考え方

(1) “コンパクトシティ”の認知度・必要性について

① “コンパクトシティ”の認知度

まず、認知度について、「人口減少社会において、国でも地方自治体でも“コンパクトシティ”をめざしたまちづくりが進められるようになっていきます。」と提示した上で、「あなたは、“コンパクトシティ”について知っていますか。」と問いかけた。それに対し、「全く知らない、聞いたことがない」が約6割が、「言葉は聞いたことはあるが、意味はわからない」が約2割、「言葉は知っており、意味はなんとなくわかる」「知っている」が合わせて約2割であった。

認知度は男女とも低いですが、女性よりも男性の方が高い。また、「知っている」の回答率が比較的高いのは、40代男性、八幡東区の居住者である。

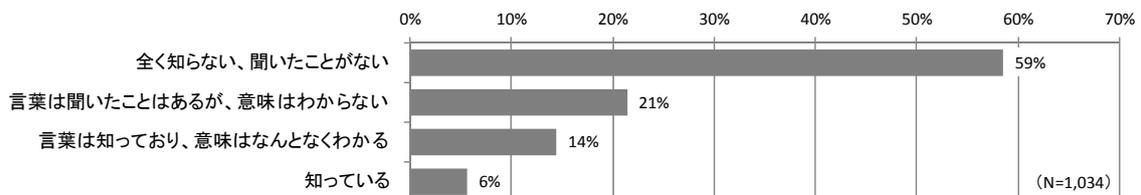


図2-4-(1)-① “コンパクトシティ”の認知度

② “コンパクトシティ”の必要性

さらに、「“コンパクトシティ”とは、公共施設や公共交通などのインフラが比較的整ったエリアを重視して、多くの人々が住めるようにしていこうという考え方です。」と提示した上で、「そのような考え方について、あなたはどう思いますか。」と問いかけた。それに対し、回答は多い順に、「自動車交通量を減らし、環境負荷の小さいまちづくりを進めていくために必要である」「行財政が厳しくなるなかで、効率的なまちづくりを進めていくために必要である」「どこも同じように過疎化していくと都市全体が元気を無くすので、まとまって人が住むエリアを大事にする必要がある」「わからない」の順となっている。ただし、回答数に大きな差はなく、いずれの考え方も偏りなく受け止められている。



図2-4-(1)-② “コンパクトシティ”の必要性

「環境負荷の小さいまちづくり」は60代以上、「行財政コスト節約」は主婦、「まとまって住むエリアを大事に」は50代男性、40代女性、戸畑区、自営業主等の回答率が比較的高い。

(2) 公共施設削減の必要性

「北九州市の公共施設は、人口1人当たりの面積が政令市のなかで最大ですが、人口減少に合わせて公共施設を徐々に減らしていくことが行政改革の課題となっています。」と提示した上で、「そのような考え方について、あなたはどう思いますか。」と問いかけた。

最も多かった回答は「税収が減っていくのでやむを得ない」で約半数を占めたが、「現状を維持すべき」も3割近く、「利用料金などの市民負担が増えても、数は現状を維持すべき」を合わせて約1/3が、数を維持することが必要と考えている。

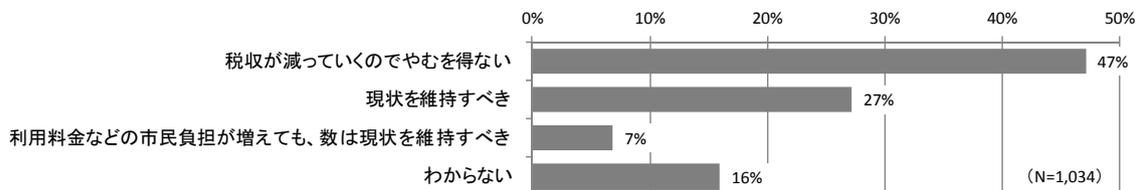


図2-4-(2) 公共施設削減の必要性に関する考え方

「やむをえない」は男性の方が、「現状を維持すべき」は女性の方が多い。また、年齢が若いほど「現状を維持すべき」とする傾向がみられる。ただし、30代男性、自営業主、八幡東区

等では、「やむをえない」とする回答率が比較的高い。

(3) 都市環境を良くする活動への参加意向

「都市環境をより良い状態で次世代へ引き継ごうとする市民活動が市内各所で行われています。」と提示した上で、「自然保護や河川・公園・道路の環境保全などの活動に参加・協力する意向はありますか。」と問いかけた。

「参加・協力する意向がある」という明快な回答は約1割であるが、「条件によっては協力・参加したい」を合わせると過半数であり、さらに「参加できないが何らかのかたちで協力したい」を合わせると、参加または協力したいという人は8割を超える。

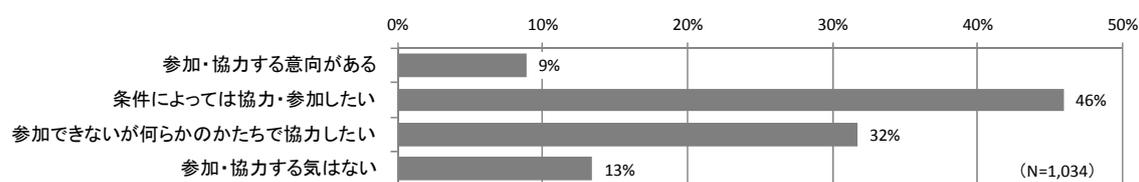


図2-4-(3) 都市環境を良くする活動への参加意向

「参加・協力する意向がある」という回答率が比較的高いのは、50代以上の男性、八幡西区、また、市内居住歴5年以内の人である。一方、「参加・協力する気はない」は年齢が若いほど、また、非正規雇用、学生、単身世帯等で回答率が比較的高い。

「参加・協力する意向がある」「条件によっては協力・参加したい」を合わせて、市内居住歴5年以内の人の参加・協力意識は高いが、5～10年未満では逆に「参加・協力する気はない」とする傾向が強い。

表2-4-(1)(2)(3) アンケート集計表(13)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1															
		2-4-(1) “コンパクトシティ”の 認知度・必要性								2-4-(2) 公共施設を減らす 必要性				2-4-(3) 都市環境を良くする 活動への参加意向			
		①認知度				②必要性											
		1	2	3	4	1	2	3	5	1	2	3	5	1	2	3	4
合計・平均	1,034	6	14	21	59	25	28	23	23	47	27	7	16	9	46	32	13
性別																	
男性	517	9	17	21	53	24	29	25	21	53	24	8	14	10	45	28	16
女性	517	3	11	21	64	26	27	22	25	41	31	6	18	8	46	35	11
年齢																	
20代	152	6	11	16	66	29	29	17	24	38	36	4	21	7	47	31	16
30代	236	6	12	21	61	27	27	19	25	50	26	5	16	10	47	29	14
40代	232	9	15	20	56	23	24	27	25	47	25	6	18	6	48	31	14
50代	251	4	11	24	61	22	27	28	22	48	27	10	12	10	45	32	13
60代以上	163	4	25	23	48	26	34	23	17	50	23	9	14	12	42	36	10
年齢・性別																	
20代・男性	50	8	20	20	52	24	32	20	22	38	36	4	20	4	52	22	22
30代・男性	123	8	13	22	57	25	30	23	19	62	20	5	11	10	46	27	18
40代・男性	129	13	18	16	53	23	23	26	26	52	19	9	17	7	46	29	18
50代・男性	112	7	13	27	53	21	27	29	22	54	27	9	8	13	44	28	15
60代以上・男性	103	5	25	22	48	25	35	23	16	50	24	9	15	14	44	33	10
20代・女性	102	5	7	15	73	31	27	16	25	37	35	4	22	8	44	35	13
30代・女性	113	3	11	20	66	28	24	14	33	37	34	5	21	10	50	32	9
40代・女性	103	4	12	26	58	23	25	29	22	42	33	3	19	6	50	34	10
50代・女性	139	1	9	22	68	23	28	27	22	43	27	10	15	6	46	36	12
60代以上・女性	60	2	25	25	48	27	32	22	20	52	22	8	13	10	38	40	12
居住区																	
門司区	102	3	18	24	56	25	24	27	23	46	24	9	19	10	50	29	11
小倉北区	201	7	17	20	56	30	30	20	19	51	23	9	15	6	50	31	13
小倉南区	209	6	12	18	64	24	27	20	29	44	27	5	17	8	44	33	15
若松区	91	3	12	18	67	18	27	27	24	45	32	3	15	4	49	33	13
八幡東区	60	13	20	17	50	18	33	27	17	55	27	3	13	3	58	25	13
八幡西区	298	4	12	24	59	28	28	22	22	46	30	7	16	13	42	32	14
戸畑区	73	7	18	27	48	19	27	29	23	47	29	11	11	10	40	37	14
居住地																	
市街化区域(街なか)	574	6	16	20	57	26	28	24	20	48	26	8	16	7	48	32	13
市街化区域(その他)	445	4	11	23	61	24	28	22	26	46	29	6	16	11	44	31	14
市街化調整区域	15	7	27	13	53	27	13	33	27	40	27	7	20	7	27	47	20
市内居住歴																	
生まれたときから	269	4	16	22	58	28	26	20	26	44	35	3	16	7	45	33	14
5年未満	143	9	14	18	59	23	35	17	24	47	31	8	13	13	52	23	12
5~10年未満	96	7	9	15	69	26	27	23	24	42	30	7	19	7	42	31	20
10~20年未満	145	5	13	23	59	21	28	26	24	41	28	9	18	10	50	28	12
20年以上	381	6	15	23	56	25	27	27	19	53	19	8	15	9	44	35	12
職業																	
正規雇用	380	9	16	22	54	26	29	23	21	51	27	7	12	10	48	27	14
非正規雇用	61	3	20	21	56	18	25	28	30	41	30	7	18	7	44	30	20
パート・アルバイト等	120	3	9	22	66	16	30	25	29	38	29	10	21	8	40	40	13
自営業主	104	7	21	21	51	20	35	28	16	57	21	8	11	10	48	34	9
家族従事者	11	-	18	27	55	18	18	18	36	36	27	-	36	9	55	36	-
主婦	199	3	12	21	64	33	22	20	26	47	26	4	20	7	47	35	11
学生	33	9	12	12	64	18	36	21	24	27	42	12	15	6	48	24	21
無職(その他)	114	3	12	22	63	31	27	22	19	45	25	8	18	10	40	35	15
家族構成																	
単身世帯	148	9	11	18	61	21	31	21	26	48	27	5	16	11	42	27	20
夫婦だけ	231	6	15	23	56	27	25	28	20	51	21	9	17	9	49	28	14
二世帯(子20歳未満)	275	7	12	15	66	26	24	23	26	45	28	8	17	9	51	30	10
二世帯(子20歳以上)	290	3	17	26	54	24	33	20	20	46	29	6	15	7	41	37	15
三世帯(親と子と孫)	61	3	23	30	44	25	25	23	28	43	33	2	18	10	48	36	7
住宅																	
持ち家(一戸建)	449	5	15	24	55	21	30	25	22	47	30	6	13	10	46	32	13
持ち家(集合住宅)	186	4	20	22	54	31	26	24	19	54	18	12	13	9	50	31	10
民間賃貸(一戸建)	34	9	6	21	65	21	32	18	26	53	21	3	24	6	53	32	9
民間賃貸(集合住宅)	254	8	11	16	65	29	25	20	25	43	30	6	19	7	44	32	17
公営・公社・UR賃貸	71	3	11	23	63	21	28	27	24	38	27	6	27	11	38	35	15
給与住宅	32	3	19	19	59	25	31	9	28	56	25	3	16	9	44	25	22

※1: その他・不明を除くため合計は100%にならない ※2: その他・不明を除くため合計は1,034にならない

(4) 都市計画制度の認知度

「土地をどのように利用するかについて、都市計画に基づいて規制や誘導を行うため各種の地域指定が行われています。」と提示した上で、線引きと用途地域について問いかけを行った。

① 市街化区域・市街化調整区域（線引き）の認知度

「市街化区域・市街化調整区域について知っていますか。」という問いに対し、「全く知らない、聞いたことがない」が約4割、「言葉は聞いたことはあるが、意味はわからない」が約3割、「言葉は知っており、意味はなんとなくわかる」が約2割、「知っている」が約1割である。

女性よりも男性の方が、また年齢が高いほど認知度が高く、60代以上の男性では「知っている」、「言葉は知っており、意味はなんとなくわかる」の合計が約6割を占める。また、自営業主も認知度が比較的高い。

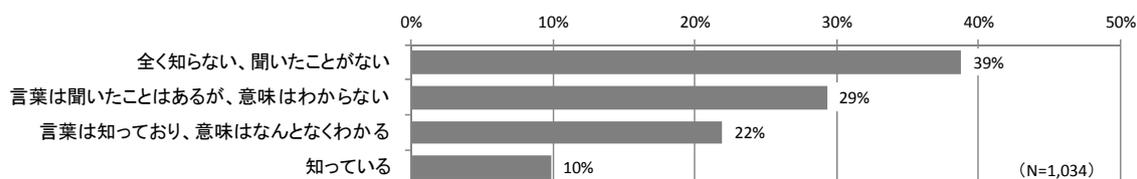


図2-4-(4)-① 市街化区域・市街化調整区域（線引き）の認知度

② 用途地域の認知度

「用途地域について知っていますか。」という問いに対して、「全く知らない、聞いたことがない」が約5割で、市街化区域・市街化調整区域よりも用途地域の方が認知度が低い。

最も認知度が高い60代以上の男性でも、「知っている」「言葉は知っており、意味はなんとなくわかる」の合計は約4割である。

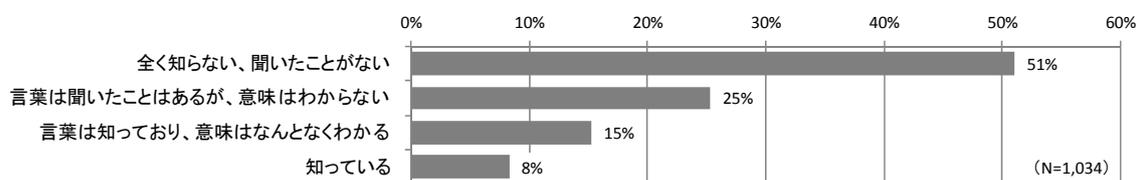


図2-4-(4)-② 用途地域の認知度

表 2-4-(4)(5) アンケート集計表 (14)

	回答者数(人) ※2	回答率(%) ※1													
		2-4-(4) 都市計画制度の認知度								2-4-(5) 地元ルール(地区計画等)の必要性・協力意識					
		①市街化区域・市街化調整区域				②用途地域									
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6
合計・平均	1,034	10	22	29	39	8	15	25	51	9	28	40	12	9	2
性別															
男性	517	15	26	26	33	13	18	24	45	9	30	37	13	8	3
女性	517	5	18	32	45	4	12	27	57	9	26	42	11	10	1
年齢															
20代	152	5	12	24	59	5	9	23	63	9	24	35	17	14	1
30代	236	7	17	25	50	8	10	25	58	8	24	41	11	11	3
40代	232	9	20	33	38	9	18	26	47	6	31	34	15	10	3
50代	251	12	24	34	31	9	16	26	49	10	26	49	9	5	0
60代以上	163	17	38	28	18	10	24	26	39	12	37	36	7	4	3
年齢・性別															
20代・男性	50	8	16	26	50	6	16	22	56	6	28	42	10	12	2
30代・男性	123	10	19	25	46	11	10	27	53	9	20	36	15	14	5
40代・男性	129	16	25	26	34	14	19	22	45	6	33	30	16	9	5
50代・男性	112	21	24	29	26	16	20	22	42	12	29	43	13	3	1
60代以上・男性	103	18	41	26	15	15	27	25	33	10	39	39	6	3	3
20代・女性	102	3	10	24	64	4	6	24	67	11	22	31	21	15	1
30代・女性	113	4	16	25	55	4	10	23	63	8	28	46	7	9	2
40代・女性	103	2	15	42	42	3	17	30	50	6	29	39	13	12	-
50代・女性	139	4	23	38	35	4	14	29	54	8	24	55	6	6	-
60代以上・女性	60	13	33	30	23	3	18	28	50	15	33	32	8	7	3
居住区															
門司区	102	12	25	29	33	10	19	25	46	10	29	36	12	10	2
小倉北区	201	8	20	30	41	8	17	23	52	7	27	39	11	11	3
小倉南区	209	13	26	25	35	11	14	27	49	9	28	39	12	7	3
若松区	91	13	19	30	38	7	18	19	57	11	26	44	9	8	1
八幡東区	60	10	18	35	37	10	15	22	53	5	40	38	10	5	2
八幡西区	298	8	20	28	44	7	13	28	52	10	27	39	14	8	2
戸畑区	73	7	26	37	30	7	15	30	48	7	26	47	8	11	1
居住地															
市街化区域(街なか)	574	9	21	31	39	9	16	25	50	9	29	39	11	9	2
市街化区域(その他)	445	11	23	28	38	7	15	25	52	8	27	41	13	8	2
市街化調整区域	15	-	27	20	53	-	7	40	53	13	27	13	7	20	20
市内居住歴															
生まれたときから	269	10	18	30	42	9	16	27	49	7	27	39	15	9	2
5年未満	143	13	15	29	43	11	11	24	54	13	24	41	10	11	1
5~10年未満	96	5	21	23	51	7	14	20	59	7	26	31	15	17	4
10~20年未満	145	8	22	30	40	6	16	26	52	9	35	32	14	8	1
20年以上	381	11	28	30	31	8	17	26	49	9	28	45	9	6	3
職業															
正規雇用	380	13	23	29	35	11	18	25	46	11	30	38	11	7	2
非正規雇用	61	10	26	26	38	8	15	21	56	5	34	41	11	7	2
パート・アルバイト等	120	4	19	35	41	3	12	31	55	5	27	37	14	13	2
自営業主	104	16	31	29	24	15	20	28	37	5	38	36	13	9	-
家族従事者	11	-	18	27	55	-	18	9	73	-	-	45	27	27	-
主婦	199	4	20	30	47	2	13	26	60	9	27	44	10	8	2
学生	33	9	9	18	64	12	9	18	61	12	21	33	9	18	6
無職(その他)	114	11	19	31	39	9	13	25	54	10	23	43	12	7	5
家族構成															
単身世帯	148	13	20	25	43	14	14	22	51	9	20	38	11	19	3
夫婦だけ	231	13	29	30	29	8	18	31	43	9	31	40	11	8	1
二世帯(子20歳未満)	275	9	16	27	48	6	12	25	57	8	28	40	13	9	1
二世帯(子20歳以上)	290	6	24	32	38	6	18	23	52	8	30	39	13	5	4
三世帯(親と子と孫)	61	11	20	31	38	13	10	23	54	16	30	41	7	5	2
住宅															
持ち家(一戸建)	449	12	24	32	32	8	17	25	50	10	29	42	11	5	2
持ち家(集合住宅)	186	11	26	33	30	10	19	32	39	9	37	43	8	2	1
民間賃貸(一戸建)	34	9	21	29	41	12	9	32	47	6	35	29	15	12	3
民間賃貸(集合住宅)	254	8	16	24	52	9	11	20	60	8	22	36	12	19	3
公営・公社・UR賃貸	71	7	21	21	51	6	10	21	63	8	18	35	24	13	1
給与住宅	32	-	25	28	47	3	19	31	47	3	28	41	16	9	-

※1: 複数回答のため合計は100%にならない ※2: その他・不明を除くため合計は1,034にならない

(5) 地元ルールの必要性・協力意識

「都市計画では用途地域指定によって建物の用途や建ぺい率、容積率などを規定していますが、さらに、地元が協力してより効力のあるルール（地区計画）をつくることができます。この地元ルールによって、生活環境の悪化につながる高層マンションやパチンコ店、風俗店、工場などの規制が可能になります。」と提示した上で、「そのような地元ルールづくりについて、あなたは協力したいと思いますか。」という問いかけを行った。

それに対して、「地元ルールづくりに積極的に協力したい」は約1割であるが、「まわりで地元ルールづくりの動きがあれば協力したい」を合わせると4割近くが協力の意向を示している。さらに、「今住んでいる場所では心配ないが、もし生活環境の悪化が心配な場所に住んでいれば協力すると思う」を合わせると8割近くを占め、生活環境の保全を願う人が多いことがわかる。

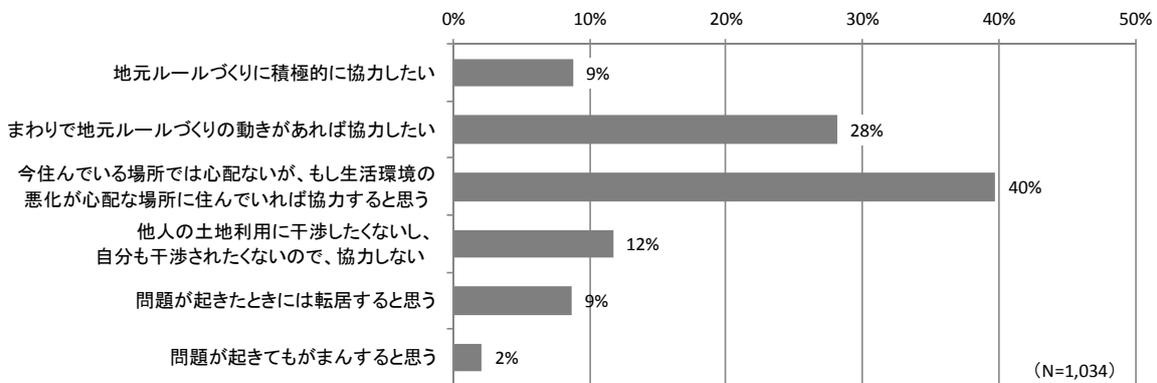


図2-4-(5) 地元ルールの必要性・協力意識

60代、八幡東区、市内居住歴10～20年未満、自営業主、三世帯世帯、持ち家（集合住宅）の居住者等で、協力意識が高い傾向にある。

(6) 都市景観に関する意識

① 都市景観への関心

「あなたは普段、都市の景観（街並みや風景）に関心がありますか。」という問いに対して、「かなり関心がある」が約1割、「やや関心がある」を合わせて、約7割である。

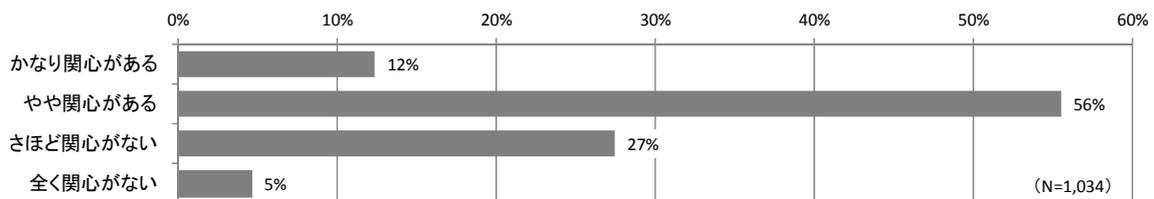


図2-4-(6)-① 都市景観への関心

男性よりも女性の方が、また年齢が高いほど関心が高い。

若松区、戸畑区、三世帯世帯、持ち家（集合住宅）の居住者等で、関心が高い傾向にある。

② 都市景観ルールの必要性

「都市の“顔”となる駅前や景観・風景の保全が望ましい場所で、建物の色彩や素材、屋外広告の色彩や大きさなどについて、何らかのルールが必要だと思いますか。」という問いに対して、「ぜひ必要と思う」が約2割、「やや必要と思う」を合わせて約8割近くが都市景観ルールの必要性を感じている。

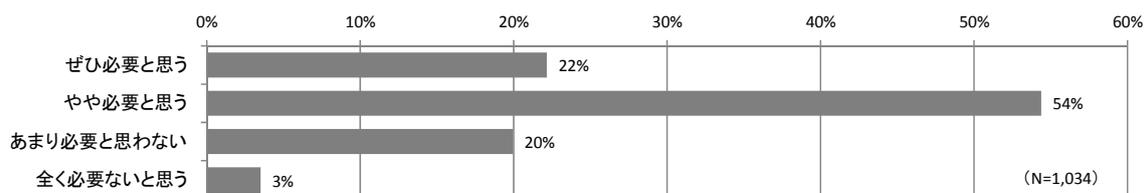


図 2-4-(6)-② 都市景観ルールの必要性

男性よりも女性の方が、また、年齢が高いほど必要性を感じる傾向にある。60代以上の女性では、約4割が「ぜひ必要」と回答している。また、持ち家（集合住宅）の居住者等で「ぜひ必要」の回答率が比較的高い。

(7) 防災情報マップの認知度

「あなたは、全戸に配布され、インターネットでも見ることができる『北九州市防災情報マップ』を知っていますか。」という問いに対して、「見たことがあり、自宅周辺などの情報もだいたい把握している」「わかりやすい場所に置いている」及び「インターネットを利用している」を合わせて、認知しているという回答は約2割である。これは、「全く知らない、聞いたことがない」という回答を下回り、防災情報マップの認知度は低いことがわかる。

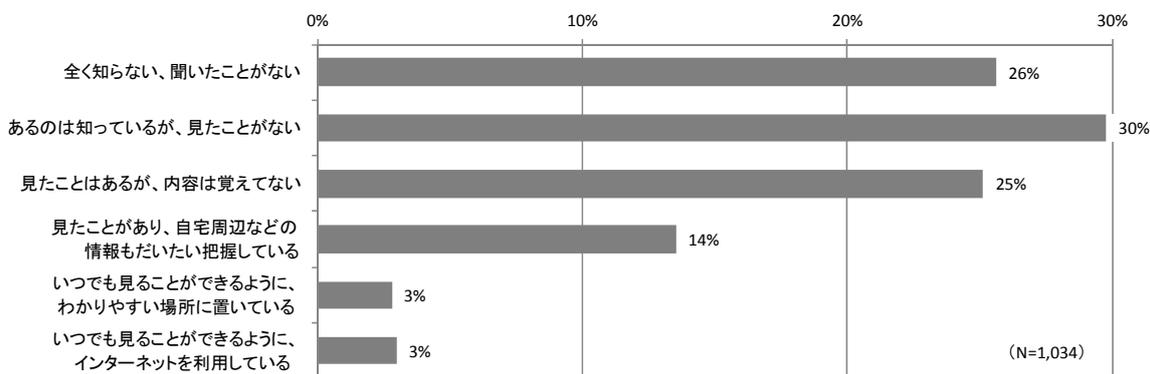


図 2-4-(7) 防災情報マップの認知度

年齢が高いほど認知度が高く、なかでも60代以上の女性の認知度が高い。また、自営業主、持ち家（集合住宅）の居住者等の認知度が比較的高い。

表 2-4-(6)(7) アンケート集計表 (15)

	回答者数(人) ※2	回答率 (%) ※1													
		2-4-(6) 都市景観に関する意識								2-4-(7) 防災情報マップの認知度					
		①都市景観(街並みや風景)への関心				②都市景観ルールの必要性									
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6
		かなり関心がある	やや関心がある	さほど関心がない	全く関心がない	ぜひ必要と思う	やや必要と思う	あまり必要と思わない	全く必要ないと思う	全く知らない、聞いたことがない	見たことは知っているが、覚えていない	見たことはあるが、内容がわからない	見たことがあり、自宅周辺の情報が、内容がわかりやすい場所に置いてある	いつでも見ることができ、利用している	いつでも見ることができ、利用している
合計・平均	1,034	12	56	27	5	22	54	20	3	26	30	25	14	3	3
性別															
男性	517	13	52	28	7	21	52	21	6	25	31	23	14	3	4
女性	517	12	59	27	2	23	57	19	1	26	29	27	13	3	2
年齢															
20代	152	11	47	37	6	14	54	27	5	37	28	23	6	3	3
30代	236	9	56	29	6	22	50	24	3	31	28	28	10	2	2
40代	232	7	60	26	6	20	53	23	4	22	31	25	16	3	3
50代	251	14	59	24	3	23	59	15	3	24	27	26	14	4	4
60代以上	163	24	52	23	2	32	55	11	2	15	35	23	21	2	4
年齢・性別															
20代・男性	50	8	46	36	10	14	50	24	12	34	32	16	4	6	8
30代・男性	123	10	51	30	9	23	42	30	5	33	31	24	11	2	1
40代・男性	129	12	54	25	9	19	51	21	8	24	27	26	17	2	4
50代・男性	112	13	54	28	6	19	58	19	4	23	27	26	13	3	7
60代以上・男性	103	19	52	25	3	28	57	12	3	14	40	20	18	3	5
20代・女性	102	12	47	37	4	14	56	28	2	38	26	26	7	1	1
30代・女性	113	8	62	28	2	21	59	18	2	29	25	32	9	2	4
40代・女性	103	2	67	28	3	20	54	25	-	20	37	22	15	5	1
50代・女性	139	15	63	22	1	27	60	12	1	24	28	27	15	5	1
60代以上・女性	60	32	50	18	-	38	52	10	-	17	27	27	27	2	2
居住区															
門司区	102	12	56	27	5	21	58	17	5	29	25	25	13	4	4
小倉北区	201	10	52	32	5	20	53	22	4	27	20	27	19	4	2
小倉南区	209	11	56	28	4	21	55	22	3	23	35	23	14	1	3
若松区	91	14	64	19	3	24	57	15	3	34	31	19	11	2	3
八幡東区	60	20	50	25	5	23	55	22	-	25	38	15	13	3	5
八幡西区	298	12	55	29	4	23	54	19	3	23	31	30	12	2	2
戸畑区	73	15	59	19	7	25	49	19	7	23	36	23	7	5	5
居住地															
市街化区域(街なか)	574	11	56	27	5	23	55	19	3	26	26	26	15	4	2
市街化区域(その他)	445	13	55	27	4	22	54	21	3	24	35	24	11	2	4
市街化調整区域	15	13	40	40	7	7	53	33	7	40	27	7	27	-	-
市内居住歴															
生まれたときから	269	11	52	30	7	17	54	25	4	25	33	24	12	3	4
5年未満	143	10	60	27	3	24	50	22	3	31	26	29	12	2	1
5~10年未満	96	16	52	25	7	17	54	23	6	41	25	21	8	2	3
10~20年未満	145	10	58	30	3	21	61	14	3	23	32	22	18	1	3
20年以上	381	14	56	26	4	27	54	17	3	21	30	27	15	4	3
職業															
正規雇用	380	13	57	25	5	21	54	20	4	24	33	24	12	3	3
非正規雇用	61	11	59	23	7	21	62	11	5	25	34	25	11	2	3
パート・アルバイト等	120	10	57	27	7	23	47	27	3	32	24	23	15	3	3
自営業主	104	11	52	33	5	20	54	22	4	20	31	22	22	3	2
家族従事者	11	-	45	55	-	36	36	27	-	9	36	27	27	-	-
主婦	199	15	58	26	1	23	59	18	1	24	25	30	15	4	2
学生	33	15	39	36	9	18	48	24	9	48	18	24	-	3	6
無職(その他)	114	11	52	32	5	25	55	18	3	26	33	26	10	1	4
家族構成															
単身世帯	148	9	56	28	7	19	55	21	5	34	30	21	7	5	3
夫婦だけ	231	16	57	26	1	25	58	15	2	25	29	26	16	2	2
二世帯(子20歳未満)	275	10	56	31	4	23	49	25	3	24	24	32	16	4	1
二世帯(子20歳以上)	290	13	52	27	8	22	54	19	5	24	34	21	14	2	4
三世帯(親と子と孫)	61	16	62	21	-	16	64	18	2	18	41	21	10	2	8
持ち家(一戸建)	449	12	59	24	5	23	56	18	3	21	32	24	15	3	3
住宅															
持ち家(集合住宅)	186	16	61	20	2	27	56	15	2	20	30	25	20	3	1
民間賃貸(一戸建)	34	12	44	38	6	24	44	26	6	26	18	29	18	3	6
民間賃貸(集合住宅)	254	10	55	30	6	19	54	22	4	38	26	24	6	3	3
公営・公社・UR賃貸	71	15	32	46	6	18	42	32	7	24	27	31	11	1	6

※1: 複数回答のため合計は100%にならない ※2: その他・不明を除くため合計は1,034にならない

3 まとめと考察

以上のアンケート結果をもとに、北九州市にふさわしいコンパクトな都市づくりという視点から考察を行う。

① コンパクトシティの考え方は広まるか

まず、コンパクトシティの認知度について、知っている、何となくわかるという人は約2割と少なかったが、その考え方を紹介したところ8割近くがそれを受け止め、「行財政」「環境」「都市活力」の3つの基本的な視点に対して理解を示した。今後、コンパクトシティについて市民の認知や理解を拡げていくことは十分可能と思われる。

② 市民の住み替え行動はコンパクトシティ化の方向に進むか

市民の暮らしの実感においても、コンパクトシティに向かう意識は形成されつつある。

現住地を比較的住みよいと感じている人は約8割を占めるが、空き家の増加や日用品店舗の減少に不安や不便を感じている人が約3割、将来そうなる予想している人を合わせると約6割が不安を抱えている。空き家は今後確実に増えていくが、現段階では空き家の増加よりも店舗の減少の方が問題視されている。日常の買い物は、公共交通とともに、現住地を評価するときにも、また住み替えを想定する場合でも最大の関心事である。それらの条件が悪化して車に依存しないと日用品も買えなくなったときに、住み続けることは難しいと感じる人が半数を超え約6割となる。マイカーも利用できず“買物弱者”となっても現住地に住み続けたいという人は1割未満である。

今回の調査では、市街化区域内であれば街なかとそれ以外の場所による回答傾向にあまり差はなく、現居住地を住み良いと感じている人の割合もほとんど変わらない。そのなかで、評価の差が最も大きいのは公共交通の利便性である。今後、バス運行サービスが低下していけば、街なか以外の場所で、住み続けることが難しいと感じる人が増えていくのは避けられない。街なか以外の居住者は、住み替えるならバスが利用できる場所がよいと思う人が約7割、JR駅に近い場所がよいと思う人が約6割であり、このような公共交通指向型の住み替えを通じて、今後、コンパクトシティ化が進んでいく可能性は高いと考える。

さらに、公共施設の数について、減らすべきでないという意見が約1/3を占めるが、約半数はやむを得ないと考えており、人口減少が大きい地区では、今後削減が避けられず、街なかへの住み替えが進む要因となっていくと思われる。

③ 多極型のコンパクトシティは成立するか

コンパクトシティの考え方は、都心とその周辺を偏重するものという誤解をうけやすいが、実際には、それぞれの都市の規模や特性に応じた展開が必要である。基本的な方向は、地域の核となるエリアに都市機能の集約立地を推進し、その周辺に多くの人々が住めるような都市づくりを進めることであり(1)、都市規模が大きければ多核型となるのが必然である。元より

多極的な北九州市のコンパクトシティ化の方向は、既存の拠点地区のポテンシャルを十分活かせるものであることが望ましい。

上記のように、公共交通指向型の居住地選択が進むことが予想されるが、最も人気が高いのは「小倉駅」であり、JR駅周辺に住みたい人の1/3が都心を第1位に上げている。次いで「黒崎駅」「折尾駅」「戸畑駅」「下曽根駅」「門司駅」「八幡駅」と続くが、それぞれが一定の支持を得ており、地元の駅を支持する傾向は強い。また、住みたい市区町村をたずねても、現在の居住区を選ぶ傾向は強く、住み替え先として地元の駅周辺を選びたい人は多い。

それぞれの駅を中心とする拠点地区には、旧5市時代から形成、更新、拡充されてきた都市機能のストックがあり、培われてきた歴史や文化、地域の特色、社会資本など居住再生に役立つ条件はある程度備わっている。また、駅の改築や都市再生プロジェクト等によって、駅周辺の魅力は高まっている。

一方、住宅購入を希望する人の約2/3は住宅の資産価値を重視しており、なかでも、市外から移り住んで間もない若い世代はその傾向が強い。地価が維持できる可能性があるのは駅の近くであり、そこで需要に応える良質な住宅の供給が進めば、多極型のコンパクトシティ成立の可能性は高く、また、市外からの住み替え促進につながると思われる。

④ どのような“住まい”が望まれているか

持ち家・戸建て志向は根強く、今回の調査でも住み替えるなら選びたい住宅として持ち家・戸建てが最も多く3割を上回った。しかし、経年的にみると持ち家・戸建て志向はかなり後退している(2)。かつては、持ち家・戸建てに住めるなら不便な場所でも我慢するという選択が大勢であった。しかし今は逆転し、上記のように、生活利便性重視が多数派である。住み替えるならば「住宅」と「場所」のどちらを優先するかという問いに対しても、回答は「場所」の方が多かった。しかし、「場所」優先が約4割であったのに対し「住宅」優先は約3割、また、「どちらともいえない」も約3割であった。“住まい”選びの条件として「場所」も「住宅」も重視度に大きな差はなく、やはりどちらも同じように大事と考えられている。

望ましい住宅の条件として、「自然災害に対する安全性」が最も重視されるのは当然の結果であり、また、「日照やプライバシー」「騒音がなく静かであること」も必須条件とする人が約3割を超え、重視しないという人は1割未満である。住宅価格、家賃、交通などの諸条件がいくら希望どおりでも、自然災害、日照やプライバシー、騒音について問題があれば、選ばれる可能性は小さい。

一方、「眺望」「建物の外観のデザイン」を必須条件とする人は1割程度であるが、女性やマンション購入希望者は比較的重視する傾向にある。分譲マンションの場合、「眺望」や「建物の外観のデザイン」は価格や販売競争力を高める条件となっているが、今後“住まい”選びの決め手となる条件として、さらに重要性を増していくと思われる。

⑤ コンパクトシティ化は良好な都市環境の形成につながるか

多くの人が住みたいと思う場所ではマンション等の集合住宅の建設が進むことが見込まれるが、駅周辺の用途地域は主に商業地域であり、建築基準法の日影規制の適用がない。また、住商の混在する場所では騒音問題、夜間照明問題なども発生しやすい。駅から少し離れた場所では、多くの人が望む住宅専用、住宅中心の土地利用が行われているが、街なかでは高さ規制がない住居系用途地域が指定されていることから、低層住宅地のなかにマンションやアパートが建てられ生活環境が阻害される恐れもある。用途地域に関する市民の認知度は低く、問題が生じてはじめて知るといったケースがほとんどである。

日照やプライバシー、騒音、さらに眺望といった多くの人が“住まい”に求める要件は、何らかのコントロールがなければ保障されない。コンパクトシティ化を良好な都市環境の形成につなげていくためには、地区計画をはじめ地元住民の合意にもとづくルールづくりが課題である。今回の調査では、建物の用途、建て方や都市景観に関する地元ルールづくりに協力の必要性を感じている人は約8割、また、都市環境を良くする活動への参加・協力に前向きな人も8割を超えた。生活環境や都市環境の保全、改善を願う人は多く、そのような意識を喚起し、行動につなげていくための対策について、いっそうの強化が必要と考える。

おわりに

本調査研究は、住宅・居住地の選好性や生活環境、都市環境に関する意識等の把握を目的に、北九州市の居住者を対象とするアンケート調査を実施した。その結果から、近年の住み替え動向の基調となっている市民意識をある程度把握することができたと考える。

具体的な政策に結びつけていくためには、さらに検討、考察が必要であり、また、市民意識の動向を把握するための調査を繰り返し実施することが課題と考える。

補注

- (1) 国土交通省では、平成25年4月に「都市再構築戦略検討委員会」を設置し、地方都市・大都市の都市構造を再構築していくための施策について検討を行い、集約型の都市構造を実現するために、地域の核となるエリアに都市機能（総合病院、商業施設、訪問看護・介護等）の集約立地を推進するという方向を示した。
- (2) 国と市による住生活総合調査（2003年度までは住宅需要実態調査）によると、住み替え時に選びたい住宅として、持ち家（一戸建）は、2003年は50%、2008年は43%であった。

参考文献

- 1) 伊藤解子（2013）「市民意識と都市づくりの課題」、『都市政策研究所紀要 第7号』、北九州市立大学都市政策研究所、pp13-36
- 2) 伊藤解子（2012）「都心居住に関する市民意識」、『地域課題研究』、北九州市立大学都市政策研究所、pp1-20

地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題

内 田 晃

1. はじめに

(1) 研究の背景

近年、ライフスタイルや余暇活動の多様化、健康ブームの盛り上がりなどに伴い、人々の「歩くこと」への関心が高まっており、各地で市町村、商工団体、鉄道会社など様々な主体が主催するウォーキングイベントが開催されている。専門ガイドによる案内を聞きながら歩いて観光地やご当地グルメを楽しむ、いわゆる「まち歩き」のプログラムを提供している団体が多くの都市に生まれ、テレビでまち歩き番組が放映されるなど、多様なニーズに対応した多様な取り組みが見られる。バスで移動しながら観光スポットだけを巡り、その都市の表面を見るに過ぎなかった既存の観光スタイルと違い、歩くスピードでゆっくりと見て回るとは、その都市が醸し出す表情、そこで暮らす市民の生活情景を五感で感じることができる。滞在時間が長くなり地域の経済活性化にも寄与するという意味で、観光産業としての優位性も高い。

イギリスには「フットパス」という概念が多くの市民の間に定着している。フットパスとは森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く【Foot】ことができる小径（こみち）【Path】の意味¹⁾で、元々は大地主が囲い込んでいた私有地の中を国民が歩くことができるように主張した通行権の獲得運動が発祥である。イギリス国内には総延長4,000km以上のフットパスが整備されている。年間約3,500万人の利用者が消費する総額は約1兆2000億円²⁾にもものぼり、多くの経済効果を創出する産業として認識されている。日本でも北海道、山形県、茨城県、熊本県などの市町村でフットパス施策が推進されており、その多くが交流人口獲得に効果をあげるとともに、他地域との間でフットパスを通じた交流も進んでいる。フットパスは自然を感じることでできる小径そのものを資源として活用するものであり、特別な観光地がない“普通の”地域においても、施策を展開できるという意味で、持続可能で普遍的な地域活性化の一手法として注目される。

(2) 研究の目的

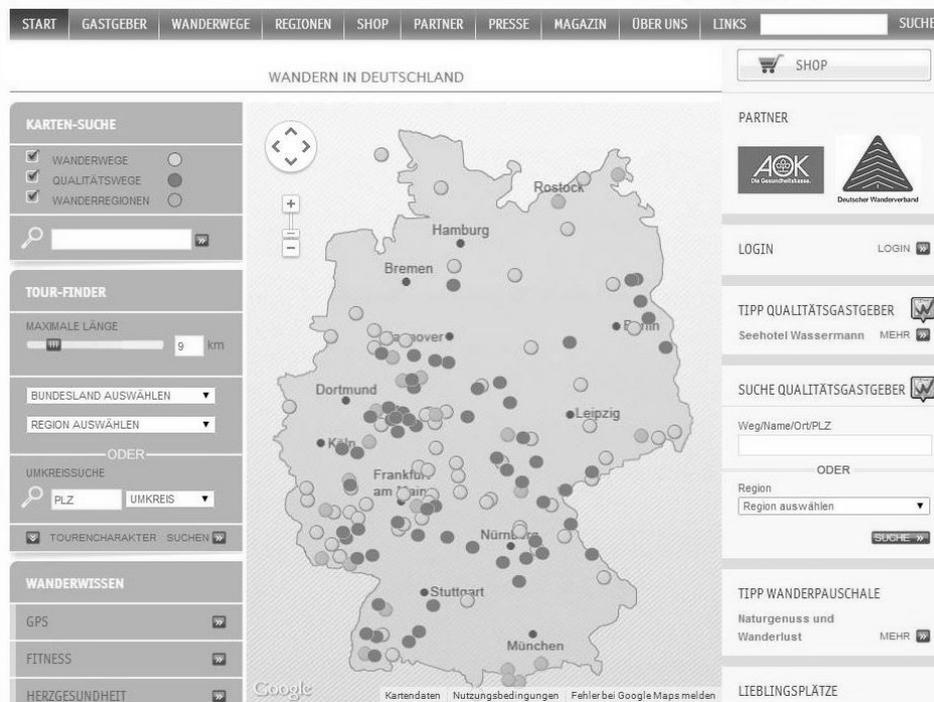
本研究では大きな観光資源のない地方都市において、フットパス施策が有効な地域活性化の取り組みの一つになり得るという前提に基づき、フットパス施策を展開する上での課題や方策を検討することを目的とする。まず、イギリスにおけるフットパスと同様に多くのウォーキング訪問者が地域活性化に寄与しているドイツの先進事例について、情報発信手法や現地での案内手法について調査を行う。次いで、福岡県内の2都市において、地域資源を活かしたフットパスのルートを検討し、提案を行う。その上で、各都市が置かれた状況を踏まえながら、地域活性化に結びつけるための課題を検討することを目的とする。

2. ドイツにおけるフットパスの取り組み状況

(1) 様々な媒体による情報提供

ドイツでは「閉店法 (Ladenschlussgesetz)」⁽¹⁾によって、日曜祝日の小売店舗の営業が基本的に認められていないため、日曜日には家族と一緒に余暇を楽しむ傾向が強い。特にウォーキング、ハイキング、サイクリングなど自然に親しみながら長時間楽しむレクリエーションの人气が高く、日照時間の長い4月から9月頃にかけて、各地の自然公園や景勝地では多くのツーリストで賑わう。ドイツ在住のエコガイドによる環境レポート³⁾によると、ドイツ人の2人に1人がハイキングやウォーキングを趣味にし、1人あたり年間平均5.2回実施し、その目的は87.3%が「自然を体験すること」、72.2%が「体を動かすこと」、64.4%が「健康のため」と答えている。ドイツ人にとって、自然の空気を吸いながら「歩く」という行為は生活習慣の一つであり、そのために必要な様々な情報ツールが提供されている。

ドイツ国内各地域にある50以上のクラブを束ねる組織としてドイツハイキング連盟 (Deutscher Wanderverband) があり、各地域のコースやテーマ (巡礼、健康、教育など) ウォークに関する情報の発信、イベント開催、情報誌の発行など、ウォーキングやハイキングに関する様々な事業を展開している。また、同連盟が運営している情報提供のウェブサイト (<http://www.wanderbares-deutschland.de/>) では、各地域のウォーキングコースが検索できるサービスが提供されており、Wanderwege (Trails=トレイル)、Qualitätswege (Quality paths=素晴らしい歩道) といった種類別、最大距離、州、地域などの情報を元に様々な目的に応じた検索が可能である。

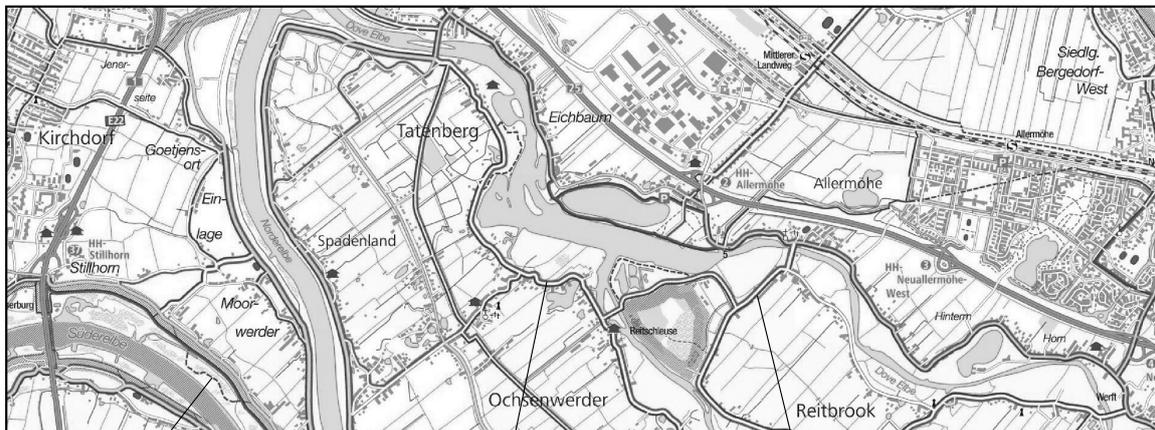


出典：ドイツハイキング連盟ウェブサイト (<http://www.wanderbares-deutschland.de/>)

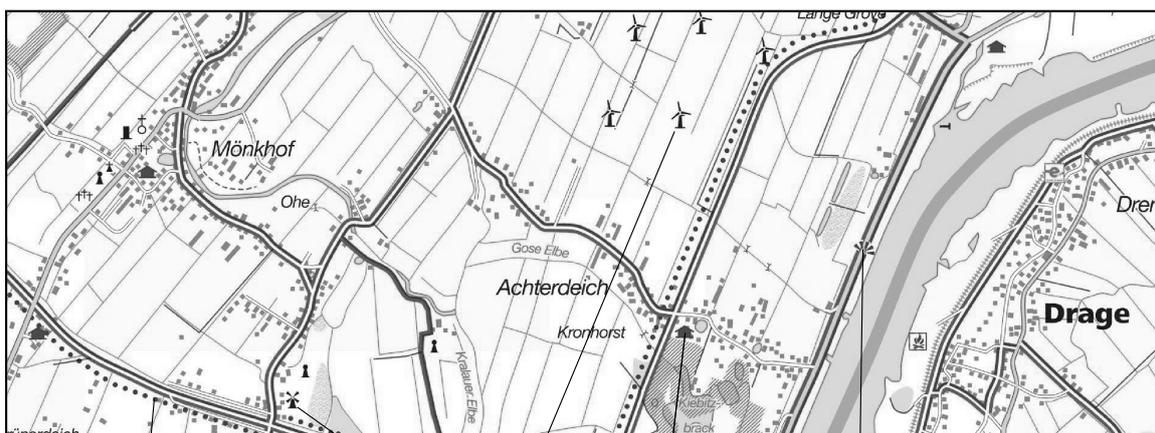
図1 ドイツハイキング連盟による国内のコース検索画面

英国で表現されているフットパスに相当するドイツ語は“Fußweg”である。“Fuß”は英語の“Foot”、“weg”は“path”を意味する単語である。ただし、英国の“Footpath”、日本の“フットパス”のように単語自体がウォーキングコースを意味する概念としては用いられておらず、あくまでも「自動車が通行できない歩行者専用の小径」という意味合いが強い。英国の“Footpath”に相当する概念としては“Wanderweg (=trailトレイル)”が一般的である。

この“Wanderweg”が細かく掲載されているのがオーストリアに本社のあるKOMPASS社が製作・販売している5万分の1地図（Wander und Rad Karten）で、地形図上に歩行者向けのルートが赤系の色で、自転車向けのルートが緑系の色で示されている。またテーマ性の高いルートは他の色で区別され、特別なマークが示されている。図2に示すように、立ち寄り可能なレストラン、ホテル、ビューポイント、風車などのランドマークが表記されており、携帯用地図として多くの利用者に活用されている。この地図はドイツ国内ほぼ全域が網羅されており、一部10ユーロ前後で全国の書店で販売されている。多くの書店では全国各地の地図が番号順に陳列されており、ハイキング人気の高さをうかがい知れる。



Fußweg 歩行者専用道（赤色・点線） Radweg 自転車道（緑色・実線） Wanderweg ハイキング道（赤色・実線）

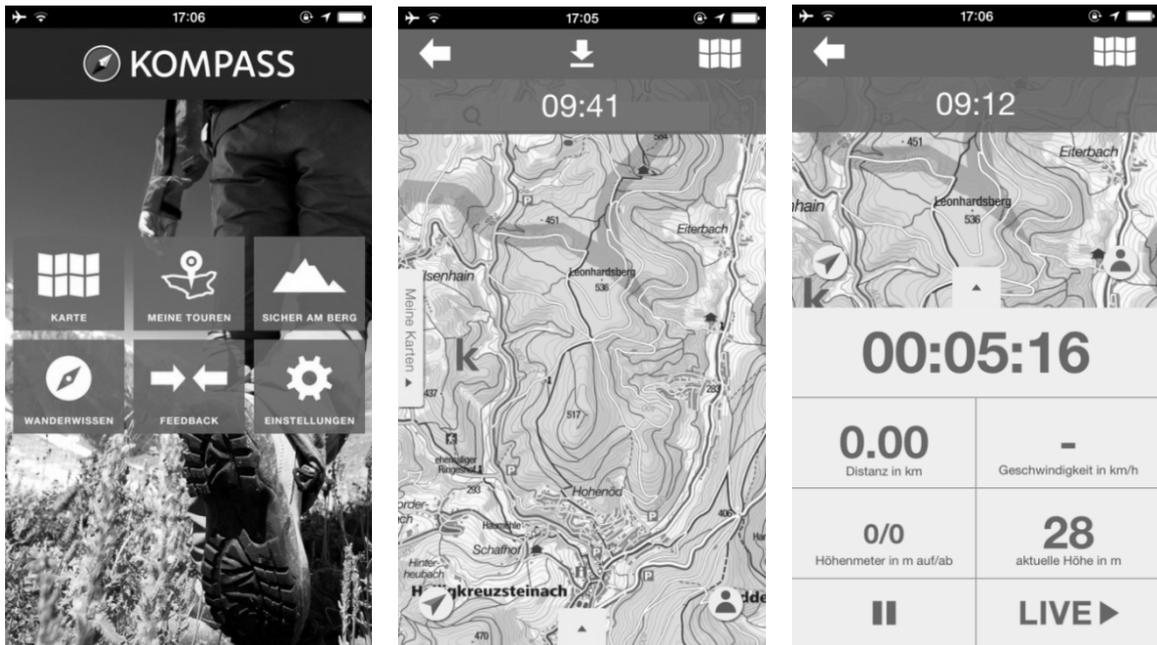


Reitweg 乗馬道（紫色・点線） Windmühle 風車 Gasthof レストラン Schöner Ausblick ビューポイント

出典：KOMPASSウェブサイト（<http://www.kompass.de/>）を基に筆者作成

図2 歩行者道・自転車道が掲載されているKOMPASS社製50000分の1地図

近年、スマートフォン利用者の急速な拡大に対応して、KOMPASS社では専用アプリケーション「Wanderkarte」を提供しており、市販の地図がオンラインで閲覧可能なほか、ルートプランの作成や歩行履歴なども作成できる。また、電波の発する位置情報を活用し、緊急時にSOS発信できる機能も付いている。携帯電話の電波が届くエリアでは、効率的にウォーキングを行うための有効な情報ツールと言える。ただし無料版は情報閲覧が一部制限されており、GPS端末として活用するには有料版をダウンロードして利用する必要がある。



出典：KOMPASS社スマートフォンウェブサイト (<http://www.kompass.de/>) を基に筆者作成

図3 KOMPASS社が提供するスマートフォン用アプリケーションの画面

また、ドイツ国内の多くの自治体では、州、市、郡単位でハイキングやサイクリング向けの地図入りパンフレットを発行しているところが多い。これらは各地のインフォメーションや駅にて無料で手に入れることができるため、多くの観光客が活用している。

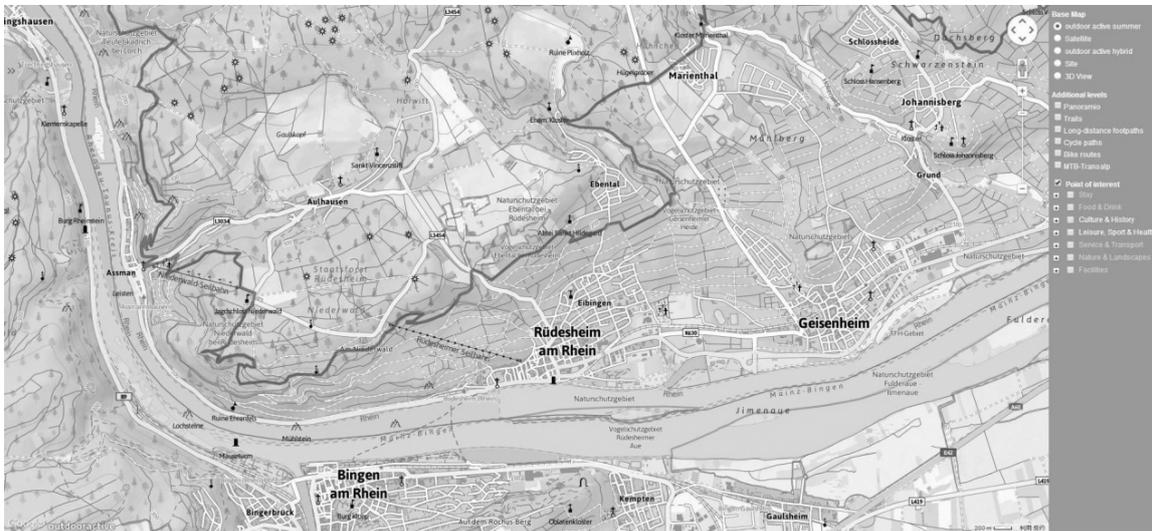


写真1 各地で発行されているパンフ類



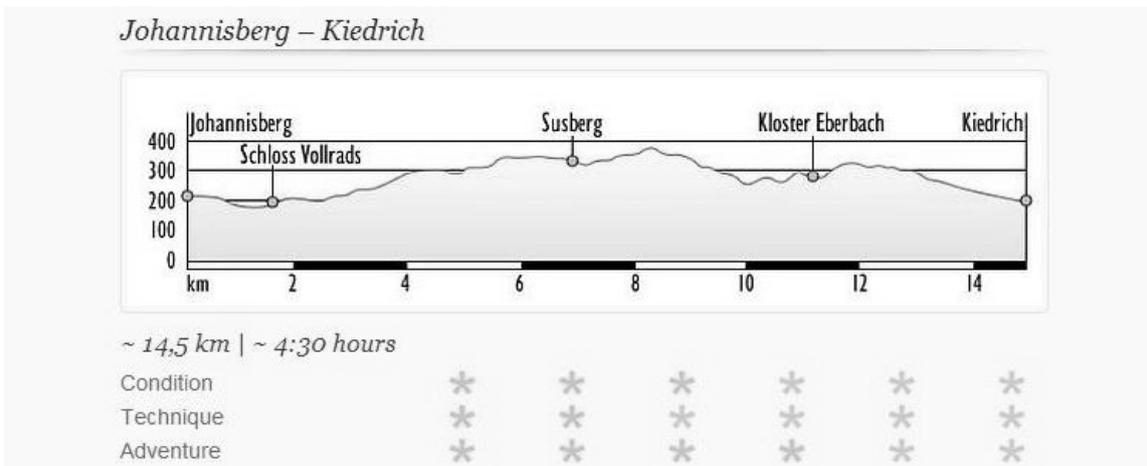
写真2 パンフに掲載されているルート

一方、州を超えたハイキングルートも多く、国内で最も人気のあるルートの一つとして「ライン川山道 (Rheinsteig)」がある。これはライン川沿いの3州 (Nordrhein-Westfalen州、Rheinland-Pfalz州、Hessen州) の共同プロジェクトとして2005年に整備されたもので、ユネスコ世界遺産に指定されているライン川中流域の景勝地を眺めながらその沿線の山道を歩く全長約320kmのコースである。起終点は旧西ドイツの首都ボン (Bonn) と温泉保養地ヴィースバーデン (Wiesbaden) で、全コースが23ステージに分割されており、途中にはライン川とモーゼル川が合流する景勝地コブレンツ (Koblenz)、ワイン産地として有名なリュースハイム (Rüdesheim) 等の観光地が点在している。各ステージの起終点は公共交通アクセスを考慮して設定されており、全ルート踏破を目的に繰り返し足を運ぶ利用者も多い。図4、5に示すように公式ウェブサイトにはルートの詳細図や、ステージ毎の断面図、山道のコンディション、必要な技術、冒険度がそれぞれランク付けされた評価などが掲載されている。



出典：Rheinsteigウェブサイト (<http://www.rheinsteig.de/>)

図4 ライン川山道のルートの一部



出典：Rheinsteigウェブサイト (<http://www.rheinsteig.de/>)

図5 ライン川山道のステージ毎に提供されている断面図

(2) 現地での情報提供

以上のようにウォーキングの事前準備段階では、市販地図やインターネット等の様々な媒体によって情報収集が可能であり、現地に着いてからも観光インフォメーションや市役所等ではウォーキングマップ等を入手できることが多い。実際のウォーキングルートに着いてからは基本的には自己責任において行動することが求められるが、地図上に示されたウォーキングルートの場合は案内標識等が設置されていることが一般的である。写真3、4に示すように、サイクリングコースやウォーキングコースの番号、目的地までの距離が示された専用標識が設置されていたり、他の用途で使われている標識の一部にシールでコース番号が貼られているようなケースも見られる。



写真3 歩行者、自転車向けの様々な標識



写真4 シールで貼られたコース番号

ただし上記のような標識は市街地内に限られており、自然環境の中ではほとんど見られない。森林内では樹木に番号や矢印をペンキで示す、あるいは小さなボードを釘で打ち付けているケースが多い。ただし自然環境や景観へ配慮して、マーキングは利用者が認識できる最小限の大きさにとどめられている。また、人気のあるコースやテーマ性の高いコースには市販の地図上で固有のマークが示されているが、利用者が識別しやすいように同じマークがルートの樹木にも示されている（写真6）。



写真5 樹木に示されたコースのマーク



写真6 地図と一致しているマーク

利用者にとってウォーキング途中で最も必要な情報としてトイレの位置があげられる。公共機関による無料公衆トイレが公園等に多く設置されている日本と違い、ドイツでは都市部でさえもトイレが設置されているケースは稀で、駅や大型商業施設でも有料かチップ制である。自然地域にはトイレはほとんどなく、多くの利用者はカフェやレストランで済ませるのが一般的である。市販の地図にもトイレに関する情報はほとんど掲載されていない。そのため、レストランやホテルの情報が貴重であり、地図による情報に加えて、写真7に見られるような看板を施設側が独自で設置しているケースが多い。また、地域に生息する希少な動植物を紹介する掲示板が整備されているケースも多く見られる（写真8）。



写真7 レストランの案内



写真8 希少動物を紹介する案内板

イギリスにおけるフットパスの起源は、市民が自然を楽しみながら楽しく歩く権利を主張し、私有地を歩行者のために解放することを求めた運動に端を発することは前述したが、現代の利用者にとっても、これから通行する道路が公的道路なのか、私有地でも歩くことが可能なのか、もしくは立入できない私道なのかを識別することは重要である。そのため、市販の地図や公的機関によるパンフレットに掲載されているルートは基本的には立入可能な道路として認識されており、このような出版物は人々の行動にお墨付きを与えるという意味で重要性が高い。写真9は私有地である「PRIVAT」が道路上に表記されている事例で、写真10は私道のため通り抜け禁止であることを意味する「Privatweg Durchgang verboten!」と表記された看板が設置されている事例である。



写真9 私有地を示した表示



写真10 立入禁止を示した案内板

3. 地方都市におけるフットパス展開の検討

(1) 福岡県中間市における検討

中間市は福岡県の北部、北九州市の西隣に隣接する人口約4万3千人の都市である。戦後は石炭産業を中心として、又、拡大する北九州都市圏のベッドタウンとして大きく成長したが、近年は産業構造の転換による人口減少に直面している。市内には石炭の舟運を支えた堀川運河、遠賀川鉄橋、八幡製鐵所遠賀川水源地ポンプ室、炭鉱関連施設など、日本の近代化を支えた産業遺産が多数分布している。また、唐津街道底井野往還沿いなど由緒ある寺院、神社など多数の歴史的資源も残っている。

北九州市立大学では中間市と共同で、平成23年度から「中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究」⁴⁾⁵⁾に取り組んできた。この中で、地域の貴重な資源は今後の中間市における観光振興やレクリエーション振興などで重要な役割を果たす素材であるという認識に立ち、これらを活かした観光振興方策の検討を行った。中間市第4次総合計画（平成18年度～平成27年度）では、観光施策や文化財保護施策は他の主要施策と同様に市の主要施策のひとつとして扱われてきたが、特に観光については、市内に魅力的な観光資源が乏しいとの認識から、新たな観光資源の開発やイベントの活性化が課題であることが指摘されていた。一方で後期基本計画からは遠賀川水源地ポンプ室がユネスコ世界文化遺産候補となったことから、他の産業遺産とあわせた観光政策を行っていくことが明記された。「いつてみたいまち なかま」という表現はこれまでにはあまりなかった「観光の町」を意識したものであり、中間市を訪れる人をいかに増やし、その人たちにどうおもてなしをしていくかが今後の観光施策の中では大きな課題となってくると考えられた。そこで、これまで複数の異なる媒体で紹介されていた観光ルートを統合するような形で、新しい観光・散策コースとして、「自然を楽しみながら川を巡るコース」、「往来の面影を垣間見ながら昔のみちを辿るコース」、「産業遺産を学びながら巡るコース」、「廃線跡を探しながら探検するコース」の4コースを提案した。これらは中間市に存在する様々な歴史的・文化的地域資源をたどりながら散策し、これらを見学しながら辿っていくルートであった。さらにその提案を踏まえて検討を行ったのがフットパスの考え方を取り入れ、自然の景観や、自然のまま残された道を楽しみながら散策できる新たなルートの提案であった。

中間市では「田園風景や近代化遺産など地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる道」をフットパスであると考えることができる。昔からあるありのままの風景とは、自然に形成されたものではなく、地域の方々の長年にわたる自然への働きかけや、風土に根ざした伝統的な生活スタイル、土地への愛着などの結果として生み出され、維持・管理されてきたものである。このような地域のあらゆる活動によって育まれた風景を楽しみ、さらには地域の歴史的・文化的資源を学びながら歩くフットパスは、将来的に「世界遺産のあるまち・中間市」の観光の核となりうるものである。このような考え方にに基づき、以下に示す3つのルートを提案した。

1) フットパス・ルート1「街なかの遺産を巡るコース」

中間市の中心部にある堀川、中間唐戸、遠賀川水源地ポンプ室などの近代化産業遺産群を巡るとともに、廃止されたJR香月線や炭鉱引き込み線などの線路跡を巡るルート。ワクド岩の近くには舗装されていない道路が現在でも残っており、近くの朝霧神社の小山や朝霧池など自然の風景を楽しむこともできる、まさにフットパスにはうってつけのコースである。また市内唯一の温泉施設である中間温泉が通谷駅の手前に立地しており、ウォーキングの後に疲れを癒やして終了することも可能である。



写真11 黒川の土手



写真12 ワクド岩近くの未舗装道路

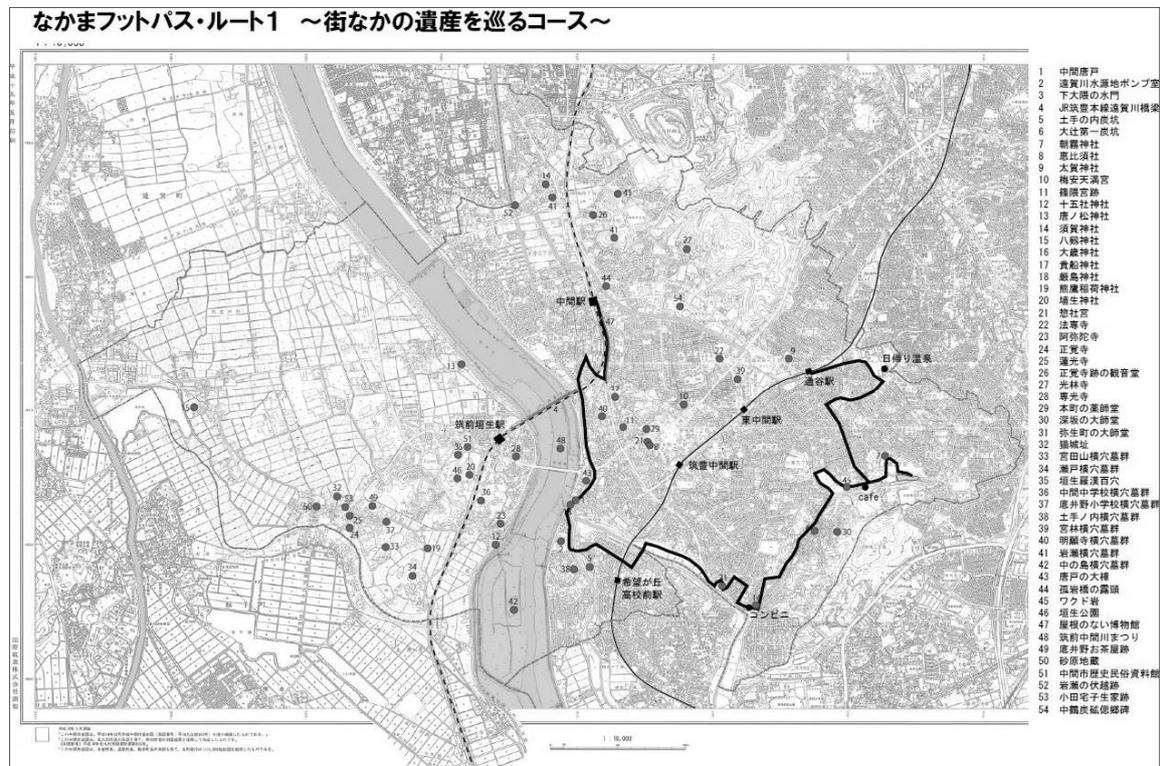


図6 なかまフットパス・ルート1～街なかの遺産を巡るコース～

2) フットパス・ルート2「底井野の田園風景を楽しむコース」

遠賀川の左岸側はのどかな田園風景が広がっており、底井野地区には猫城趾や代官所跡など様々な史蹟・寺院が残っている。JR筑前垣生駅から田園地帯の中を横断しながら、中底井野の八剣神社へと至る。さらに東進すると、福岡藩が参勤交代の際に自藩内の近道として利用していた福岡藩主専用の参勤交代道である底井野往還へと至る。上底井野地区には砂原地蔵、猫城趾、小田宅子旧家跡、黒田藩主御茶屋跡など、様々な史蹟が残っている。底井野往還から垣生公園の中を横断し、埴生神社を経てJR筑前垣生駅へと戻る。途中には舗装されていない農道やあぜ道があり、360度一望できる田園風景と歴史資源をあわせて楽しむルートである。



写真13 田園地帯の中のあぜ道



写真14 底井野往還

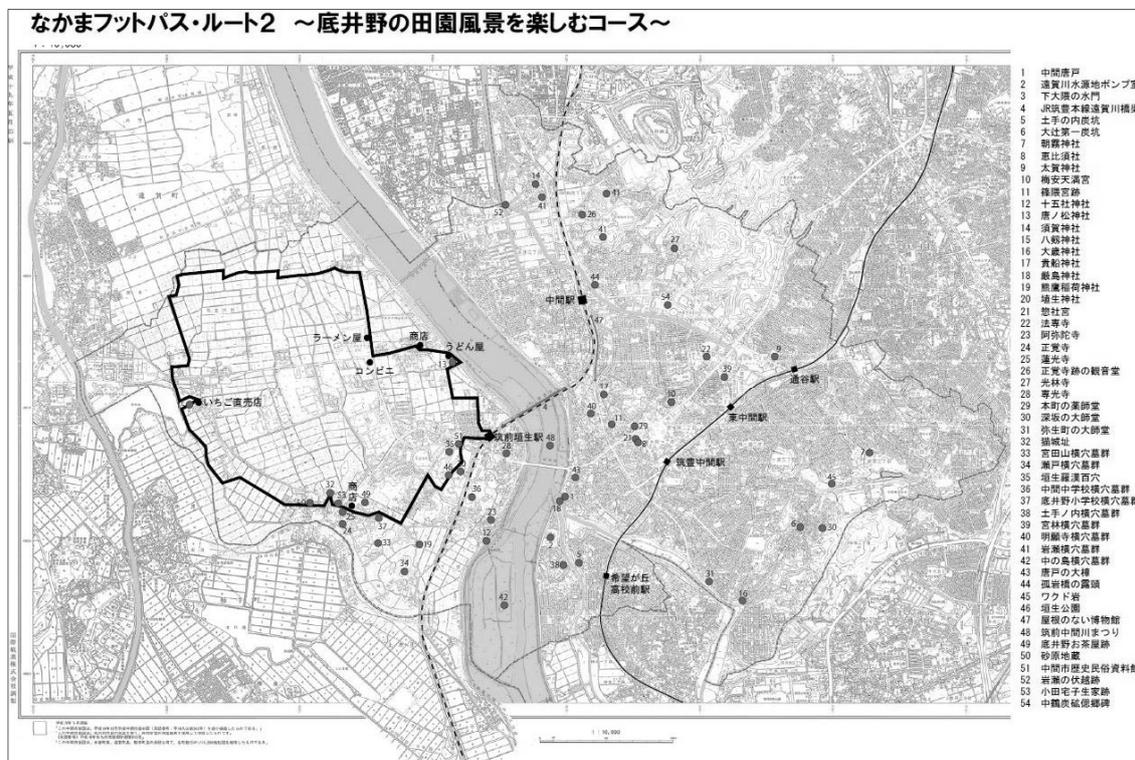


図7 なかまフットパス・ルート2～底井野の田園風景を楽しむコース～

3) フットパス・ルート3「川の歴史を偲び、川を眺める視点場を巡るルート」

中間市には地域のシンボルである遠賀川をはじめ、曲川や笹尾川などの自然河川や、石炭を運搬するための物流インフラとして活躍した人工河川である堀川、農業地帯への用水路である山田川など、様々な機能の河川空間に恵まれている。このような多彩な川の歴史を辿りつつ、河川景観を楽しむルートである。JR中間駅をスタートして、堀川と曲川が交差していた伏越跡に至る。その後、遠賀川の右岸の河川敷を歩き、遠賀川鉄橋や遠賀橋を眺める視点場を訪れる。一旦、土手に上がり、市役所の裏から堀川沿いを進み、中間唐戸へ、その後、曲川の土手にある緑道を通り、JR香月線跡に整備された遊歩道を通り、西鉄香月営業所へとゴールする。



写真15 遠賀川河川敷の自転車道



写真16 JR香月線跡の遊歩道

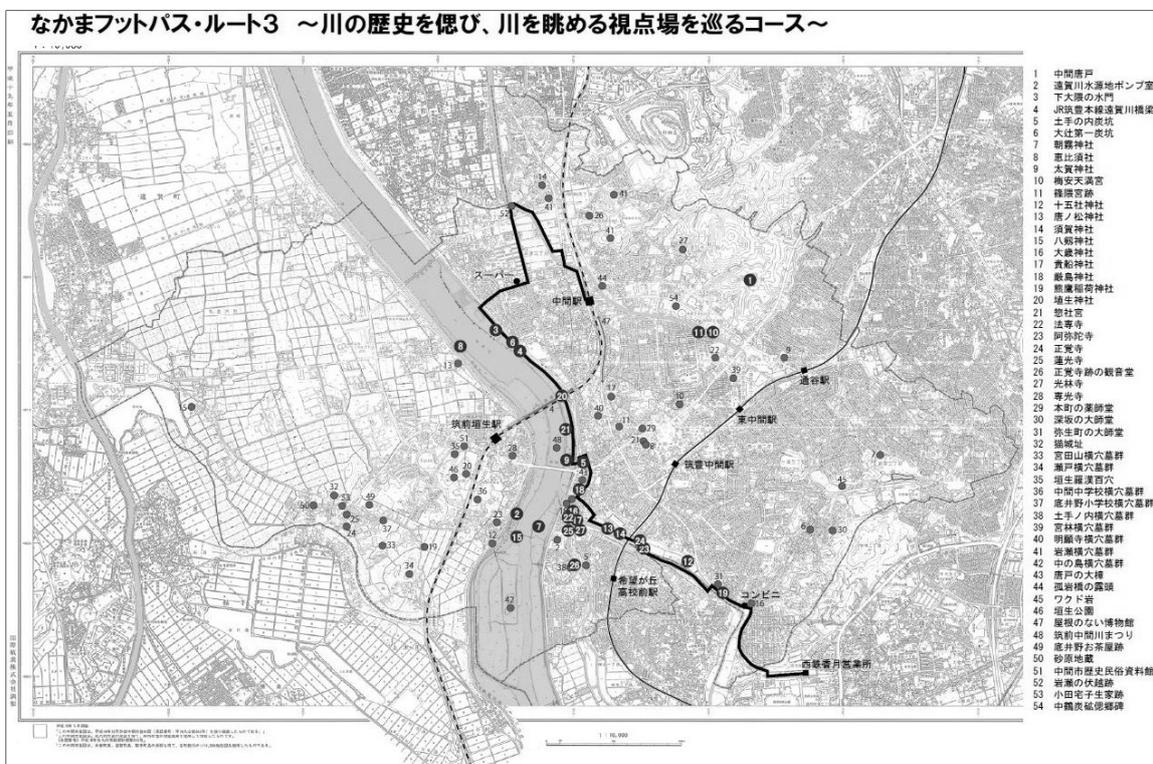


図8 なかまフットパス・ルート3～川の歴史を偲び、川を眺める視点場を巡るルート～

(2) 福岡県みやこ町における検討

みやこ町は福岡県の北東部、行橋市の西隣に隣接する人口約2万2千人の町である。平成18年3月に京都郡の勝山町、犀川町、豊津町の3町が合併してできた。東は行橋市と築上郡築上町、西は田川郡添田町、赤村、香春町、南は大分県中津市、北は北九州市に接しており、総面積は約151km²は福岡県内の町村では最大である。

みやこ町を構成する旧3町には固有の歴史・文化があり、異なる河川流域に位置し、また産業構造にもそれぞれ特徴がある。それが故に合併後も住民の間で旧町意識が根強く残っていた。町としては旧町のアイデンティティにとらわれない、「みやこ町」としての将来像を提起していきたいという観点から、次世代に向けたまちづくりを模索していた。このような背景に基づき、北九州市立大学都市政策研究所では平成23年度から地域住民を交えた主体的なまちづくり活動に町と協働で取り組んできた。これまでにまちづくりセミナーや勉強会、みやこ町の地域資源探しをテーマとしたワークショップ、町の観光サインを計画するワークショップ、観光・産業振興・定住促進の3つの観点から町の将来像を考えるワークショップなどを開催し、多くの町民の方々と意見交換を行ってきた。

この中の一つのアイディアとして発案されたのが「フットパス」を取り入れた町の周遊ルートであった。町域の広いみやこ町はカルスト台地、田園の広がる平野部、丘陵地帯、山岳部の森林地帯など様々なタイプの自然地形を有しており、またそこで生産される様々な農作物、果樹、花卉類は季節毎に様々な風景を演出してくれる。豊前国分寺や古墳など歴史的・文化的資源も多く残されている。さらにはお米、野菜、イノシシ肉などみやこ町ブランドとして通用する様々な特産品にも恵まれている。このような都市部にはない自然が与えてくれる魅力を紡ぐことで、町を訪れる人に対して年間を通じてハイキングやウォーキングに適した様々なコースを提供できるのではないかとというのが、フットパスの提案に至った背景である。このワークショップを引き継ぐ形で、北九州市立大学地域創生学群・廣川ゼミと協働し、地図上での検討及び現地でのフィールドワークを通じて以下に示す4つのルート案を作成した。

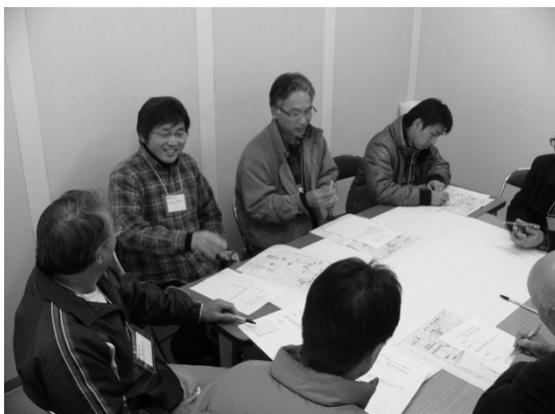


写真17 ワークショップによる検討

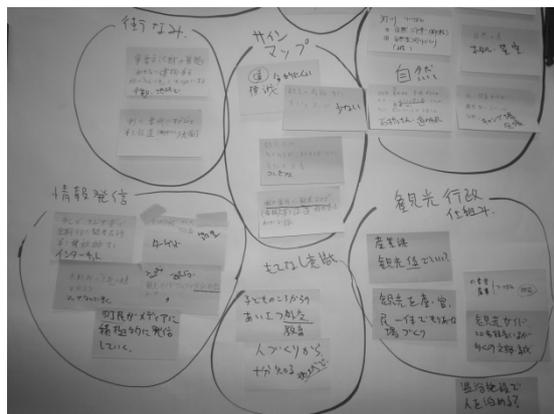


写真18 ワークショップの成果の一例

1) みやこ町フットパス・ルート1「犀川の平野部と本庄池を巡るコース」

旧犀川町の今川沿いに広がる平野部を巡るルート。町内を走る唯一の鉄道路線である平成筑豊鉄道田川線の犀川駅を起終点とする。犀川駅を出て北上するとすぐに田園地帯が広がり、東西両側に連なる山々をバックに平野が広がる雄大な風景を望むことができる。多くの農地で米と麦の二期作が行われており、四季によって異なる色合いの景色が楽しめる。今川から分岐する喜多良川沿いに南下すると京築地域で最も大きいため池である本庄池に至る。ルートの途中には「四季犀館」が立地しており、地域の特産品を購入したりトイレ休憩のために立ち寄ることが可能である。犀川駅には駐車場がないため、自家用車利用者はここが起終点となる。



写真19 田園風景が広がる景観



写真20 本庄池

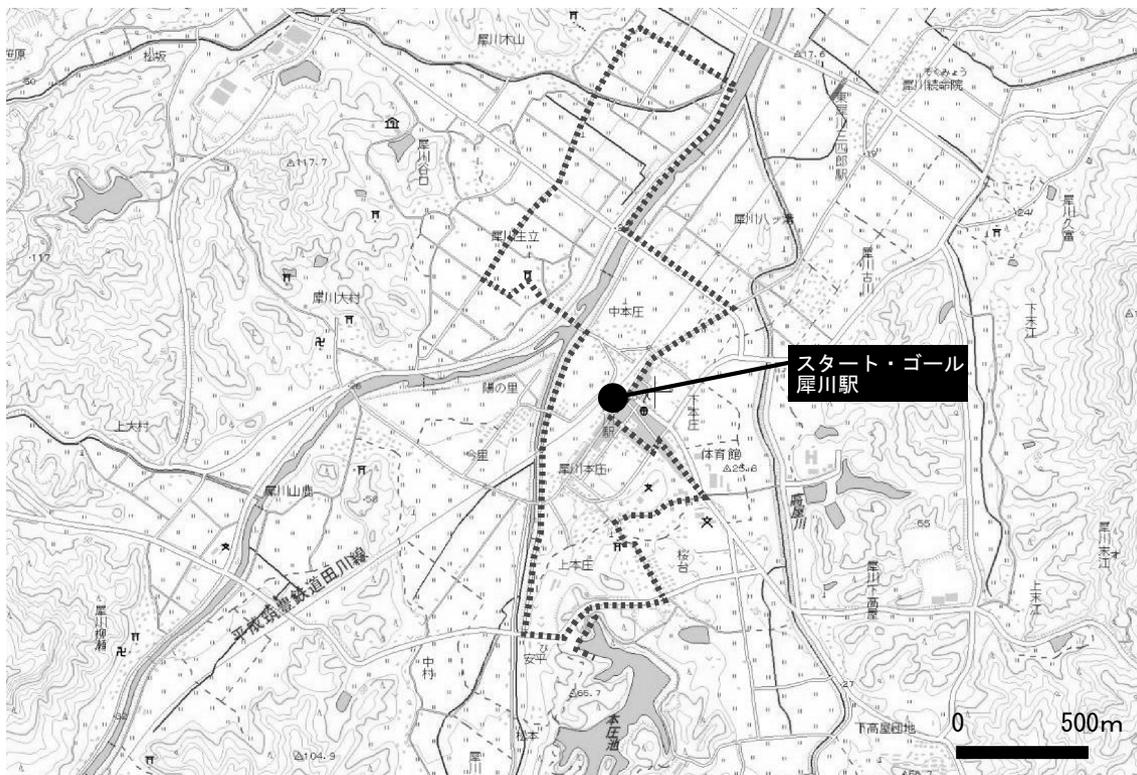


図9 みやこフットパスルート1～犀川の平野部と本庄池を巡るコース～

2) みやこ町フットパス・ルート2「銘酒・九州菊の林龍平酒造と今川沿いを巡るコース」

旧犀川町中心部よりさらに今川上流にある崎山地区を巡るルート。平成筑豊鉄道田川線の崎山駅を起終点とする。崎山駅を出て線路沿いに南下すると八幡神社のある小山にたどり着く。社殿へは階段で登ることができる。神社そばの今川に架かる橋から上流の方にあぜ道を進むと、京築地域に唯一現存する「林龍平酒造」の煙突と三角屋根の酒蔵が今川と周辺の緑に浮かび上がるような風景を見ることができる。酒蔵が空いている時間帯には銘酒「九州菊」を購入することも可能である。今川沿いを北上して戻ると人がすれ違えないほどの狭い幅しかない歩行者専用橋がある。地域の利便性のために住民自らが造り、日常的な維持管理をやっているこのような通路を垣間見ることができるのも、フットパスの魅力である。



写真21 川越しに見える造り酒屋の煙突



写真22 地域住民のための木造橋

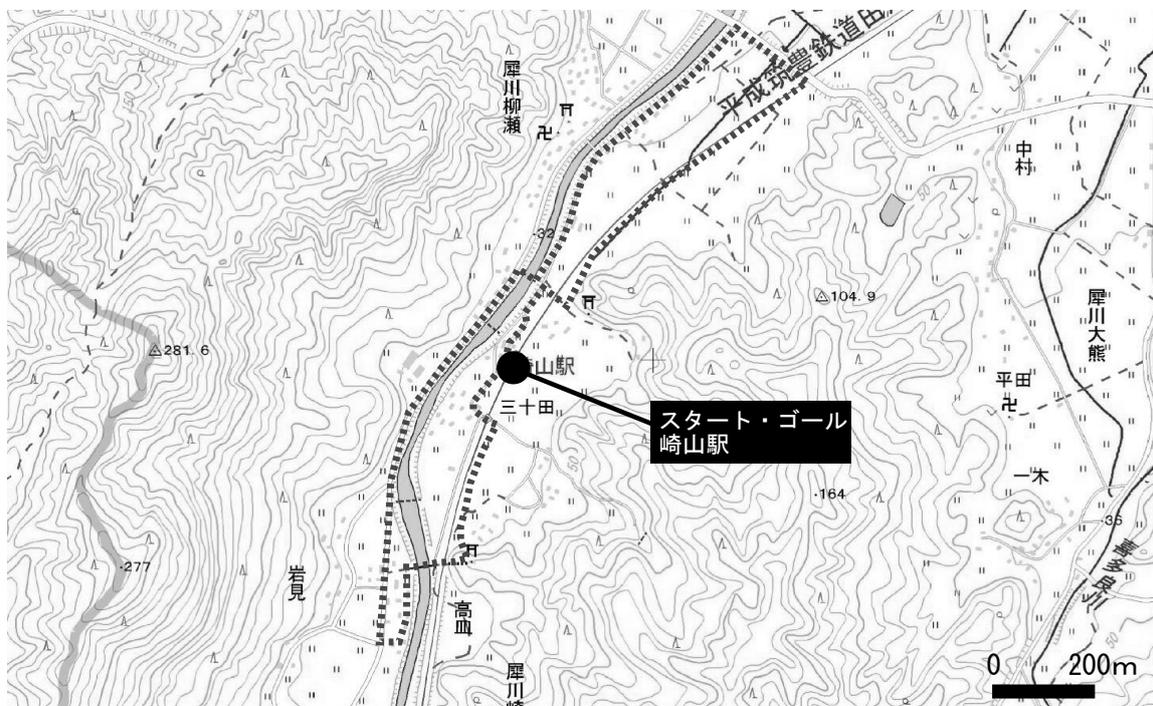


図10 みやこフットパスルート2～銘酒・九州菊の林龍平酒造と今川沿いを巡るコース～

3) みやこ町フットパス・ルート3「季節の果物畑と棚田の風景を巡るコース」

旧犀川町柳瀬から分岐して赤村方面へと至る県道の途中にある「松木果樹園」を起終点とするルート。松木果樹園は町内最大の観光果樹園で、なし、もも、ぶどう、いちごなど様々な果物を栽培している。園の駐車場を出て果樹園の中を下っていくと、季節毎に様々な実や花を見ることができる。川筋にある舗装された道をさらに進むと、小さな谷筋が広がる。ここには小規模ながら棚田があり、特に田植えが終わった頃からは水面と緑の美しいコントラストを楽しむ事ができる。棚田の中のあぜ道を進み、帰路は樹木に覆われた林道を通って再び松木果樹園へと戻る。果樹園のレストランでは昼食を取ることも可能で、また園内の販売コーナーでは採りたての果物や自家製ジャムを購入することができる。



写真23 果樹園内の果物畑



写真24 棚田の風景

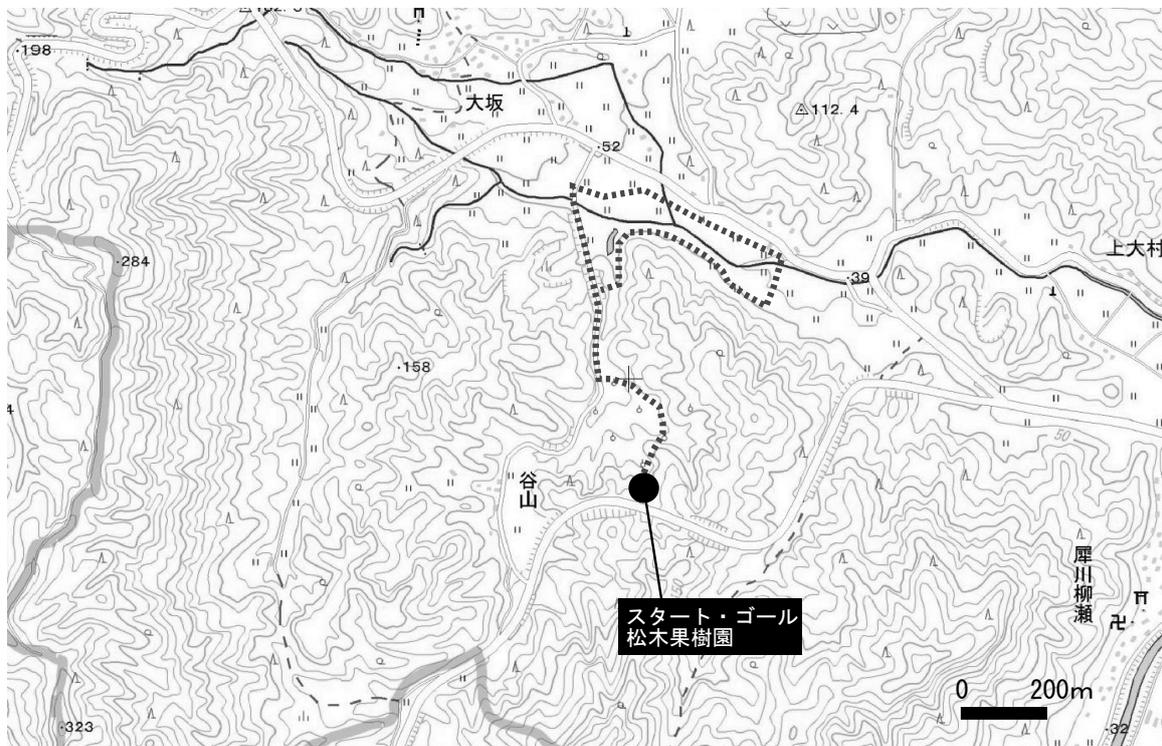


図11 みやこフットパスルート3～犀川の平野部と本庄池を巡るコース～

4) みやこ町フットパス・ルート4「黒田官兵衛ゆかりの地・馬ヶ岳から町を眺めるコース」

平成筑豊鉄道田川線の豊津駅を起点、新豊津駅を終点とするルート。行橋市との境にそびえる標高216mの馬ヶ岳には中世の頃から山城が築かれていた。黒田孝高（官兵衛）は豊臣秀吉からこの一帯を与えられ、馬ヶ岳城を居城とし、九州平定のため出陣した秀吉も天正15年（1587年）にここに滞在した記録が残っている。2014年にはNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が放映され、官兵衛ゆかりの地を巡る観光客の増加が見込めることから、町では登山道の安全確保や山頂における眺望確保のための様々な環境整備を行ってきた。ルートは豊津駅を出て、行橋市内の大池そばのあぜ道を通り、大谷登山口から登山道を経て山頂へと至る。下りは町内の貴船神社へと至る登山道で、その後、花隈地区の田園風景を眺めながら新豊津駅と戻る。



写真25 大池



写真26 馬ヶ岳山頂から見る勝山方面の風景

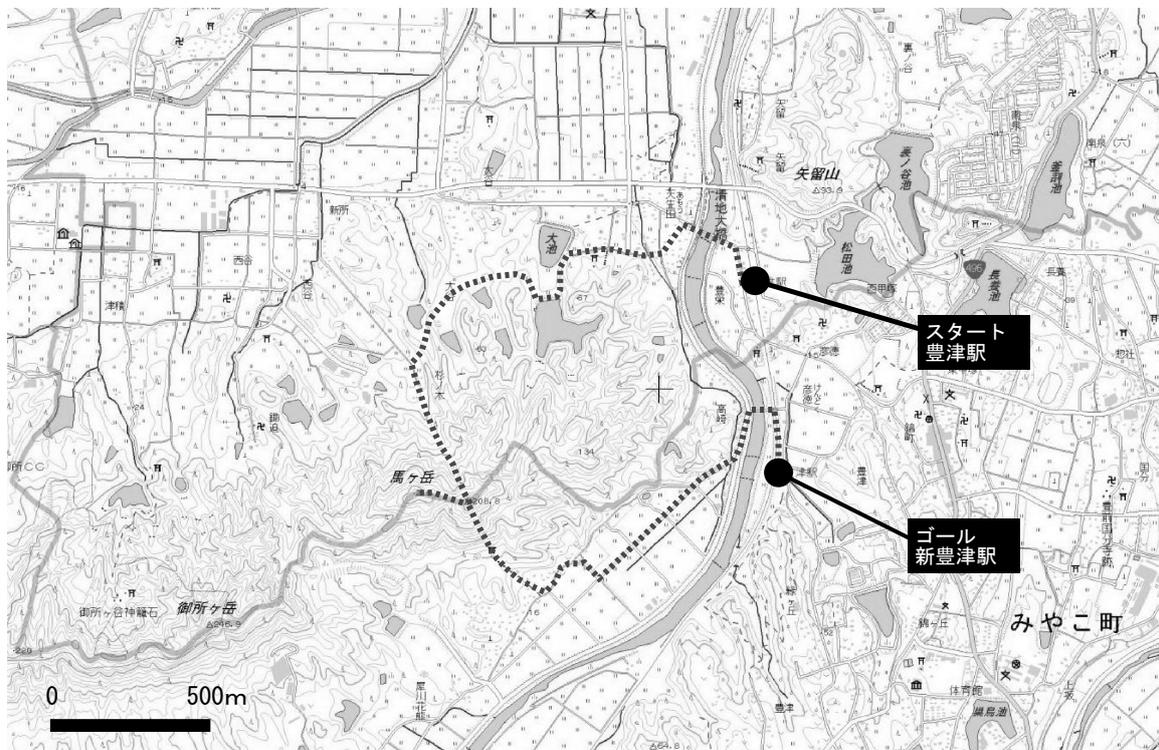


図12 みやこフットパスルート4～黒田官兵衛ゆかりの地・馬ヶ岳から町を眺めるコース～

4. フットパスによる地域活性化に向けた課題

(1) 組織体制の確立と情報発信

フットパスはルートを決め、地図を作成し、現地に案内表示を設置すればそれで終わりではない。自然条件は常に変化し、訪れる季節によって楽しみ方もそれぞれである。それ故、フットパスコースを日常的に歩いてその時々状況を把握し、またコース上に不具合があれば補修できるような維持管理体制が必要である。その上で、フットパスを目的として訪れる人々に対して絶え間のない情報発信を行うことも求められる。表1は日本国内のフットパス先進地において、フットパス活動を支えている組織の概要を整理したものである。ボランティア、NPO法人、法人格を持たない任意の協会といったようにそれぞれの推進組織体制は異なっているが、いずれの地域も地元自治体との連携を通じて、イベント開催、コース整備、地図作成などフットパス普及のための様々な活動を行っている。美里フットパス協会は公式ウェブサイトに加えてFacebookページを立ち上げており、日々歩いているフットパスコースの状況、その時々で体験できる植物や食べ物などの旬な情報、他地域との交流イベントなど、協会メンバーが日常的に情報発信を行っている。

表1 フットパス先進地における組織体制

自治体名	北海道黒松内町	東京都町田市	熊本県美里町
推進組織	黒松内町フットパスボランティア	NPO法人みどりのゆび	美里フットパス協会
公的機関との関係	事務局提供(町役場企画調整課内)	コース紹介(町田市観光コンベンション協会公式ウェブサイト内)	フットパスグッズ販売(美里町商工会公式ウェブサイト)
コース地図	無料配布	有料販売	有料販売
フットパスに関する主な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・コースの維持管理 ・道標や案内看板の整備 ・休憩用ベンチ設置 ・コースマップ作成 ・イベント開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーキングイベント ・ガイドブック製作販売 	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイド養成講座 ・イベント開催 ・コース整備 ・ガイド派遣 ・商品の制作販売
情報発信	公式ウェブサイト	公式ウェブサイト	公式ウェブサイト Facebook

中間市もみやこ町も現時点では行政主導によってフットパス推進のための第一歩を踏み出したに過ぎない状況である。今後フットパスを導入し、多くの交流人口を産みだしていくには、行政だけの力で推進していくことは不可能であり、リアルタイムでコースの状況が把握でき、日常的に情報発信のできる民間レベルの推進体制が欠かせない。

中間市では平成24年度に「観光・歴史ボランティア養成講座」を実施し、合計9名の市民の方々が参加した。今後はこの受講生などが中心となって、観光ボランティアガイドとして活躍していくことになるが、彼らはただ単に中間市の案内人としての役割にとどまらず、フットパス施策の推進役として活躍するだけの素地を有していると言える。受講生が中心とな

って、地元住民の視点から新たにルートの検討や提案を行い、地図の作成などへと発展し、将来的にはフットパス推進のための任意の組織結成へとつながり、市当局と連携したフットパス推進が期待できる。

一方、みやこ町でも平成23年度に実施したまちづくりワークショップにおいて、フットパスの提案が作業グループの一つから出された。このようなフットパス推進の芽を大事にして、地域住民有志による活動を初期段階からバックアップしていく体制が行政には求められる。町では観光協会設立に向けた動きも進んでいることから、観光施策とフットパス推進を有機的に結びつけ、取り組んでいくことが課題である。

(2) ルートに関する一定のルールづくりの必要性

フットパスはありのままの自然が残された道を歩き、その地域の自然を五感で感じながらゆっくりとした時間を過ごすことに意義がある。そのため、すべての人や自動車が通行可能であると判断できる舗装された道路ではなく、田畑の中のあぜ道や森の中の林道を歩くコース設定が必須である。ところがこのような道路は公道ではなく、私有地であることが多いため、フットパス利用者と地権者との間でトラブルの発生する可能性も指摘される。みやこ町でルートを検討するために現地調査を行った際も、その道が公道なのか私道なのか判別できないケースが多々あった。外からの訪問客が田畑の中のあぜ道を通りたいときにそこに関係者と思われる人が農作業をしていれば、一言断ってから道を歩くこともできるが、常にそのような環境にあるわけではない。眺望に優れた場所であってもそこが私有地であれば立ち入ることはできず、フットパスのルートとしての価値が低下することにもつながる。

日本の先進地では行政やフットパス推進組織による長年の活動によって理解を深め、私有地を通行可能としている事例もある。北海道黒松内町ではコース上に私有地であることを示す案内板を設置している。ドイツでは公的機関の発行するパンフレットや市販の地図に示されたウォーキングコースは私有地であっても基本的には通行可能であるという認識を利用者は持っている。

フットパスが浸透し、外部からの訪問者が増えたとしても、一度に何百人という単位で来訪があるわけでもなく、基本的には1日数人、十数人というレベルであり、私有地への立入が地権者に著しい損失を与えるとは考えにくい。したがって、地権者に対して、行政やフットパス推進組織が中心となって、フットパスの趣旨や意義について丁寧に周知することが初期段階で求められる課題であり、その理解を深めていくことが、良質なフットパスの提案につながっていくと言える。ただし一方的に私有地への立ち入りを認めてほしいという主張では地権者の理解を得にくい。例えば農地を通るルートであれば、田植え時期など立ち入りを望まない期間もあると考えられる。フットパス推進側と地権者との間で、立ち入り可能な季節、時間帯、利用者が立ち入り可能だと判断できるサイン計画などに関して一定のルールを定め、双方が協働してそのルールを運営していく体制の確立が課題と言える。

(3) フットパス推進を地域課題の解決に結びつける視点

フットパスの推進は地域活性化の一つのツールとして位置づけられるが、単に来訪者増による交流人口拡大にとどまらない視点が重要である。フットパス利用者の満足度を高めることは、フットパス施策における最も重要、かつ最も優先的に実現すべき目標と言えるが、同時に地域課題を踏まえた取り組みを行うことによって、その解決を実現するための有効な手段になり得る可能性を秘めている。

中間市は市内にある遠賀川水源地ポンプ室が「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産としてユネスコ世界文化遺産への推薦が決定し、早ければ平成27年度にも登録される。世界遺産のネームバリューは高く、いったん登録が決定すると同ポンプ室を見学するために多くの観光客が訪れることが予測される。ただし、構成資産は福岡県内だけでも北九州市、大牟田市に存在し、近隣の山口県、佐賀県、熊本県にも多いことから、ポンプ室だけを見学し、次の資産へと移動するだけの観光ルートが組まれる可能性が高い。中間市には製鉄や石炭産業といった近代化産業に関連する施設に限っても中間唐戸、堀川運河、遠賀川鉄橋などの遺産があり、その他にも歴史的、文化的に価値の高い地域資源も多い。世界遺産を訪れる観光客がポンプ室のみを見学して帰る通過型観光ではなく、市内の他の資源にも立ち寄る周遊型観光を提供することが中間市の大きな課題である。フットパスの推進を周遊型観光の実現に向けた有効な施策の一つとして位置づけ、世界遺産観光客に対してどのような周遊観光のスタイルを提供できるかという視点で検討していくことが求められる。

みやこ町は人口減少、少子高齢化が進展し、特に広い町内に点在する小集落の過疎化が著しいことが課題である。逆にこのような集落は昔からの手つかずの自然が残されており、フットパスを楽しむに相応しい環境に恵まれている地域でもある。フットパスの魅力は自然を楽しみながら歩くことにとどまらず、その地域で採れる新鮮な野菜や地域に伝わる伝統的な料理を味わい、その地域に暮らす人々と交流することでもある。集落に多く住む高齢者にとって、外部の来訪者との交流によって対話が生まれ、特産品の周知に少しでもつながれば大きな意義がある。みやこ町の集落は立地する川筋ごとによって固有の歴史、文化的背景を有し、特産品一つとってもそれぞれ特徴がある。つまり、多様なフットパスの楽しみ方を提供できる素材が町内全域に広がっているのである。集落活性化とフットパス推進を有機的に連携することで、双方にとって効果的な成果が得られるような施策を検討していくことが課題である。

5. まとめ

本研究では、公的機関発行のパンフレット、市販の地図、携帯電話のアプリケーションなどによって豊富な情報発信が行なわれ、現地での案内が充実しているドイツの事例を紹介した。このような利用者のニーズに的確に対応した情報提供が多くの利用者を生みだし、自然地域の活性化につながっていることを指摘した。さらに福岡県中間市、みやこ町における具体的なフットパス施策を検討し、その円滑な運営、地域活性化につなげるために必要な課題

を指摘した。フットパスは自然のありのままの道を活用するものであり、どの町にもその素材は存在することから、いかにその都市の特異性、特殊性をアピールしていくかが求められる。人々の志向は時代と共にめまぐるしく移り変わることから、どのようなフットパスを提供できるのか、常に新しい情報を発信していくことも求められる。通行する小径そのものの魅力だけでは繰り返し訪問するリピーターの獲得にはつながらない。フットパスだけでない魅力をいかに付加できるのか、地域住民との触れ合い、道の駅では手に入れることのできない特産品など、より地域との交流が深まる施策との組み合わせによってフットパス施策が推進されることが望ましい。地域にとっても単に通過されるだけではなく“儲かるフットパス”になることで、私有地を通過する対価として考えることもできよう。持続可能なフットパス施策の展開に向けた検討を重ねていくことが今後の課題である。

参考文献

- 1) 日本フットパス協会ウェブサイト (<http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html>)
- 2) 「フットパス・シンポジウム2013in町田」でのシーラ・タルボット女史（英国ウォーカーズ・アー・ウェルカムタウン協会理事）による特別講演（2013年5月25日・町田市生涯学習センター）から
- 3) ドイツエコライフウェブサイト (<http://econavi.eic.or.jp/ecorepo/live/144>)
- 4) 中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究報告書，北九州市立大学都市政策研究所，平成24年3月
- 5) 中間市の川にまつわる地域資源を活かした活性化方策に関する調査研究報告書，北九州市立大学都市政策研究所，平成25年3月

補注

- (1) 閉店法は1900年にドイツ帝国で施行されたのが始まりで、当時小売店の営業は平日の5時から21時までに限られていた。その後旧西ドイツで1957年に施行され、東西統一後も引き継がれている。薬局、ガソリンスタンド、空港、観光地等の一部の小売店舗を除いて原則的に日曜日の営業は認められていない。導入の背景としては、日曜日がキリスト教の安息日であるという宗教的側面、労働者の長時間労働を防ぐ側面、小規模小売店舗を保護する側面などがあげられる。なお、2006年のサッカーW杯ドイツ大会を契機として徐々に規制緩和が進み、現在では州政府単位で条例によって定めている。ベルリン州やノルトライン＝ヴェストファーレン州などでは月曜から土曜日の24時間営業が認められ、また日曜日でも年4回程度の営業が認められている州もある。

地域活性化のツールとしてのフットパス観光 —公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して—

廣 川 祐 司

1. はじめに

(1) 研究の背景

現代社会においては、環境問題の顕在化に伴い、農山漁村の豊富な自然環境の利活用方法に関心が集まっている。しかし実態としては、日本の農山漁村は人口流出や産業の空洞化にともなう過疎高齢化が一層進んでおり、豊かな自然環境を管理・利用しようとする主体が急速に減少している。日本のような二次的自然環境を中心とした植生である場合、豊かな生態系を維持し、自然環境を保全しようとする場合には、定期的な人間による自然への働きかけ（人為的攪乱）が必要である。にもかかわらず、急速に過疎高齢化が進展する日本の農山漁村においては、人手不足による人工林や里山、田畑の管理・利用がなされず放棄されてしまっている地域が多い。

問題は人手不足だけではない。多くの地域社会においては、限られた人手でもなお里山を使用した環境教育や、食育を通じた農業体験などの新たな取組みによって、地域の自然環境を有効活用しようとする人々も確かに存在する。しかし、これらの活動はあくまで個人的な、もしくは小規模なものであり、昔ながらのように地域コミュニティ（集落）の全住民が参加して行うような活動は衰退の一途をたどっている。地域住民が地域の自然環境を管理・利用しなくなった要因としては、自然資源を管理・利用する「動機」が減ってきたためである。昭和30年代頃までは、日本においても燃料用の薪や山菜などの食料、建設資材としての茅など、生活に必要な物資は里山から入手してきていたが、現在はそのような生活物資は専門業者によって生産され、我々のような生活者は貨幣による交換を通じて入手するような生活様式となっていった。自給的なこのような生活様式によって生活を送っていた時代にまで遡らなくとも、昔からの集落の共有林（入会林野）を活用し、集落で共同造林事業を行っていた時代も存在する。木材生産を集落が行い、その売却益で集会所などの地域コミュニティ施設を建設したり、農地の区画整理事業をしたり、テレビの共同アンテナを立てたり、下水道を整備したり、さらには集落のお祭りや老人会、青年団等の地域コミュニティ活動への助成をしたりしており、まさに地域社会で生活していくためには必要な地域財源となっていた。そのため、住民は毎月のように集落内の共有林の整備や集落内の道や川などの普請（区役・出役と呼ぶ地域もある）を実施し、参加しない者からは不参金をとるなどのペナルティを集落として課していた。このような地域住民による共同活動によって、地域コミュニティの強固な関係性が維持されてきたのである。地域内の普請（共同作業）は、結果的に自分たちの生活の質を向上させることが地域住民全員に実感として認識されていたがため、集落経営に欠かすことのできない持続可能なシステムとなっていた。この共同作業によって、地域の自然

環境は維持され、管理されてきたのである。

したがって、日本社会の近代化や生活様式の変化に伴って、大きな社会構造の変化を遂げた現代社会において、持続可能な地域社会の構築に向けた具体的な手法の模索とその手法の有効性について検証する必要があると考えていた。つまり、本研究の背景には、前記したような自然資源の放棄による農山漁村部を中心とした地域社会の衰退に対し、豊富に残存する自然資源を活用することで地域活性化を目指すための具体的な手法を、まずは見出すことであった。

(2) 研究の目的

本研究の本質は、地域住民が地域の豊かな自然環境を資源として認識しなくなった現状において、豊かな自然資源しか無いような地域社会はどのような方法によって地域活性化を達成すれば良いのかということである。現代社会においては、里山や豊かな自然環境を良好な状態で保全していくことが社会的な要請となっているが、そこに住まう住民にとっては、これらの地域資源はもはや生活に必要なものではなく、あえて管理・利用しようとするとならばコストがかかり、自分たちの生活に支障をきたす恐れがあるものとなってしまっている。このコストを住民自らが引き受けるに値する、地域資源の活用方法とはいったい何なのかについて明らかにし、そのための仕組みづくりを検証することが本研究の目的である。

その際、地域活性化とは何なのか、また持続可能な地域社会となるための条件とは何なのかを考慮する必要がある。概して、地域活性化というキーワードが使用される際、最初にあがるのが「地域経済の活性化」である。しかし、本論文で言及する地域活性化とは、あくまで地域住民の「生活の質 (Quality of Life)」の向上である。本論文においては、地域社会におちるお金の量や地域社会に流通する貨幣の量は、あくまでも付随的な効果として認識し、「地域経済の活性化」を達成することを地域活性化の条件として目的化することはしないということを、最初に付記しておきたい。

2. 地域活性化のツールとしてのフットパス

(1) フットパスとは何か

近年、全国的に地域活性化のツールとしてフットパスが広がりを見せている。日本フットパス協会の公式的な定義によると、『フットパス』とは、イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】”のこと」（日本フットパス協会HP）であるとされる。日本においては、1995年頃に北海道と東京の町田市で同時発生的に導入された。北海道では札幌市に拠点を置き、「環境」をテーマとして活動を展開している環境市民団体のエコ・ネットワーク（代表：小川巖）が中心となって、北海道全土に広めたものである。北海道はフットパス発祥の地、イギリスと気候風土の面で類似する部分が多く、北海道とイギリスの自然景観の写真を見せられた際、目視だけでその違いを判断するのは難しい（写真1）。小川氏が1994

年にイギリス湖水地方を訪れた際、パブリック・フットパスの仕組みに大変魅力を感じ、実際に歩いてみて楽しいと感じたという。そのため、良好な自然環境を歩いて肉体的・精神的にリフレッシュしようという潜在的な需要は日本においても大きいだろうと感じ、北海道において取り入れられることとなった。これが北海道におけるフットパスの始まりである。



(写真1) 北海道白老町のフットパスコースとその標識 (2013年7月6日, 撮影者: 内田晃)

一方、町田市は、東京23区や横浜市、川崎市といった大都市と隣接し、それらのベッドタウンとして発達していった。市の大部分は多摩丘陵地に属することから、実際にこのまちを訪れると生業として農業を営む者もまだまだ残ってはいるが、その多くは東京のベッドタウンとして開発が進み、残された郊外の数少ない自然環境は非常に貴重な存在となっている。この東京近郊で残された貴重な自然環境を宅地造成に伴う大規模開発から守るために、NPO法人「みどりのゆび」(事務局長: 神谷由紀子) が中心となって、利用されなくなった里山をフットパスとして多くの人々に利用してもらうことによって、乱開発を抑止するという取り組みによって、フットパスが導入された。このような考え方に基づくフットパスの利用は、日本におけるフットパス研究の第一人者である、法学者の平松紘(2002)においてもフットパスの一つの機能であると以下のように言及されている。それは「開発反対、環境破壊反対、と個別の自然を守ることではなく、『アクセス権』によって自然道が守られ、自然道がある自然全体を守ろうという手法」(平松, 2002: 180)であったのである。

したがって、北海道においてはフットパスの位置づけもイギリスと同じであり、健康増進、心身のリフレッシュ効果をもつレクリエーションとしての効果を期待して導入されたのに対

し、東京都町田市では利用されなくなった里山の新たな利用方法として、開発抑止や自然環境の保全を目的としてフットパスが導入されたのである。

(2) 文化的景観を生かすフットパス

フットパスは「ありのまま」の風景を楽しみながら歩くことが定義の中に含まれている。この「ありのまま」の風景とは、その地域で生活する人々が生業を営む中で形成され、維持されてきた生活空間のことを意味する。このような景観は、「文化的景観」と呼ばれ、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」(文化財保護法第二条第1項第五号より)とされている。つまり、ありのままの風景というものは、決して自然と偶発的にできたものではなく、歴史的に培われてきたその地域の人々の生活や生業によって形成されてきたものである。したがって、この文化的景観を通して、その地域で何が採れるのか、何が食べられているのか、そしてどのような生活が営まれているのかなどの様々な地域文化や習俗を学ぶことができるのである。

また、「ありのまま」ということは、一般的に地域にあるものをむやみに壊してはいけない、ということが指摘されることが多い。そのため、フットパスの道中、許可なく道を外れての田畑・樹林・屋敷などへの立ち入りや、ゴミの放置、動植物・山菜・農作物の採取などの行為は許されていない。これは多くの観光地においても懸念事項として挙がる点であるが、その他にも「作らない」というのも、ありのままを維持するためには必要な条件となっている。多くの観光客を誘致しようとする際、大きな車やバスが止められる駐車場の整備や、公衆トイレの整備、休憩場所の整備、ベンチの設置など、観光客の利便性を向上させるために様々な計画が持ち上がる。しかし、それが果たして地域で培われてきた生活に定着するのだろうか。地域住民が協力して手作りでベンチを設置し、その整備も無理のない範囲で行うことなどができれば良いが、行政や観光協会等がその費用を負担し建設した場合、地域社会が歴史的に形成してきた文化的景観とは異質な空間が創り出されてしまう。ありのままの生活空間を見せるというフット



(写真2) 熊本県美里町の砥用まちなかコース

パスの理念とは大きくずれてしまうのである。これも観光客やフットパス客を多く誘致し地域経済を活性化させることが目的ではなく、あくまでもこれまで築き上げてきた文化的景観、ひいては農林水産業等の生業を維持・活性化することの方を重視していることがうかがえる。よって、観光客やフットパス客は、その地域の生活空間を歩かせて頂いているという感謝の気持ちを持って、文化的景観を維持されてきた地域住民に対し敬意を示さなければならない。



(写真3) 熊本県美里町の小崎棚田コースで地域住民と交流する様子

このようにフットパスの特徴として、地域社会の生活空間を歩く(写真2)ということが挙げられるが、そのため、多くの地域住民との交流(写真3)が可能となる。この地域住民との交流がフットパスには欠かすことのできない要素なのである。フットパスというためには、「地域社会がフットパスを受け入れている」というのが絶対的な条件なのである。そのため、フットパスでは地域住民からのおもてなしを受けることが多い。九州におけるフットパスの先進地域である熊本県美里町の美里フットパス協会の井澤り子運営委員長によれば、この地域住民のおもてなしや「地域社会がフットパスを受け入れている」という判断材料として、地域住民の「笑顔と声掛け」をお願いしているという。具体的には、フットパス客が近くを通ったら、「今日はフットパスですか?」とか、「どこから来なされたね?」など、一言フットパス客に声をかけてあげること、もしくは顔を見たら笑顔で対応してくれることなどである。そこで地域住民との交流が生まれ、地域文化や自然環境の植生、もしくは郷土料理や生業など、様々な地域の情報を得ることができるのである。

このような交流によって、受け入れる地域住民側にも変化が生じつつある。多くの人から、「素晴らしい景色ですね?」、「このような景色を維持されてきた皆さんに頭が下がります。」「また素晴らしいこの地に戻ってきたいと思います。」など、フットパスを訪れた客から、地域住民にとっては日常的な風景や営みを称賛されることが増え、放棄され崩れつつあった棚田も管理が行き届くようになり、生業が活発になってきたという。また、地域の高齢者の中にはこのような田舎まちで一生を終えていくのかと悲観的に思う人もいたというが、フットパスを導入して多くのフットパス客と交流を重ねていくうちに、自分の住む地域がどんなに良い所なのかを改めて感じ、ここで一生を終えられることを幸せに思うという考え方に変わった住民もいる。

ここまででフットパスの目的が大まかにではあるが、見えてきたであろう。フットパスの最大の目的は「交流人口の増加による地域活性化」である。そのため、地域社会に赴きフットパスを歩くので、のどが渇いたりおなかが空いたりし、飲食物を購入するなど地域社会にお金が落ちる仕組みにはなっているが、これはあくまで副次的な効果に過ぎない。フットパスの目的に沿って考えれば、水筒とお弁当持参でフットパスを歩いて1円も使わずに帰ったとしても、地域住民との交流を密に行っていれば、それはそれでフットパスの効果として良いのである。フットパスが地域経済を活性化するために導入され、多くの観光客を誘致し多くの経済効果を得ようと目的化した途端、フットパスは単なる観光客を楽しませるためのツールとなってしまう。地域活性化や地域づくりは、地域住民が主体的に関る参加型の仕組みを構築しなければならない。

(3) エコツーリズムとグリーンツーリズム

現在、フットパスはエコツーリズムの一種として認識されることが多い。しかし、フットパスはこれまでの観光（ツーリズム）とは異なる点が多い。そこでまずは、エコツーリズムとエコツーリズムに類似する概念として使用されるグリーンツーリズムについて言及しておきたい。

環境問題が経済化する中、社会的な潮流として、「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光」とされる、エコツーリズムが環境省によって推奨され、2008年4月1日には「エコツーリズム推進法」が施行された。本法律の特徴としては、動植物の生息地などのいわゆる自然環境だけではなく、それらの自然環境と密接に関係する風俗慣習などの伝統的な生活文化も自然観光資源として定義している点である（第2条1項）。つまり、単に地域に生息する動植物を観察するだけではなく、その地域においてどのような生活が営まれ、住民が自然をどのような形で利用・管理してきたために形成された景観であるのかという背景をも理解することが望まれているのである。この点においては、フットパスと合致する点も多く見受けられる。

また、エコツーリズムと類似するものとして、農家民泊や体験農業などの農的営みを体験する点に重きが置かれている、体験型・滞在型のグリーンツーリズムも注目を集めている。グリーンツーリズムは農林水産省によって推奨されており、都市と農村の交流事業を促進さ

せる狙いがある。つまり、エコツーリズムは地域環境を保全する、健全に保つことを第一義的な目的としているのに対し、グリーンツーリズムは都市と農村の交流を活発にすることによって農林水産業の六次産業化を視野に入れて活性化することを第一義的な目的としているという差異がある。このグリーンツーリズムを促進させるために、1994年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」（通称：農山漁村余暇法、グリーンツーリズム法、以下余暇法と記す）が制定され、その後、農林漁業体験民宿業者の登録制度の一層の活用を図ることなどを目的として、2005年6月に法律が改正され、同年12月に施行されている。

農家民泊は、農林漁業体験民宿業とされ、施設を設けて人を宿泊させ「農村滞在型余暇活動」に必要な役務を提供する営業と法的には位置付けられている（余暇法）。元来、民宿は旅館業法の「簡易宿所」に該当する。簡易宿所には、客室の延床面積が、33平方メートル以上であることが義務付けられている（旅館業法施行令1条3項）。しかし、一般的な農家の住宅が、必ずしも33平方メートル以上の広さを有しているとは限らない。そのため、余暇法によって農業従事者（農家）、もしくは農林漁業者又はその組織する団体が行うものが事業者である場合は、33平方メートル以下でも営業が可能ということを決めたのである（余暇法第2条5項）。この事業を進んで活用した地域として有名なのが、長野県の南端に位置する過疎の町である飯田市である。飯田市では1999年から本格的に「体験教育旅行」として都会の中学・高校の修学旅行を受け入れ、農家民泊を行うことで援農ボランティア制度として確立させ、都市と農村の交流を活発にしようと取組みを始めた。その後、飯田市のグリーンツーリズム事業は継続・拡大され、2003年には南信州グリーンツーリズム特区の認定を受け、どぶろくの製造・販売や農家民泊を事業化した。このようにグリーンツーリズムの積極的な導入によって、飯田市はこれまでに7億円の経済波及効果を生み出したと試算されているという〔島田他2006：42〕。

（4）新たな第3の観光の形であるフットパス

そもそも観光とはいったい何なのであろうか。観光は「光」を「観る」と記す。ここでいう「光」とはアウラと言われる「聖的なオーラ・光」のことを意味する。例えば、仏様を見ると後光が差しているというように、聖的な独特の光を有していることを指示しているのである。つまり、「光」を「観る」というのは、聖的な世界への探訪であり、聖地への巡礼であったり、日本であればお伊勢参りや四国八十八か所をめぐるお遍路さんであったりする行動が、「観光」の原初的意味であった。

その後、観光が特権階級や富裕層だけにとどまらず一般の者にも行えるようになっていくにしたがって、観光は娯楽的な意味合いが強くなってきた。現代社会においては、観光の典型例であったのは「マスツーリズム」である。マスツーリズムとは、大衆化された観光のことを指し、低価格化によって多くの人々に観光サービスを提供することである。日本においても団体旅行や社員旅行などが広く行われており、大型バスで観光地の大規模温泉旅館等に宿泊し宴会を催して、仲間との親睦を深めるとともに娯楽として楽しむようなスタイルが一

般的であった。次第に団体旅行から個人旅行へシフトする流れがあるが、それは大衆化された観光スタイルを踏襲したものでありマスツーリズムであると言える。

このようなマスツーリズム的な観光形態が第1次段階であるとする、第2段階として新たな潮流を作ったのが、前述したエコツーリズムであり、グリーンツーリズムである。地域に出て行ってそこで営まれている生業を体験したり、感じたりする観光形態である。グリーンツーリズムの先進地として有名な大分県の安心院町において、農家民泊においては、非常に丁寧なサービスの提供を受け、地元食材をふんだんに使用した夕食を頂いた(写真4)。しかし、農家の方々の気遣いやサービスの心は、十分に感じられ、非常にありがたかったが、サービスされすぎの感があった。つまりは、マスツーリズムと異なり地元食材を使用した郷土料理を提供して頂き、農家の方と一緒に食事を囲み語らったが、どうしてもサービスを提供する側とサービスを受ける側という構図になってしまっていた。マスツーリズムからグリーンツーリズムへの変化は、時代を経るごとに観光客のニーズが変化してきたことに起因する。しかし、その構造を分析してみると、観光客のニーズに即したサービスや商品を提供する側が用意し、観光客はお金を支払うことによってそのサービスを楽しんでいるという構図となる。第1次段階のマスツーリズムにおいては、高価な高嶺の花であった「観光」というものを一般大衆が享受できるという点に重きを置かれ、低価格で旅行をしたいというニーズに即した観光商品開発が行われていた。一方、第2段階のグリーンツーリズムに関しても、構図的には同様なものであって、「低価格で良好をしたい」というニーズから、「自然豊かな環境で、人とは違う体験をしたい」というニーズに応えるべく、受け入れ側が観光商品開発を行い、そのサービスを観光客が享受しに来ているに過ぎないのである。そのような意味においては、第2段階は第1段階の延長線上にあると言える。



(写真4) 大分県安心院町の農家民泊での夕食の様子(2014年2月22日、撮影者:中島久宜)

では、フットパス観光はどうであろうか。フットパス観光では、多くの人が地域社会を訪れるイベント時などには、地域のご婦人方が集会所やご自宅で「縁側カフェ」というものが開催される(写真5)。市販されているものは用いず、地域で採れる食材を手間暇かけて地域のみんなで料理し、フットパス客を「おもてなし」するのである。しかし、縁側カフェをしている地域のご婦人方は謝金をもらえるからとか、フットパス協会に頼まれたからという理由から、縁側カフェをしているのではない。彼女らに尋ねたところ、縁側カフェを行う最大の理由は、「自分たちが楽しいから」であるという(写真6)。フットパスが整備される前までは、家でテレビを見て過ごしていたことが多い方が、縁側カフェを行うことで近所の人たちと一緒に料理をすることができ、また「××さんの家のおばあちゃんは〇〇がうまいのよ」という社会的評価も得られる。そして何より、都市部で生活する人が多いフットパス客にとっては、手間暇かけた田舎の郷土料理が何よりもごちそうで、自分たちの作った料理をほめてくれることに対する喜びもあるのである。縁側カフェを行うご婦人方の中には、東京や北海道、福岡、山形など様々な地域の人と友達になれたと嬉しがって語ってくれる方もいた。一見すると、サービスをする側とされる側との区別がしっかりされているようであるが、そうではない。料理を作り終わると、ご婦人方は一緒に食事をし、一緒に語らう。サービスをしているという意識はなく、楽しいから一緒にやっている、好きだからしているという関係性が構築されており、これは貨幣を媒介とした繋がりによって作られたものではない。さらに、フットパスではフットパス客が自ら主体的に楽しみを見出すことが要求される。用意されたサービスをただ享受するだけの観光ではなく、野鳥や季節の花に興味がある人は立ち止まって観察しても良いし、地域の方と交流したい人は積極的に話しかけ、その地の地域文化や慣習について立話することも良い。また、日頃見かけない景観を見つけた際、なぜこのような景観が形成されたのかを発見するためにフットパスコース付近をウロウロ回っても良いし、地域の方を見つけて質問したりしても良い。フットパスガイドが付き添っている場合でも、自分の興味関心に基づいて行動しその地域の魅力を自らが発見し、自らが主体的に楽しむというのがフットパスの特徴なのである。したがって、サービスや観光商品を一方的に提供する側とそれを消費者として提供される側という観光の構図は、フットパスには存在しない。用意されたものを楽しむ、体験するという構図から、自らが地域社会を楽しむ主体的な観光スタイルとしてフットパス観光は、新たな第3段階に入ったといえる。



(写真5) 熊本県美里町内の公民館で行われた「縁側カフェ」



(写真6) 縁側カフェ後、別れを惜しむ地域のご婦人方

(5) 「おもてなし」サービスとの違い

これまで、サービスという用語を多々使用してきたが、ここで改めてサービスと「おもてなし」との違いについて、言及しておきたいと思う。サービス (service) の語源は、servant であり、この単語は召使いを意味する。つまり、主従関係がある状態において、従が主に提供する労務をサービスというのである。これが現代社会においては、貨幣を媒介とした契約

関係において、一時的な主従関係が構築され、お金を支払った側が「主」でその報酬を受け取った側が「従」となって、サービスが提供されるのである。

一方、おもてなしを英語で表記すると「hospitality (ホスピタリティ)」となる。同じ語源となる言葉に「hospital (病院)」が存在する。病院は元来、修道院などの慈善施設をその起源としている。その際、提供される労務はサービスではなく「無償の愛」である。善行の意思に基づいた貨幣を媒介としない労務・役務の提供である。おもてなしをしている側も、善行を行うことによって救われるという宗教上の価値観から、究極的には自分のために行っている活動であるといえる。

フットパスにおいて地域住民の方々がやっている「おもてなし」はフットパス客に対するサービスでは決してない。自然資源は豊富に残存しているが、目立った特色ある観光資源や施設があるわけでもない農山漁村部においては、まさに人自身が資源なのである。これは、おもてなしを受けたフットパス客が、その人に惹かれてまたその地域を訪れるという点で、フットパスの再訪性を担保している要因の一つである。フットパス客にはリピーターが多いという特徴もここに起因している。しかも、再訪しその地域で再び同じ地域の方に合うとフットパス客は「ただいま」や「戻ってきたよ」と挨拶する人が次第に増えてきたという。フットパスは人と人をつなぐ仕組みとして地域活性化に大きく寄与していると言える。

3. 九州におけるフットパスの課題と新たな展開

(1) フットパスの課題

現在、九州ではフットパスが急激に広まってきている。フットパスの先進地である北海道はこの九州で生じつつあるフットパスブームをすでに経験しており、先進地であるが故の課題も顕在化している。実際に北海道で生じた現象をもとに、九州で加熱するフットパスブームによって生じうる今後の課題について検証してみたい。

第一に、フットパスブームによって、地域活性化の手法として行政が新たな地域振興策として大々的に取り上げたことによって生じた問題である。多くの団体が地域振興策としてフットパスの導入を模索し、行政からの一時的な予算や助成金を用いて、地域住民の十分な理解と協力を得られないままに、フットパスコースを策定し、それをもとにマップ作りを行うなどの行為が北海道においては多く見受けられた。その結果、行政からの予算が途切れたり事業期間が終了したりした途端、フットパスを続けるための費用が捻出できず、フットパスコースの草刈等の管理がなおざりになり利用できなくなったフットパスコースのみが残されることとなってしまった。フットパスにとって最も重要であったはずの「地域住民が主体的に作りあげ、地域社会に受け入れられる事」ということを十分徹底される事無く、フットパスコースが策定されてしまったが故の悲劇である。

第二に、フットパスブームによって多くの旅行者や大企業がフットパスツアーを企画し、多くの観光客を地域社会に連れてくるが多々あった。しかし、自然豊かな農山漁村に一度に数百人の観光客が訪れ、地域内をぞろぞろを歩き回った後帰っていく様子は、とても地

域住民にとっては受け入れがたく、また受け入れる側の地域住民にとっては負担が大きく、フットパスを協力してともに作り上げていくことは大変であると協力者を失うことになってしまったのである。これらはフットパスの概念を正しく理解せず、単なる街歩きルートや遊歩道、緑道などの公道を繋ぎ合わせたものをフットパスと称するものが出てきていることである。フットパスとは、地域社会に受け入れてもらって初めてフットパスと呼べるものとなる点に注意が必要である。その一方で、フットパス客にとっても、集団でツアーのようにズラズラ歩くだけのフットパスでは、期待をもって地域を訪れたにもかかわらず、「フットパスとはこんなものか」「単なるウォーキングではないか」と残念に思われ、フットパスの価値や評価を下げってしまうことにもつながる。

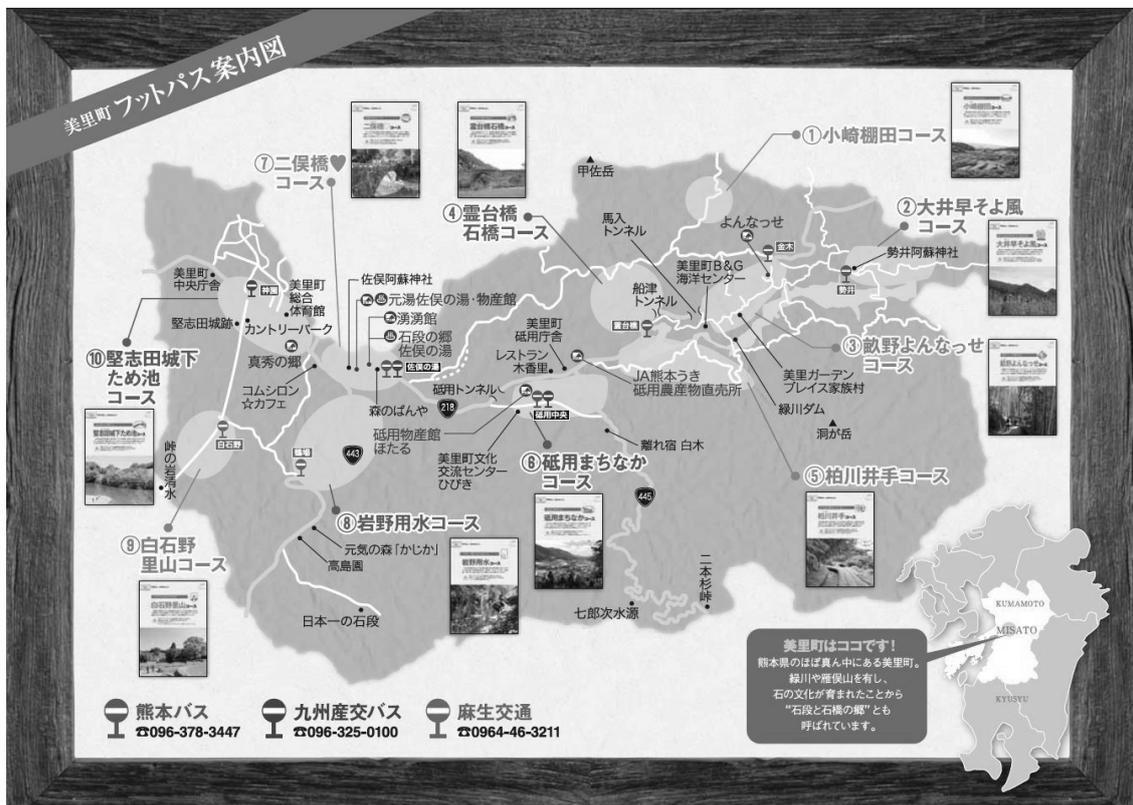
そして第三に、行政からの助成金を受ける期間が限られているため、地域の方や土地所有者との交渉に十分時間が取れず、事業の終了前にフットパスマップを作成しようとするケースがある。その際、土地所有者の許可を得ていない部分の中には存在し、行政やNPOがつくったフットパスマップにはこのような無断で掲載されているフットパスコースもあるという。近年このような問題が顕在化し、土地所有者とフットパスを設定した主体との係争がマスコミでも大きく取り上げられている（2012年10月31日付『北海道新聞』）。小川（2012）が「今後は（フットパスの）量的拡大から質的充実を目指す必要がある」（小川，2012：11）と述べているように、これらの課題を解決した形でのフットパスの質的向上が期待される。

(2) 美里式フットパスづくり

これまでも言及してきたが、九州におけるフットパスのけん引役は、熊本県の美里町である（図1）。美里町では「美里フットパス協会」（会長：上田泰弘〔美里町町長〕，運営委員長：井澤り子，事務局長：濱田孝正）を2013（平成25）年4月1日に設立した。美里町においてフットパス事業を取組み始めたのは、2011（平成23）年からであり、その導入のきっかけを作ったのが、特定非営利活動法人美里NPOホールディングスの理事長である濱田孝正氏である。彼は、とある雑誌でフットパスを知り、同年北海道黒松内町で開催された全国フットパスシンポジウムに参加したことが、フットパスづくりの契機となった。同時期に、美里町では町の活性化を目指し、様々な取組みが行われていた。2011年から正式に「美里町地域振興協議会」ではフットパスコースづくりやフットパスマップづくり、そのための地域調査を行い、「美里町商工会」ではフットパスモニターイベントの開催や美里町を訪れるウォーカーに買ってもらえる特産品の開発や美里ブランドの認定制度を整備した。また、「美里町雇用促進協議会」においてはフットパスガイドの養成講座やおもてなし研修講座など、フットパス事業のソフト面を充実させるための活動を行った。これらの活動がうまくかみ合い、美里町のフットパス事業は一気に進んでいった。この流れを一時的なものにせず、地域住民を巻き込みながら持続的な活動として継続していくために美里フットパス協会が設立されたのである。

美里フットパス協会は、美里町内のフットパスに関する業務全般を執り行うことが最大の役割ではあるが、同時にもう一つの大きな使命を持っている。それは、九州フットパスネ

ットワーク九州（以下、FNQ）のリーダー的存在として、九州全土のフットパスの質的向上に向けた制度の構築を主導して行うことである。これは、北海道で生じたフットパスブームによるフットパスの質的低下のような事態を防ぐべく、自らの経験を生かした美里方式のフットパスづくりを九州全土に広げていこうとするものである。



（図1）熊本県美里町の位置と町内のフットパスコース（美里フットパス協会提供）

美里式とは、フットパスを地域社会が受け入れていただけるようになる仕組みが見事に構築されている。まず、フットパスコースを策定しようとする場合、行政的な手法であれば、町内のすべての集落に区長等を通じてフットパスの説明会を開き、平等主義的に町内に万遍なくフットパスコースの敷設を試みるであろう。しかし、美里フットパス協会の手法は、そうではない。歩いて楽しそうな道、地域住民が通っても良いと言っている道を丹念に草の根的に集落内の道を歩き回ることから始める。1・2回ではなく、同じ集落を何十回と歩くことで、地域住民の中には、自分たちの集落を定期的に歩きにくる人たちを不思議に思い、「何をしているのか」と声をかけてくる人たちもいる。そのような方々には、「フットパスということをしている」「集落内で歩いて楽しい道はないかね？」と尋ねていく方法をとっている。その結果、草の根的にフットパスの存在を広めることができ、道を教えてもらうことによって地域住民とともにフットパスコースを作っていることになる。それに楽しそうに歩いていると、フットパスづくりの活動に興味をもって、一緒にやってみようという協力者が出てくる。美里フットパス協会では、「〇〇をしてください」とお願いするのではなく、「一緒にや

らんかね？」と声掛けをする。これは美里フットパス協会が、フットパスづくりの主体は協会ではなく、あくまで地域住民であるとの思いからの声掛けなのである。つまり、「してください」という表現は、仕事ををお願いする側とそれを引き受ける側という関係性を生み出してしまいが、一緒にやるということはともにフットパスづくりを行う仲間として参画しないかという誘いであり、地域住民が主体的にフットパスづくりに参加していくことを促進する効果がある。このような声掛けを集落内で頻繁に行い、協力者の多い地域からフットパスコースは完成していくという。したがって、一つの集落内に複数のフットパスコースがある地区もあれば、まったくフットパスコースが敷設されていない地区も存在する。かつては否定的であった集落でも、他の集落において多くのフットパス客との交流をする様子が楽しそうで、私たちの集落でもやってくれないかと、改めて声をかけてくることも多々あるという。このような草の根的にフットパスづくりを行った結果、現在（2014年3月現在）では美里町内に計18コースのフットパスが作られている。

もう一つ、美里フットパスの特徴が存在する。それは美里フットパス協会がフットパスコースの道の管理は行わないという方針を固めていることである。これはフットパスの定義にある「ありのまま」の風景を楽しむという理念に基づいて行われている。フットパスを地域社会に根付かせ、持続可能なシステムとして構築しようとする、仕掛ける側（美里フットパス協会）にもまた、受け入れる側（地域住民）にも過度な負担をかけることはできない。したがって、これまで地域社会で日常的に行われてきた生業やそれに付随する共同作業（草刈りなどの道普請）は、これまで通り地域住民が行うこととして規定し、決して美里フットパス協会や美里町が行うことはない。これは歴史的に培われてきた文化的景観を形成してきたのは地域住民の生業であって、この仕組み自体が日常生活に溶け込んだありのままの姿なのである。フットパスはその生活空間を歩かせていただくだけであり、フットパスを作ったからといって、これまで地域住民がおこなってきたことをフットパス協会が代わりに行うことは望ましいことではない。ありのままの原則である、「こわさない」「つくらない」という方針は、物理的なことだけでなく、フットパスを導入することで、これまで慣習的に営まれてきた地域社会の制度やルールに関しても適応されているのである。

また、最後に付記しておきたいのは、大手旅行会社を通じて美里フットパス協会に団体でフットパス参加の打診があった際、美里フットパス協会は受け入れる人数に制限をかけている。それは前述したような理由からであり、一度に多くの客を受け入れることは、地域住民にとっても負担が大きく、また密な交流ができないためであり、その結果フットパスの本来の目的が損なわれてしまうと判断するからである。美里フットパス協会では、大型バス数台で数百人のツアーを企画していると打診された場合は、日にちをずらして、数十人ずつ来て下さいと呼びかけるといふ。これは多くの観光客を受け入れて地域経済を活性化することを第一義的な目的とせず、あくまでフットパスは地域住民のための地域活性化策であるという信念のもと、密な交流による楽しみの創出を目指しているためである。したがって、フットパスの目的は「交流人口の増加による地域活性化」であることに重きを置くことが重要となってくるのである。

4. 公共性を有した生活空間の構築 —むすびにかえて—

フットパスの副次的効果として、フットパス客によって見られる感があることから、集落内の道や景観に地域住民が気を配ることが多くなった。これまで放棄されてきた地域の自然環境も、フットパスによって生業の復活や活性化という効果も生じつつある(写真7)。もともと日本社会には集落の土地や住民でしか通ることができない道なども多々存在する。実際に農村社会学者や農業経済学者の中には、1960年代から70年代にかけて、農林業センサスの実施のため農業集落の地理的空間の範囲(領域性)を定める必要があり、その実態調査によって「ムラの領域」という概念が集落住民に認識されており、二重性の存在を発見したという[鳥越1997:8]研究者も存在する。川本彰(1972)は、この「ムラの領域性」をムラの人たちが「領土」と呼んでいた、「オレ達のムラの土地」と呼んでいたことを調査によって発見している。ムラには「家の財産」として「家産」が存在するのと同様に、「ムラの財産」たる「ムラ産」というべき土地が存在しているのである。また、川本のみならず渡辺兵力(一九八六)も、「ムラ総保有」という言葉を用い、ムラ社会に「重層的所有観」が存在することを発見している。「伝統の村落における地域住民の土地についての心情は『村落産的土地観』であったと考えられる。いいかえると、ある村落の領域内の土地は今日の法制からみれば個々の農家の私有地であっても、ムラの考え方では『ムラの土地』(村落総保有地)という意識を伝統的に持っている」[渡辺1986:236]との見解を示している。

職業柄、転勤族である九州農政局土地改良技術事務所所長の中島久宜は、美里町へのワーキングホリデーの最中に歩いたフットパスについて、以下のようにヨソ者の視点から美里フットパスを評価している。これからの旅は、「有名な観光スポットを見るだけでなく、目的地へ至る旅程のあらゆる場面で自分の五感を通じて得られる様々な発見や出会いを楽しむことが旅の目的になってきている」[中島2013:15]と観光客のニーズの変化を指摘したうえで、「美里町のフットパスは(そのニーズに)見事に応えていると思います。人里は、そこに住む人がいて丹精を込めて手入れしていただいているからこそ美しいのですが、人の生活の場でもあるので、外部の者が無制限に踏み込んで行って良いものではありません。美里フットパスは、住んでいる人たちが、外部の人に、『ここまでは入ってきても良いのですよー!』と道標やパンフレットで呼びかけてくれている、たいへんありがたい取り組みです」[中島2013:16]。地域社会には確かに、ヨソ者が入りづらい雰囲気が存在する。それは、日本社会においては歴史的に培われた集落内の土地に対する住民の領土意識が存在するためである。これはたとえ自分の所有地でなくとも、生活空間という自分の身近な領域に侵入されるということには、地域住民が敏感になるのは無理もないことであろう。だからこそ、フットパスには地域住民の理解と受け入れる体制づくりが必要なのであり、フットパスはこのような生活空間を歩くことができるからこそ、単なる遊歩道や散歩とは異なるのである。

フットパスによって閉鎖的な印象の強い、日本の農山漁村地域において、公共性を有した生活空間のオープンアクセスが可能となった。その結果生じる、交流人口の増加、交流に伴う地域住民の生活の質の向上、自然環境の改善に寄与する生業の再生、地域経済の活性化等

様々な効果をフットパスは地域社会にもたらしてくれている。多くの観光地化を目指す地域において、「なぜ私たちの地域に観光客が来てくれないのだろうか」と悩む方も多いと思う。しかし、それは「地域社会に入りづらい、来づらい」がために、来ないという単純な問題なのである。



(写真7) 棚田が生業によって維持されている小崎棚田コース

日本においてフットパスとは、グリーンツーリズムの一種として認識され、体験型のツーリズムとして地域活性化の起爆剤と紹介されることが多い。だが、フットパスの最大の目的は、地域内に人を呼び込むこと、つまり交流人口の増加である。交流人口の増加に伴って、地域にお金が落ちるといった経済的な効果もフットパスの効果として期待されているが、健康のために歩きに来てもらい、住民の方と立ち話をして、地域内で1円も使わずに帰っていく行為でも、フットパスの本来の目的からすると良いのである。そのため、フットパスを経済的な目的を達成するための観光事業の一つと位置付けることには、大きな危険性がある。

また、同様にフットパスによる地域環境の改善効果、伝統的文化（食文化も含む）を継承させる効果も、副次的効果として認識するべきであって、これらを目的化しそれを達成するためにフットパスを導入するというのは、「目的－手段」関係を取り違えているように感じる。したがって、フットパスは地域社会における社会的・経済的・環境的・文化的な意味で大きな意義を有した活動ではあるが、それは副次的なものであって、それを前面に出して目的化するとフットパスづくりは失敗する可能性が高い。この認識を共有化することで、九州全土でフットパスが一時的なブームとして終わるのではなく、地域社会に根付く文化として、大

きな発展を遂げてもらいたいと私は強く願っている。

謝辞

本稿は、科学研究費補助金「コモンズのオープンアクセス化に伴う新しいコモンズへの展望と課題の克服」(研究代表者: 廣川祐司) の研究成果であるとともに、科学研究費補助金「環境政策におけるコモンズの公共性研究」(研究代表者: 鈴木龍也) の研究成果でもある。また、美里フットパス協会の井澤るり子運営委員長、ならびに美里NPOホールディングスの濱田孝正理事長には、幾度となく調査にご協力いただき多大な時間と手間をかけて頂いた。改めてお礼申し上げます。

参考文献

- 小川巖 [2012] 「伸びゆく北海道のフットパス～さらなる発展のために～」『開発こうほう』一月号, pp. 7-11.
- 川本彰 [1972] 『日本農村の論理』 龍溪書舎.
- 島田晴雄・NTTデータ経営研究所 [2006] 『成功する! 「地方発ビジネス」の進め方』 かんき出版.
- 鳥越皓之 [1997] 『環境社会学の理論と実践』 有斐閣.
- 中島久宜 [2013] 「美里フットパス」『文集みさと』 9.
- 渡辺兵力 [1986] 『村を考える—集落論集—』 不二出版.

北九州市立大学生の大学・学部の選択要因と満足度に関する調査

鈴木 優 香

1. はじめに

大学数の増加と少子化による18歳人口の減少により、2000年には大学進学率は約5割に達し、大学進学は特別なものから希望すれば可能なものとなった。このような、いわゆる大学全入時代においては、単に大学に入学・卒業したという事実ではなく、大学において何を学ぶか、学んだことを自身のキャリアにつなげることができるか、といった学びの内容がますます重要となると考えられる。最近の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」においても、学修時間の確保や体系的な教育プログラムの実施など、学生に能力を身につけさせる方策が提言されている。

一方、近年では、学生のやる気の低下や就職先のミスマッチなど新たな課題も指摘されており、大学生が学校で学びたいことを学べているとは限らない状況がうかがえる。先行研究では、高校生の約半数はなりたい職業のないまま進学していること、この動機付けの欠如が主体的な学び意欲の低下の一因となっているであろうこと、専攻分野によって学生の意欲や進学動機は異なっていることなどが指摘されている。

そこで、学生は大学に何を求めて進学しているのか、大学は学生の期待に応えているのかを明らかにすることを目的に、北九州市立大学生へのアンケート調査を実施した。この結果をもとに、大学・学部の選択要因と大学に対する満足度の相関関係についても解析した。

2. 北九州市立大学

今回の調査を実施した北九州市立大学は、学部として、外国語学部（2013年度学生数1,134名）、経済学部（1,269名）、文学部（985名）、法学部（1,116名）、国際環境工学部（1,112名）、地域創生学群（430名）、大学院として、法学研究科（10名）、人間文化研究科（1名）、社会システム研究科（86名）、国際環境工学研究科（295名）、マネジメント研究科（58名）を有し、教員約250名が学生計約6,500名に教育を行っている。

歴史は比較的早く、1946年に創立した小倉外事専門学校を前身とし、1950年に北九州外語大学として創立された。その後、小倉南区北方において、文系学部のみを有する大学として発展してきたが、2001年の北九州学術研究都市の設立にあわせ、理系学部として国際環境工学部を若松区ひびきのに開設した。また、2009年には、現場実習を通じて、地域の再生と創造を担う人材を育成することを目的とした、地域創生学群を開設している。

偏差値は50～60ぐらいであり、歴史のある外国語学部が比較的高い一方で、新設の国際環境工学部が低くなっている。福岡県内からの進学が約45%を占め、九州、中国圏など近隣地域から進学する学生が多い。国外からの入学について、中国人留学生が850人を超えており、

学生の約15%をしめている。

また、北九州市立大学ではグローバル化と地域連携を戦略的に進めており、地域創生学群や留学生支援のほか、副専攻としてGlobal Education Programや持続可能な地域づくりに貢献する環境ESDプログラムを設置している。これらの専攻は文部科学省の支援事業にも選定されている。このような活動は、2012年度の日経グローバル誌の大学地域貢献度ランキングにおいて全国第3位、日経BPコンサルティング調査の大学ブランドイメージのうち語学に長けているで九州地方第5位との評価がなされている。

3. 調査方法

北九州市立大学の学生に対し、2013年7月に、大学・学部を選んだ理由や大学に対する満足度等に関するアンケート調査を実施した。アンケート項目の一部は、ベネッセの「進路選択に関する振り返り調査」⁽¹⁾、「大学生の学習・生活実態調査」⁽²⁾を参考に作成した。調査方法は、①授業時間中のアンケート用紙の配布（1年生2クラス、3年生1クラス）、②大学の掲示板に掲載したウェブ調査、③キャリアセンターでのアンケート用紙の配布、の3通りの方法で実施し、回答数の合計は256件だった。属性は表1のとおりであり、学年と学部・学科の分布は、アンケートを実施した授業を履修していた、1年生文学部人間関係学科、国際環境工学部に偏った。これら以外の分布については、2013年度の学生集団の分布（男性率47%、福岡県出身者率46%、自宅率37%、日本学生支援機構の奨学金受給率51%）とほぼ同様であった。

表1 サンプルの属性

性別	男性		女性		その他（無回答含）			
	122	48%	133	52%	1	—		
学年	1年		2年		3年		4年	
	197	77%	15	6%	27	11%	17	7%
学部・学科	外国語学部				地域創生学類			
	英米学科		中国学科		国際関係学科		地域創生学群	
	6	2%	5	2%	9	4%	19	7%
学部・学科	経済学部				法学部			
	経済学科		経営情報学科		法律学科		政策科学科	
	11	4%	27	11%	17	7%	3	1%
学部・学科	文学部				国際環境工学部			
	比較文化学科		人間関係学科		エネルギー循環化学科		機械システム工学科	
	4	2%	66	26%	18	7%	5	2%
学部・学科	国際環境工学部							
	情報メディア工学科		建築デザイン学科		環境生命工学科			
	11	4%	35	14%	20	8%		

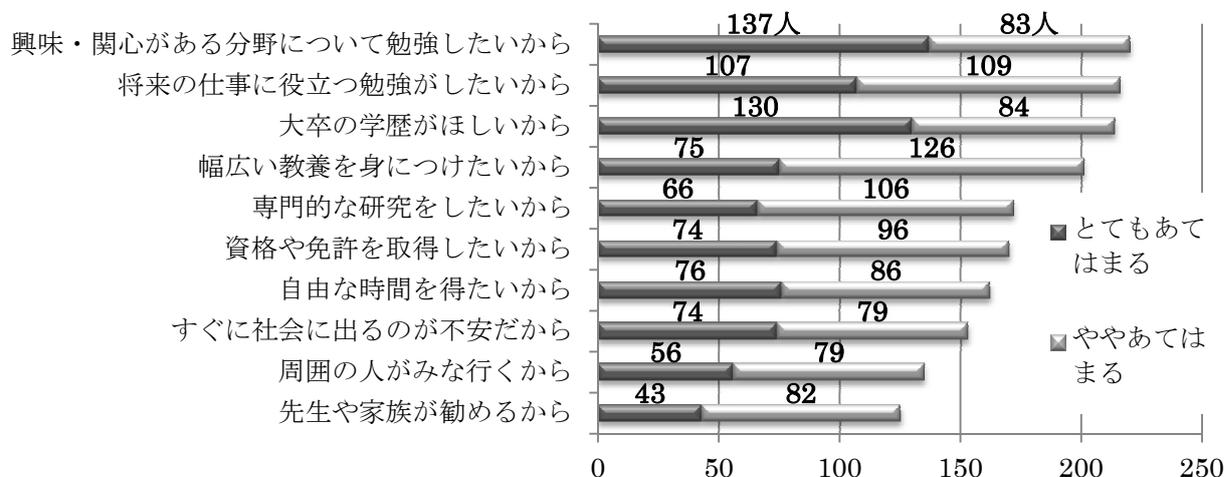
	福岡		山口		熊本		大分	
	131	51%	16	6%	16	6%	15	6%
出身地	広島		長崎		鹿児島		愛媛	
	14	5%	8	3%	8	3%	7	3%
	宮崎		沖縄		佐賀		その他（無回答含）	
	5	2%	5	2%	5	2%	24	—
北九大の志望順位	第一志望		第二志望		第三志望以下		その他（無回答含）	
	149	58%	49	19%	55	21%	3	—
現在の住まい	自宅		一人暮らし		その他（無回答含）			
	110	43%	136	53%	10	—		
学生支援機構の奨学金	もらっている		もらっていない		その他（無回答含）			
	131	51%	123	48%	2	—		

4. 結果

（1-1）大学の進学理由

アンケートの前半では、大学へ進学する前の選択について質問した。はじめに、大学進学の動機について聞いたところ、半数以上が「興味・関心がある分野について勉強したいから」、「大卒の学歴がほしいから」について、「とてもあてはまる」を選んだ。ついで、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、「幅広い教養を身につけたいから」が選ばれており、「ややあてはまる」もあわせると、上記4つは8割を超える回答者に支持されている。一方で、「周囲の人がみな行くから」、「先生や家族が進めるから」についても約半数が選択しており、回答者は、複数の理由により大学に進学していることが分かった。

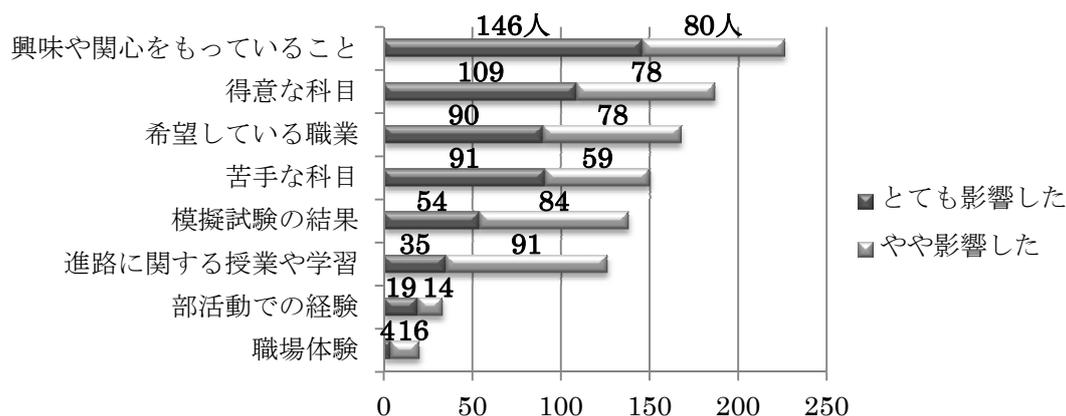
表2 大学へ進学した理由



(1-2) 志望学部・学科の選択理由

次に志望学部・学科を決めた理由について質問したところ、「興味や関心をもっていること」を選んだ回答者が、「とても影響した」、「やや影響した」をあわせると約9割と圧倒的に多かった。ついで、「得意な科目」、「希望している職業」、「苦手な科目」となっていた。「部活動での経験」や「職場体験」は、ほかの選択肢に比べて、影響したとの回答は顕著に少なかった。

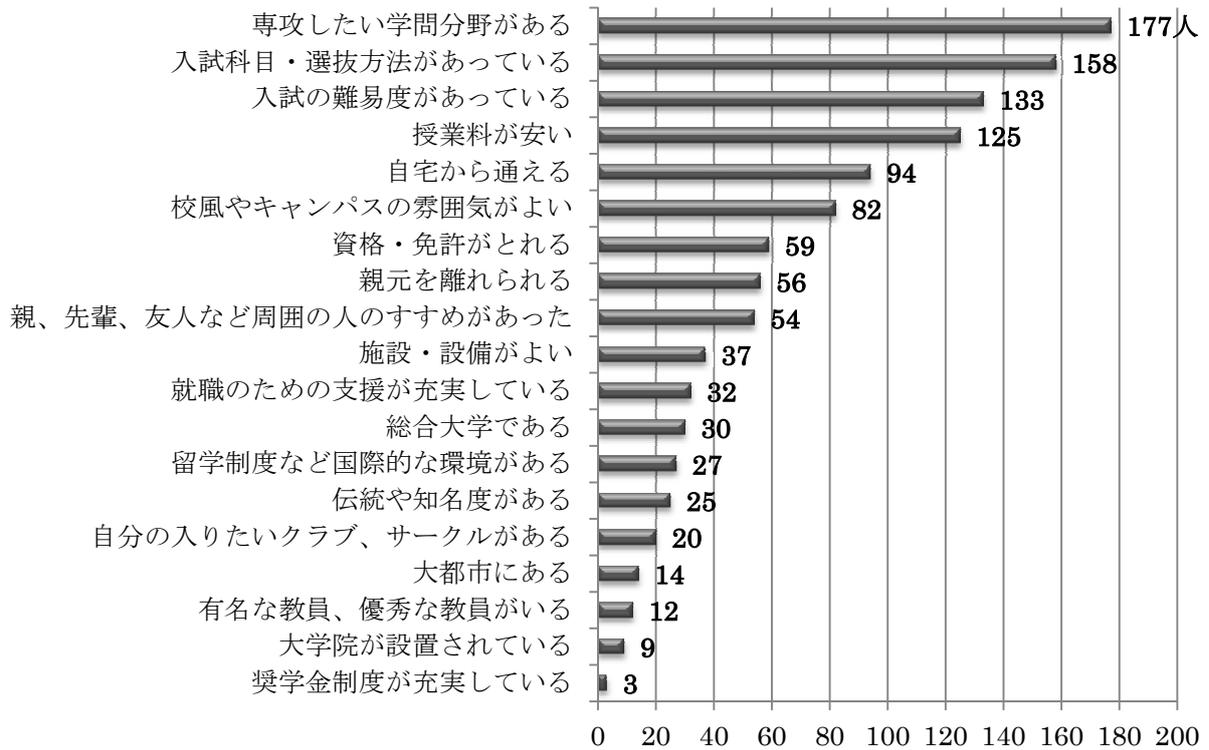
表3 志望学部・学科を決めるときに影響したもの



(1-3) 北九州市立大学の選択理由

ここでは、現在通っている大学や学部・学科に進学を決定する際に重視したことを尋ねた。「専攻したい学問分野がある」、「入試科目・選抜方法があっている」、「入試の難易度があっている」、「授業料が安い」をあげた回答者が多かった。ついで、「自宅から通える」が多くなっているが、「親元を離れられる」という理由も一定数選択されている。また、「校風やキャンパスの雰囲気が良い」、「親、先輩、友人などの周囲の人のすすめがあった」など、北九州市立大学によいイメージがあることが窺える選択肢も選ばれている。一方、就職支援や国際化の取組、有名な教員や大学院の設置を重視したとの回答は少なかった。このほか、自由記述式回答で、複数の学生が地域創生学群に魅力を感じたことを選択理由としてあげていた。

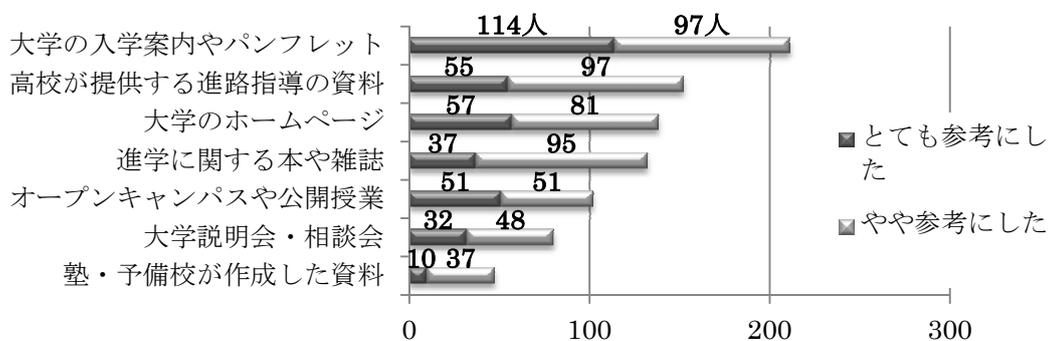
表4 現在通っている大学や学部・学科に決めるときに重視したこと



(1-4) 参考にした情報

あわせて、大学を決定するにあたり参考にした情報についても聞いた。「大学の入学案内やパンフレット」を参考にしたとの回答が最も多く、約8割が参考にしていた。ついで、「高校が提供する進路指導の資料」、「大学のホームページ」が参考にされていた。大学関係者と直接話しができるが、負担や制約も大きい「オープンキャンパスや公開授業」と「大学説明会・相談会」を参考にした回答者は半数以下だった。自由記述式回答では、教師や先輩などの知人の情報や勧めを参考にしたという意見が複数あった。

表5 大学に関する情報源



(2-1) 大学キャンパス生活に感じるギャップ

アンケートの後半では、現在の大学キャンパス生活についてどのように感じているかについて調査した。入学前に考えた大学キャンパス生活と実際のキャンパス生活のギャップについて聞いたところ、約7割がギャップを感じる事が「よくある」、「時々ある」と回答した。その理由は多岐にわたり、また、複数の理由をあげた回答者も多かったが、「授業の進め方・教員の指導方法」が最も多く、ついで「授業の難易度」、「選んだ学部・学科と自身の関心・興味」が選択されている。また、自由記述式回答では、もっと楽だと思った、レポートの量が多い、自由な時間が少ないなど、大学生は時間があるという一般的な予想にあてはまらないことに対する不満が国際環境工学部1年生を中心に訴えられていた。一方で、高校より厳しくないといった意見もあり、選んだ学部・学科や個人で感じ方が異なっていた。

表6 大学キャンパス生活に対して入学前後でギャップを感じることの有無とその理由

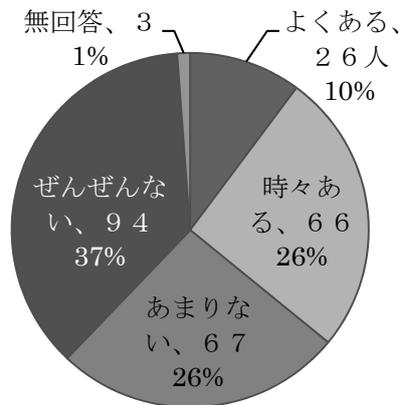


授業の進め方・教員の指導方法	89人
授業の難易度	62
選んだ学部・学科と自身の関心・興味	54
クラブ・サークル活動	49
選んだ学部・学科と将来の進路	38
友人関係	36

(2-2) 学部・学科の選択

さらに、選択した専攻分野で、学びたいことが学べているかを調査するため、異なる学部・学科に入ったほうがよかったと思うことがあるかを聞いた。「ぜんぜんない」、「あまりない」という回答が大多数を占め、自身の専攻分野の選択について概ね満足していることが予想される結果となっていた。「よくある」と回答した場合について、その理由を自由記述式として聞いたところ、心理学に興味をもつようになったから、他学部の授業がおもしろかったからなど大学入学後に興味関心が変わったケース、第一志望の学部ではないから、自分の志望ではなかったからなど当初から入学した学部・学科を希望していなかったケース、つまらないから、ほしい資格がとれないから、留学制度がととのっていないからなど現在の学部・学科に不満があるケースに大別された。

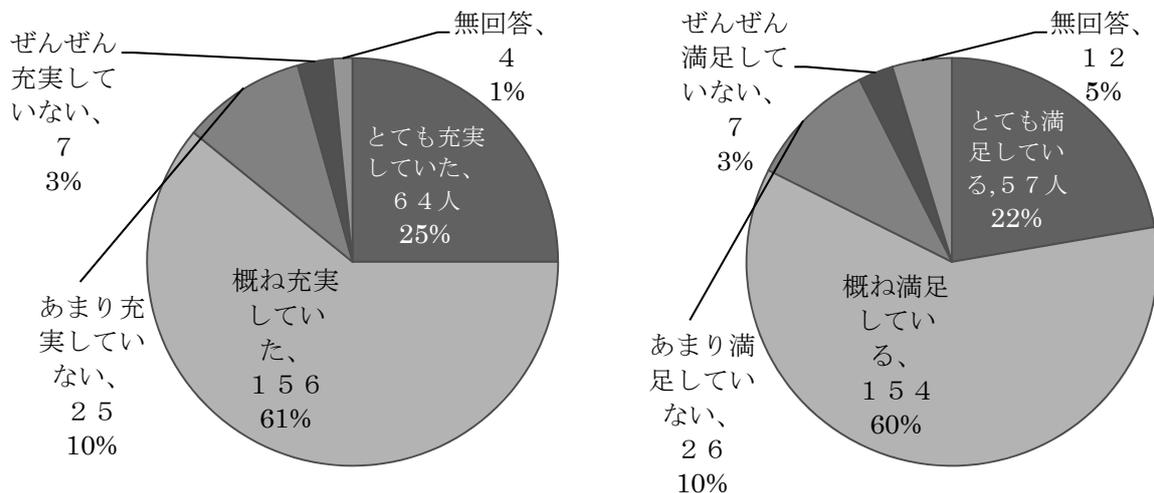
表7 違う学部・学科に入ったほうがよかったと思うことの有無



(2-3) キャンパス生活の充実度と北九州市立大学への満足度

また、キャンパス生活の充実度と北九州市立大学への満足度を聞いたところ、8割を超える回答者が、充実していた、満足していると回答した。北九州市立大学に満足していない理由を自由記述形式で聞いたところ、つまらない、やりたいことができないなど、キャンパス生活の充実度との相関が示唆される理由、想像していたものと違うなど、入学前の予想とのギャップに起因する理由、校舎の古さや授業のやり方など提供されるサービスへの不満に関する理由があげられた。

表8 これまでの大学キャンパス生活の充実度と北九州市立大学への満足度



(3-1) 北九州市立大学生の海外生活への関心

最後に、現在世界中でグローバル化が進展していること、また、北九州市立大学が国際化を強みの一つとしていることから、学生に海外への興味についても尋ねた。将来、海外で働く経験を強くしたいと思う回答者は2割(52名)、やや働きたいは3割(75名)、あまり海外で働きたくないは3割(75名)、ぜんぜん働きたくないは2割(51名)だった。

5. 統計解析

上記のデータを用い、ロジスティック回帰分析法により、入学した大学や選んだ専攻分野に満足している学生はどのような学生なのかについて、詳細な解析を試みた。解析ソフトはSTATISTICALを用いた。

(1) 北九州市立大学に対する満足度

まず、大学に対する満足度に着目し、満足度とキャンパス生活への充実感や満足度と入学前後のイメージギャップについて相関係数を求めた(表9)。従属変数を満足度とし、一定のサンプル数を確保するため、北九州市立大学に「とても満足している」を1とこれ以外(「まあ満足している」「あまり満足していない」「ぜんぜん満足していない」)を0の2群に分けた。説明変数に、性別、学年、学部、入学時の志望順位をおいた場合(Null Model)、志望順位のみ有意な相関があり、北九州市立大学が第一志望だった場合は、その他の場合に比べて、約2.3倍「とても満足している」が選択されていた。

これに、充実度を変数として追加した場合(Model 1)、キャンパス生活が「とても充実している」と回答した回答者は、これ以外を選んだ回答者に比べて、約9.3倍北九州市立大学にも「とても満足している」ことが示された。

イメージギャップとの相関(Model 2)では、入学前に考えた大学生活と実際のキャンパス生活にギャップを感じることを「あまりない」「ぜんぜんない」とした回答者は、「よくある」「時々ある」とした回答者に比べて、約1.8倍北九州市立大学に「とても満足している」という結果が得られた。

また、何にギャップを感じた場合に満足度が低くなるのかを調べた(Model 3)ところ、「授業の進め方・教員の指導方法」にギャップを感じている場合は、「とても満足している」と回答するオッズが、約1/2に下がっていた。

なお、4.(1-1)～(1-4)の各項目を説明変数とした解析も実施したが、統計的に有意な相関は認められなかった。

表9 北九州市立学に対する満足度との相関関係

		Null Model		Model1		Model2		Model3	
		オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数
切片			-2.06 ***		-2.41 ***		-2.28 ***		-1.59 **
学年	1年生=1、ほか=0		0.24		0.13		0.19		0.11
性別	女=1		0.11		-0.12		0.16		0.07
志望	第一志望=1、ほか=0	2.22	0.80 *		0.60	2.25	0.81 *	2.50	0.92 **
学部	国際環境工学部=1、ほか=0		0.20		-0.16		0.26		0.27
充実度	とても充実=1、ほか=0			9.33	2.23 ***				
ギャップ	ぜんぜんないまたはあまりない=1、 ほか=0					1.77	0.57+		
以下の項目についてギャップを感じた場合=1									
	選んだ学部・学科と自身の関心・興味								-0.59
	選んだ学部・学科と将来の進路								-0.01
	授業の難易度								-0.10
	授業の進め方・教員の指導方法							0.42	-0.88 **
	クラブ・サークル活動								-0.25
	友人関係								-0.07
	対数尤度 LR		-122.90		-102.28		-121.47		-118.12
	尤度比カイ2乗値 LR chi2		6.12		47.36		8.97		15.67
	有意確率 Prob > chi2		0.19		0.00		0.11		0.11
	疑似決定係数 Pseudo R2		0.02		0.19		0.04		0.06

有意水準： + p < 10%、* p < 5%、** p < 1%、*** p < 0.1%

(2) 専攻分野の選択に対する満足度

次に、専攻分野の選択に対する満足度と専攻分野選択理由、入学前後のイメージギャップの相関を解析した(表10)。従属変数は、現在通っている学部・学科とは異なる学部に入ったほうがよかったと思うことが「あまりない」と「ぜんぜんない」を1とし、「よくある」と「時々ある」を0とした。説明変数に、性別、学年、学部入学時の志望順位をおいたNull Modelでは、1年生の場合で1.8倍、第一志望だった場合に1.6倍、違う学部に入ったほうがよかったと思うことが「あまりない」、「ぜんぜんない」を選んでいった。

学部・学科を決めるときに影響した項目を説明変数に加えると(Model1)、「興味や関心をもっていること」が「とても影響した」場合、その他の場合に比べて、約3倍、現在通っている学部を肯定的にとらえる選択肢を選んでいった。

また、入学前後のイメージギャップとの関連について(Model2)、「選んだ学部・学科との自身の関心・興味」に加え、「授業の難易度」にギャップを感じている場合、現在の学部・学科とは異なる学部に入ったほうがよかったと思うことが「あまりない」または「ぜんぜんない」と回答するオッズが約1/2に減っていた。

表10 専攻分野の選択に対する満足度（学部・学科を変更したいとは思わない）との相関関係

		Null Model		Model1		Model2	
		オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数
切片			-0.02				0.34
学年	1年生=1、ほか=0	1.87	0.63 +	1.95	0.67 +		0.52
性別	女=1		-0.33		-0.42		-0.33
志望	第一志望=1、ほか=0	1.58	0.46 +		0.39		0.39
学部	国際環境工学部=1、ほか=0		0.02		-0.12		-0.07
得意な科目					0.35		
苦手な科目					-0.26		
興味や関心をもっていること	とても影響した場合			2.92	1.07 ※※※		
希望している職業	=1、ほか=0				0.20		
模擬試験の結果					-0.52		
進路に関する授業や学習					0.28		
選んだ学部・学科と自信の関心・興味						0.50	-0.69 ※
選んだ学部・学科と将来の進路							0.11
授業の難易度	ギャップを感じた場合					0.43	-0.85 ※
授業の進め方・教員の指導方法	=1						0.48
クラブ・サークル活動							0.08
友人関係							-0.26
対数尤度 LR			-160.44		-149.44		-154.66
尤度比カイ2乗値 LR chi2			8.06		30.05		19.62
有意確率 Prob > chi2			0.09		0.00		0.03
疑似決定係数 Pseudo R2			0.02		0.09		0.06

有意水準：+ p < 10%、※ p < 5%、※※ p < 1%、※※※ p < 0.1%

6. 結果の考察

今回の調査結果から推論できること、分かったことは以下のとおりである。

- (1) 学生は大学に何を求めているかについて、北九州市立大学生の大学への進学理由は、複合的である。専門分野の勉強や研究をしたい、将来の仕事に役に立つ勉強がしたい、幅広い教養を身に付けたいといった学びを理由に進学する学生が大多数であるが、同時に、学歴が欲しい、自由な時間を得たい、すぐに社会に出るのが不安といった勉強以外の目的も持っており、学びへの意欲が薄い学生も多い可能性が示唆された。今回の調査では、「大卒の学歴がほしいから」を選んだ回答者は8割、「自由な時間を得たいから」を選んだ回答者は6割と、2004年の全国調査がそれぞれ7割、4割だった結果と比較して1割以上高かった。これが北九州市立大学の特徴をあらわしているのか、この10年間に全国的な変化があったのかを確かめるためには、ほかの大学でもアンケートを実施するなど更なる調査が必要である。
- (2) 学生が大学に満足しているかについて、北九州市立大学生の8割以上の学生は、現在の大学生活を充実していると感じており、満足もしていた。また、充実感と満足度の相関は非常に高かった。授業の進め方や教員の指導方法について、入学前の希望や予想と異なっ

ている場合、満足度が有意に下がっており、どのような授業を実施するかは学生の大学に対する満足度に大きな影響があることが示唆された。北九州市立大学が第一志望だった学生では、希望した大学に入学できたためか、満足度は高くなる傾向が示されたが、ほかには入学前の状況で大学への満足度に影響を与える要因は見いだせなかった。

- (3) 学生の専攻分野の選択理由について、「興味や関心をもっていること」とした学生が約9割と、自身の学びたいことにもとづき、学部・学科が選ばれていることが分かった。一方、希望している職業が影響した学生は約6割と職業意識が低いまま進学している学生も多いことが分かった。また、苦手な科目や模擬試験の結果などの消去法的方法で学部・学科を選択した学生も多かった。相関分析により、興味や関心と専攻分野の一致は、現在の学部・学科に対する満足度に大きな影響を与えるという結果がでており、高校生のうちに、自身が何に興味や関心があるのかをじっくり考えることが重要であることが推察される。
- (4) 大学を決める際に重視したこととして、北九州市立大学では「授業料が安い」、「親元を離れられる」を選んだ学生の割合が高く、ベネッセ全国調査の倍以上であった。授業料、生活費の安さからか、親元を離れたい学生も北九州市立大学に魅力を感じていることが分かる。ちなみに、「自宅から通える」の割合は全国平均とほぼ同じである。
- (5) 入学前の情報について、パンフレットを参考にした学生が約8割と多いものの、パンフレットで強調されている就職支援や国際的な環境を選択理由とした学生は少なかった。就職支援については多くの大学のパンフレット記載されており、パンフレットだけでは他大学との差が分かりにくいためではないだろうか。このほか、北九州市立大学の特徴である地域創生学群が、現場で実務を通じた学習をしたいという学生を惹きつけていることや、先輩等の北九州市立大学を勧める者の存在は受験生に大きな影響を与えていることが分かった。
- (6) 自由記述欄では、今年度はじめて実施した北方一ひびきのキャンパス交流DAY⁽³⁾について、講義を受けるためにひびきのから北方に移動するのは時間の無駄であるとの意見が多く寄せられた。北方キャンパスの文系学部の学生とひびきのの理系学部の学生の交流を後押しするためには、一緒に作業する機会を積極的に創出する必要があり、プロジェクト型の授業を取り入れるなどの工夫が必要だろう。また、校舎に対する不満も多かったため、計画的な整備が望まれる。

7. まとめ

本研究では、大多数の北九州市立大学生は、自身の興味や関心にもとづき学部・学科を選択し、将来のために学びたいという意識を持って大学に入学していることが示された。一方で、学びの目的をはっきりさせないまま大学に進学し、入学後に自身の興味・関心と違った学部に進学してしまったことに気付く学生も一定数いることが明らかになった。大学への満足度は高く、北九州市立大学は総じて学生の期待に応えていると考えられるが、授業の内容に不満がある場合、大学への満足度が下がるということが示唆されるなど、改善点もあることが見

出せた。また、北九州市立大学での調査結果は、全国調査の結果と大きくは変わらなかった。

大学や専攻分野への満足度を規定する要因の解析については、質問の焦点が絞られていなかったためか、統計的に有意な相関関係がない項目が多かった。また、調査対象が一大学のため、一般化や比較が出来なかった。今後は、アンケートを学びに関する質問に絞るとともに、複数の大学で実施することにより、学生の進路選択課程と大学における学びへのやる気や満足度の関係を明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 「我が国の高等教育の将来像」(文部科学省中央教育審議会答申), 平成17年1月
- 2) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(文部科学省中央教育審議会答申), 平成24年8月
- 3) 「大学生の学習意欲と学力低下に関する大学教員の意識についての調査研究」石井秀宗ほか, 大学入試センター-研究紀要, 平成17年
- 4) 「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」(厚生労働省), 平成25年10月
- 5) 「高校生・大学生は大学に何を求めているのか」山下仁司, ベネッセVIEW21大学版 2012年度 特別号 Vol.3
- 6) 「公立大学法人北九州市立大学2014」(受験生向けの大学案内パンフレット)
- 7) 「平成17年度経済産業省委託調査 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—」(ベネッセ教育総合研究所)
- 8) 「第2回 大学生の学習・生活実態調査 2012年」(ベネッセ教育総合研究所)

補注

- (1) 2004年に行われた全国の4年制大学に通う大学生(有効回答数6,463)に対する進路選択に関連する要因のアンケート調査。アンケート項目のうち、大学への進学理由、進路選択を考えるとときに影響した要因、参考にした情報源についての結果は以下のとおり。

《大学への進学理由》

将来の仕事に役立つ勉強がしたいから「とてもあてはまる」59.8%「ややあてはまる」27.0%/専門的な研究をしたいから「とてもあてはまる」40.7%「ややあてはまる」36.8%/幅広い教養を身につけたいから「とてもあてはまる」36.4%「ややあてはまる」39.7%/大卒の学歴が欲しいから「とてもあてはまる」28.7%「ややあてはまる」38.5%/資格や免許を取得したいから「とてもあてはまる」43.3%「ややあてはまる」23.1%/すぐに社会に出るのが不安だから「とてもあてはまる」21.7%「ややあてはまる」34.3%/自由な時間を得たいから「とてもあてはまる」15.3%「ややあてはまる」26.9%/周囲の人がみな行くから「とてもあてはまる」13.9%「ややあてはまる」27.2%/先生や家族が勧めるから「とてもあてはまる」12.2%「ややあてはまる」24.1%

《進路を決めるときに影響したこと》

興味や関心をもっていること「とても影響した」73.1%「やや影響した」19.1%/得

意な科目「とても影響した」45.7%「やや影響した」31.4%/希望している職業「とても影響した」47.2%「やや影響した」24.0%/苦手な科目「とても影響した」26.6%「やや影響した」31.3%/模擬試験の結果「とても影響した」20.3%「やや影響した」35.8%/進路に関する授業や学習「とても影響した」10.9%「やや影響した」30.8%/部活動での経験「とても影響した」6.0%「やや影響した」7.8%/職場体験「とても影響した」2.4%「やや影響した」4.6%

《参考にした情報源》

大学の入学案内やパンフレット「とても参考にした」54.5%「やや参考にした」34.6%/進学に関する本や雑誌「とても参考にした」32.8%「やや参考にした」42.2%/高校が提供する進路指導の資料「とても参考にした」29.2%「やや参考にした」43.1%/オープンキャンパス「とても参考にした」31.9%「やや参考にした」23.5%/大学説明会・相談会「とても参考にした」27.1%「やや参考にした」26.4%/大学のホームページ「とても参考にした」20.1%「やや参考にした」28.0%/塾・予備校が作成した資料「とても参考にした」16.4%「やや参考にした」28.3%

- (2) 2012年に全国の4年制大学に通う大学生（有効回答数4,911）に対して実施された大学の学習・生活に関する意識・実態に関するアンケート調査。受験する大学の選択に関するアンケート項目の結果は以下のとおり。

「興味のある学問分野があること」62.1%「入試難易度が自分に合っていること」48.9%「自宅から通えること」32.9%「入試方法が自分に合っていること」32.0%「世間的に大学名が知られていること」26.1%「キャンパスの雰囲気がよいこと」23.8%「取りたい資格や免許が取得できること」22.9%「就職状況がよいこと」22.5%「経済的な負担が少ないこと」20.5%「キャンパスライフが楽しそうなこと」17.8%「先生のすすめ」16.8%「親のすすめ」15.0%「都会にあること」12.2%「合格が早く決まること」10.5%「試験日や試験会場が多く、受験しやすいこと」7.5%「親元を離れられること」6.7%「先輩のすすめ」1.6%

- (3) 北方ーひびきのキャンパス交流DAYは、北方キャンパス（文系学部）とひびきのキャンパス（国際環境工学部）の学生交流を促進することを目的に、ひびきのキャンパスの1年生が週1回、北方キャンパスにバスで移動し、北方キャンパスの学生と同じ授業を履修する取組。

【調査票】

1. はじめに、あなたのバックグラウンドについてお伺いします。

1-1. あなたの性別をお答えください。

A. 男	B. 女
122	133

1-2. あなたの出生年月を西暦でお答えください。

1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	その他
2	6	13	27	28	137	39	4

1-3. あなたの現在の学年をお答えください。

A. 1年	B. 2年	C. 3年	D. 4年
197	15	27	17

1-4. あなたの所属する学部学科をお答えください。

A. 外国学部 英米学科	B. 外国語学部 中国学科	C. 外国語学部 国際関係学科	D. 経済学部 経済学科	E. 経済学部 経済情報学科	F. 文学部 比較文化学科	G. 文学部 人間関係学科	H. 法学部 法律学科
6	5	9	11	27	4	66	17
I. 法学部 教養科学科	J. 国際環境 工学部エネルギー 一循環化学科	K. 国際環境 工学部機械メカ テム工学科	L. 国際環境 工学部情報メデ イア工学科	M. 国際環境 工学部建築デザ イン工学科	N. 国際環境 工学部環境生命 工学科	O. 地域創生学 部地域創生学類	
3	18	5	11	35	20	19	

1-5. あなたが高校卒業時に住んでいた都道府県を記入してください。海外の場合には国名を記入してください。

福岡	山口	熊本	大分	広島	長崎
131	16	16	15	14	8
鹿児島	愛媛	高崎	沖縄	佐賀	その他
8	7	5	5	5	24

1-6. あなたの通っていた高校は以下のうちどれでしたか。あてはまるものを全てに○をつけてください。

A. 共学	B. 男女別学	C. 国公立	D. 私立	E. 中高一貫	F. 大検
212	28	188	41	31	1

1-7. あなたの高校卒業後から本大学への進学までの期間は以下のうちどれですか。

A. 高校卒業直後に入学	B. 1年以上の浪人を経験	C. その他
230	18	6

1-8. あなたはどの形式の入学試験で本学に入学しましたか。

A. 一般入試	B. 推薦入試	C. AO入試
180	64	8

1-9. 受験した時の志望度についてあてはまるものを選んでください。

A. 第一志望	B. 第二志望	C. 第三志望以下
149	49	55

1-10. あなたの兄弟・姉妹について、あなたを除いた人数のうち、あてはまるものを選んでください。

A. なし B. 一人 C. 二人 D. 三人 E. 四人以上
※集計していない。

1-11. 現在のあなたの住まいについて、あてはまるものを選んでください。

A. 自宅	B. 一人暮らし	C. 大学の寮	D. 大学以外の寮	E. その他
110	136	5	4	1

1-12. あなたは日本学生支援機構（旧日本育英会）の奨学金（後で返済が必要）をもらっていますか。

A. はい	B. いいえ
131	123

2. ここからは、あなたの大学選択と現在の大学キャンパスでの生活に関してお伺いします。

2-1. あなたが大学へ進学した理由として、次のことはどれくらいあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	107	109	31	9
専門的な研究をしたいから	66	106	63	21
興味・関心がある分野について勉強したいから	137	83	25	10
幅広い教養を身につけたいから	75	126	47	8
大卒の学歴がほしいから	130	84	33	9
資格や免許を取得したいから	74	96	65	21
すぐに社会に出るのが不安だから	74	79	65	37
自由な時間を得たいから	76	86	63	30
周囲の人がみな行くから	56	79	72	49
先生や家族が勧めるから	43	82	80	51

2-2. 志望学部・学科を決めるとき、次のようなことはどれくらい影響しましたか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても影響した	やや影響した	あまり影響しなかった	ぜんぜん影響しなかった
得意な科目	109	78	52	17
苦手な科目	91	59	79	27
興味や関心をもっていること	146	80	21	8
希望している職業	90	78	56	32
部活動での経験	19	14	91	132
模擬試験の結果	54	84	58	59
進路に関する授業や学習	35	91	83	47
職場体験	4	16	90	146

2-3. 現在通っている大学や学部・学科に進学を決めるときに重視したことは何ですか。あてはまる記号すべてに○をつけてください。

A. 専攻したい学問分野がある	177
B. 入試科目・選抜方法があっている	158
C. 入試の難易度があっている	133
D. 自宅から通える	94
E. 資格・免許がとれる	59
F. 校風やキャンパスの雰囲気が良い	82
G. 伝統や知名度がある	25
H. 授業料が安い	125
I. 施設・設備が良い	37
J. 総合大学である	30
K. 就職のための支援が充実している	32
L. 親元を離れられる	56
M. 大都市にある	14
N. 大学院が設置されている	9
O. 有名な教員、優秀な教員がいる	12
P. 自分の入りたいクラブ、サークルがある	20
Q. 奨学金制度が充実している	3
R. 親、先輩、友人など周囲の人のすすめがあった	54
S. 留学制度など国際的な環境がある	27

2-4. あなたが2-3で○をつけたものの中で、特に重視したことを3つまで選び、番号を回答欄に記入してください。選択肢にない場合は具体的にお書きください。

A. 専攻したい学問分野がある	139
B. 入試科目・選抜方法があっている	110
C. 入試の難易度があっている	91
D. 自宅から通える	67
E. 資格・免許がとれる	31
F. 校風やキャンパスの雰囲気が良い	35
G. 伝統や知名度がある	5
H. 授業料が安い	74
I. 施設・設備が良い	7
J. 総合大学である	7
K. 就職のための支援が充実している	11

L. 親元を離れられる	31
M. 大都市にある	8
N. 大学院が設置されている	4
O. 有名な教員、優秀な教員がいる	6
P. 自分の入りたいクラブ、サークルがある	7
Q. 奨学金制度が充実している	0
R. 親、先輩、友人など周囲の人のすすめがあった	26
S. 留学制度など国際的な環境がある	15

(記述式回答)

- ✓ 国公立ということ
- ✓ 授業料の安さ
- ✓ 数学、英語苦手、国語、社会得意 第一志望の私大に失敗→同じ入試の科目だから受けやすい
- ✓ とにかく現場にでれるということ
- ✓ 地創の存在
- ✓ 実習が主ということに魅力を感じた
- ✓ 自分を成長させることができると思ったから
- ✓ センター試験に失敗したから
- ✓ 常識を身につけるため
- ✓ 国公立である
- ✓ センター試験の点数
- ✓ 中学3年まで福岡に住んでいたため

2-5. 次のような大学に関する情報源はどれくらい参考にしましたか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても参考にしました	やや参考にした	あまり参考にしなかった	ぜんぜん参考しなかった
大学の入学案内やパンフレット	114	97	20	21
進学に関する本や雑誌	37	95	74	44
高校が提供する進路指導の資料	55	97	54	45
オープンキャンパスや公開授業	51	51	44	104
大学説明会・相談会	32	48	60	110
大学のホームページ	57	81	61	51
塾・予備校が作成した資料	10	37	69	133

参考にした情報源が選択肢にない場合は具体的にお書きください。
また、入学前にこんな情報があったらよかったという情報があれば、お書きください。
(記述式回答)

- ✓ インターネットで教員について調べた
- ✓ 北方キャンパスとの連携
- ✓ 実際の授業体験
- ✓ 実習がメインであるという情報
- ✓ 地元の知り合いの情報
- ✓ 先生にすすめられて
- ✓ 先輩の1日とかどうというキャンパスライフをおくっているのか各学部ごとに。
- ✓ 先輩の話
- ✓ その学部・学科で受講できる講義についても知っておきたかった
- ✓ 大学の教授が高校に来て、体験授業をしたこと
- ✓ 大学の時間割の例
- ✓ フォーラム
- ✓ へんさち
- ✓ 実際に北九大に通っている先輩の話
- ✓ 進路指導の教師の勧め
- ✓ 推薦入試の過去問題がほしかった
- ✓ 先輩が通っていた 先生がすすめてくれた
- ✓ 特になし

2-6. 入学前に考えた大学キャンパス生活と実際のキャンパス生活にギャップを感じることはありますか。あてはまる記号1つに○をつけてください。

A. よくある	B. 時々ある	C. あまりない	D. ぜんぜんない
62	115	64	11

2-7. 2-6でAまたはBに○をつけた場合、ギャップの理由についてあてはまる記号すべてに○をつけてください。

A. 選んだ学部・学科と自身の関心・興味	54
B. 選んだ学部・学科と将来の進路	38
C. 授業の難易度	62
D. 授業の進め方・教員の指導方法	89
E. クラブ・サークル活動	49
F. 友人関係	36

G. その他

(記述式回答)

- 意外と時間がない
- 色々きつい
- 思ったよりも授業のコマ数が少ないこと
- 学生生活
- 課題に気をとられすぎてやりたい英語の勉強をちゃんとできてきていない
- 課題の多さ
- 課題の量
- 学校の設備
- 北方との連携授業があるのは知っていたが、授業で北方の人と関わるでもなく、これほどまでムダな時間を過ごすとは思っていなかった。
- キャンパスの回りになにもない
- 高校生のときとあまり変わらない忙しさ
- 高校よりきびしくない
- 施設、設備面があまり十分と言えない。
- 施設の大きさ
- 実習前のミーティングの時間がたくさんあること
- 自由な時間
- 自由な時間が少ない
- 大学生って、荷物が軽くなると思っていて。もっと暇人になれると思っていた。
- 地域性
- 通学や課題による多忙さ
- ひびきのでずつと学びたかったのに北方に来たこと
- 補講が多すぎる
- もっと楽だと思った
- レポートの量
- 授業の多さ。7 限まである日もあり、高校の頃と同じぐらいきつい。
- 周囲とのレベルの違い。一般常識が備わっていない/無気力な人が多い印象。授業以外の場、ディスカッションや日常生活の中でそれはさらに顕著に感じた。

2-8. 現在通っている学部・学科とは異なる学部・学科に入ったほうがよかったと思うことはありますか。A を選んだ場合、その理由についてお聞かせください。

A. よくある	B. 時々ある	C. あまりない	D. ぜんぜんない
26	66	67	94

(記述式回答)

- 面白くない
- 今通っている学部・学科では将来なりたい職業につけないから
- 英語のほうか実践的だと思っから
- 外国語学部に入学したかった
- 希望していた学部ではないから
- 自分の興味あることを学べるから
- 自分の志望したかった学問ではないから
- 自分の学びたいことと違ったから
- 自分のやりたいことがないから
- 女子が多い文系に行きたかった
- 心理学に興味をもつようになつたから
- 少し分野が異なる
- 第一志望の大学に興味のある学科があったから
- 他学部の授業をうけて、すごくおもしろいし学ぶことが楽しいから。
- つまらな
- つまらな、本当に
- 得意科目の歴史があまり活かせない
- ノリで進路を決めてしまった経緯があったりして (笑)、いろいろと困るかもしれないが、私はこれで (今のところ) 良かったのだと思っている。
- 法律がたのしそう
- ほしい資格とれない
- ほぼ予想どおり
- 本当は英語がしたかった
- 留学制度がととのっていない
- 英語の授業のレベルが低いから
- 第一志望の学部ではないから

2-9. あなたのこれまでの大学キャンパス生活は充実していましたか。

A. とても充実していた	B. 概ね充実していた	C. あまり充実していない	D. ぜんぜん充実していない
64	156	25	7

2-10. 北九州市立大学に満足していますか。C または D を選んだ場合、その理由についてお聞かせください。

A. とても満足している	B. 概ね満足している	C. あまり満足していない	D. ぜんぜん満足していない
57	154	26	7

(記述式回答)

- ✓ 面白くない
- ✓ 学食を広くして欲しい
- ✓ 学生の民度が低い
- ✓ 学校ボロボロすぎ
- ✓ 北方交流について実験台にされた気分がするから。
- ✓ 資格があまりとれない
- ✓ 自分のやりたいことができなから。
- ✓ 志望校というわけではなかったため、知名度など劣っている所をまだ意識してしまっている
- ✓ 想像していたものと違ったから
- ✓ 想像していたものと違ったから
- ✓ 想像していたものと違ったから
- ✓ 大学がコンパクトすぎて移動しやすい
- ✓ 地下バーがせまい。こむ
- ✓ 必修授業が多すぎる
- ✓ プールがないから！
- ✓ 文系と関わるのが少なくない
- ✓ ムダだと思ふ授業が多いから
- ✓ メインである実習が心から楽しめないから
- ✓ もっと自分の時間がもてると思った
- ✓ もっとレベルの高い大学に行きたかったから。
- ✓ 何をもっと大学に満足するか未だにわからないから
- ✓ 楽しくない
- ✓ 環境として、周りに遊んでばかりいる学生が多すぎる。
- ✓ 教室のエアコンが効いていないこと 英語教育の少人数化をもっと少人数にしてほしい
- ✓ 工学部なのに、実習が少ない
- ✓ 授業がつまらない
- ✓ 大学教員との関わりが少なさ 事務職員の教育者としての意識の低さ 教職課程 (教員採用試験対策の不十分さ)
- ✓ 同じ授業でも講師によって内容や評価方法などに差がある。昼間の学生なのにもかかわらず、他の授業との兼ね合い、夜間の授業を取らざるを得ない授業がある。

2-11. 将来、海外で働く経験をしたと思いますか。

A. 強く思う	B. やや思う	C. あまり思わない	D. ぜんぜん思わない
52	75	75	51

今回の調査で回答した内容について、自由に意見をお書きください。今後の調査の参考にしたいため、今回の質問の答えやすさや長さ等についてもご意見がいただければ、幸いです。

- あと1ページぐらい追加しても問題なさそう
- 簡潔で答えやすかった
- 簡単な質問だったので答えやすかったです。
- 記述欄があまりなくて良かった
- 北方、ひびきの交流DAYはなんのためにあるのか分からない
- 北九大に来て思うこと。地域の人にやさしい取組が多い
- 教室が暑いです。エアコン等おねがいします。
- 教室が暑すぎます。汗でプリントがぐちゃぐちゃになります。そろそろエアコンをつけてもらえませんか。
- 具体例の記述欄があつて意見を書きやすかった
- 現象の判断がつくことを書きたくない
- 交流DAYはあまり意味がないと思う
- 答えやすい。調度いい長さだと思う。
- 答えやすい質問だったと思う。
- 答えやすかったです
- 答えやすかったです
- 答えやすく、長さもよかったです。
- 答えやすさ、長さ共に調度良いものだと思います
- このままで
- 自分が大学に入った動機を思いかえし、今の自分にそれがどうなのか問いただしたいいい機会になりました。
- 集計がばつばつてください。お疲れさまです。
- 性的マイノリティの人は性別をはっきりと答えられない場合があると思います。
- 専門知識は3年から勉強がはじまって、ちよつと運いと思つた。特に、なぜ外国人は英語の勉強ができない。なぜ外国人は特別の授業を配置しているのか、なぜ特別の授業の時間と英語の授業の時間が同じなのか。
- 大学生活は人それぞれだと実感した
- 大学にいる意味が特にならないので、2学期に入って頃合いをみてやめようと思つている。まじで。
- 大都市になるというところに疑問を感じました。北九大って大都市のなかにあるんですかね・・・。
- チェックのマークが大きくてとても見やすかったです。
- 調査ガンバレ！
- ちよつとよいと思ふし、答えやすかった。
- 通学に時間を用し、また、北方キャンパスのひととの交流もあまりないので、この北方ひびきの交流DAYはあまりいいみないと思う。
- 特にありません
- 特になし
- 長かった
- 長さは適当だと思ひます。質問も答えやすかったです。
- ポリユミーであった

- 毎週木曜日にある北方交流DAYは無駄だと思う。
- まだ入学から数か月しか経っていないというのもあって、まだまだ私が知らない北九大とこういうのもあるとは思いますが、一応入学前から本学のこととは、いろいろと知ってはいたし、周囲の意見（私が北九大に行く、または行っている）は様々なが、私自身は本学にとっても満足しているつもりである。今後も全力で頑張っていきたい。今回の質問に関しては、答えやすかった。調査ががんばってくださ
- い。
- 洋式べんじょが少ない
- 記号が多く、答えやすかったです。
- 自分を振り返る良い機会となった。 質問は、簡潔で、分かりやすかった。
- 質問が短くて、答えやすかったです
- 質問が分かりやすく、とても答えやすかったです。
- 質問が簡潔で分かりやすかった。答えに窮することなく素直に答えられるような質問になっていたと思います。
- 質問の数はちょうどいいと思います。大学生活にギャップを感じる理由が答えづらかったです。
- 質問量がちょうどいい
- 質問内容は答えやすく、長さも丁度よかったです！
- 授業がつまらない。授業が難しくくて15回出席してレポート提出し、最終テストを受けても単位をとれない。
- 素直に答えることができました。
- 長さ、答えやすさともに適切だったと思う。

イノベーションを担う人材の幸福度

吉村 英俊

1. はじめに

新興国における中流層の増加や国民の充足感によるモノ離れ（購買意欲の低下）などにより、販売ターゲットの中心が海外、とくに新興国へ移り、それに伴って大企業を中心に工場が海外へ移転している。加えて他国に比べて高い法人税や電力料金、新興国の台頭によるコスト競争、予測困難な為替変動、さまざまな規制は、海外消費地における“地消地産化”を加速している。また少子高齢化の進展は一向に止まることなく、活力の源泉である若い世代が減少し、多くの商店街では過去の繁栄がもはやノスタルジアとなってしまっている。このような日本経済を取り巻く外部環境の変化は、地域経済にとって脅威であり、ジャブを打たれて徐々に体力を消耗していくボクサーのように地域経済を疲弊させている。地域においては何らかの方策を講じない限り、雇用の創出どころか、維持すらできない危機的な状況を招くものと危惧されている。

地方においては、これまでも国の産業政策の動向を把握し活用しつつ、独自に政策を立案してさまざまな施策を講じてきた。昨今では国の新成長戦略に倣い、地方独自の新成長戦略を策定する地方自治体が多くみられる。例えば、北九州市では社会経済環境の変化に対応し、ポテンシャル（優位性）を十分に発揮しながら、国際的な競争時代においてもアジアの中核的な産業都市として、持続的な発展及び成長することを目指して、平成25年3月に「北九州市新成長戦略」を策定している。その他にも都道府県レベルや市レベルでさまざまな成長戦略が立案・実行され、成果を生み出している。

この中長期的な成長戦略を実現するためには、それを実施する資源（人材・資金・企業）が地域に集積していなければならない。このとき資金調達術を考え実行するのは“人”であり、また企業活動は“人”によって新たな事業が計画され実行される。このように地域の発展・成長にはさまざまな要因が挙げられるが、その中でも「人材」がきわめて重要な役割を果たすものと考えられる。ここでひとくちに人材といっても、誰でもよいわけではない。今、地域において必要とされる人材とは、新成長戦略を担うことができる人材であり、作業的な仕事に従事する人材ではなく、新たなモノやサービス、しくみを創造することができるイノベティブな人材である。アメリカの都市学者、Florida. Rはこれら人材（クリエイティブクラス）の集積が、都市の成長の源泉になるといっている¹⁾。また、筆者は都市の成長とイノベーションを担う人材との間に強い相関があることを立証している²⁾。

以上より、本研究ではイノベーションを担う人材に着眼し、これら人材が住みたくなる都市とはどのような要素を備えた都市なのか、検討するものである。検討にあたっては、近年世界各国やわが国の地方自治体でも注目され、さまざまな調査がなされている「幸福度」の視点からアプローチする。これらの人材にとって、どのような要素が幸福度に影響を及ぼす

のか、また及ぼさないのか、さらにこれらの人材の幸福度を増大させるために、地方自治体はどういった方向で都市政策を講ずるべきか、その基礎的調査を行う。

2. 先行研究

2-1 わが国の幸福度に関する研究

地方自治体では、経済的な豊かさだけを追うのではなく、心の豊かさも重視した新たな地域づくりを図るため、近年「幸福度」に着眼し、その指標を作成する動きが広まっている。

例えば、熊本県では県民の総幸福量を4つの要因（「夢を持っている」「誇りがある」「経済的な安定」「将来に不安がない」）に分け、県民の現在の満足度やそれぞれの要因に対する重要度をアンケートにより調査分析している³⁾。また福井県をリーダー県とする11の県（青森、山形、石川、山梨、長野、奈良、鳥取、島根、高知、熊本）では、人々が幸福を感じながら、暮らすことができる社会を構築するためには、現世代の幸福だけでなく、希望を持った行動が必要であるとの考え、「ふるさと希望指数」について検討を行っている。検討の結果、5つの要素（仕事、家族、健康、教育、地域・交流）が「希望」の大きな影響を与え、これらの要素についてさらに都市と地方を比較するなど、調査分析を行っている⁴⁾。以上の二例は県という比較的広域を対象にした取り組みであったが、基礎的自治体のレベルでも行われている。東京都荒川区では、暮らし、安全・安心、地域とのつながり、生きがい、幸福度の5つの視点から区民世論調査を行い、健康、子育て・保育の要素について区民総幸福度の指標化を先行して取り組んでいる⁵⁾。なお、いずれの検討においても、性別や年齢、職業（例：自営業、会社員）などに細分化して現状を把握し、幸福度の指標化や幸福度に重大な影響を及ぼす要素の絞り込みを行った後、都市政策への活用を試みている。

表1. 地方自治体の幸福度研究例

熊本県	県民総幸福度	夢、誇り、経済的安定、将来への不安
福井県 他11県	ふるさと希望指数	健康、家族、仕事、教育、地域・交流
東京都荒川区	区民総幸福度	健康、子育て・保育

国においても、経済的な豊かさを表すGDPの上昇が心の豊かさを表す幸福感に結び付いていないという問題意識と幸福度に関する世界的な潮流を踏まえ、幸福度に関する研究会を設置して幸福度の指標化を試みている⁶⁾。研究会では経済社会状況、心身の健康、関係性を3本柱として指標化を検討（表2）している。また主観的幸福度については参照指標として、幸福度の次元の設定や他の指標の選択などを行うとしている。さらに持続可能性については3本柱とは別に検討するとし、留意点を提示している。

表 2. 幸福度に関する研究会にいる指標試案

三 本 柱	経済社会状況	所得・富、仕事、住環境、子育て・教育、安全・安心
	心身の健康	身体的健康、精神的健康
	関係性	個人・家族とのつながり、地域・社会とのつながり、ライフスタイル
主観的幸福度		主観的幸福感、理想の幸福感、将来の幸福感、人並み感、 人生（生活）満足度、感情バランス

その他、人口減少と経済衰退が進む多くの地域がある反面、確実に成長し続ける地域があるのも事実であり、これら地域のベンチマークを実施している先行研究がある⁷⁾。また特定地域を地域社会のつながり（ソーシャル・キャピタル）の視点から調査分析している研究もある⁸⁾。

なお筆者は、これまで都市の成長とイノベーションを担う人材の集積との関係に着眼し、両者の相関関係について調査し、とくにエンジニアとの関係において強い相関があることを立証している。またイノベーションを担う人材が期待する都市の特性・機能について調査し、これら人材が安全・安心・住宅、教育環境、行政支援といった着実に生活が営めることを第一に望んでいること、次いで便利さ（買い物、交通、インフラ）といった円滑に生活が営める特性・機能を重視していること、そして最後に娯楽や魅力ある企業（仕事）、都市の活気・イメージ・景観といった現在の生活をより良くするための特性・機能を期待していることを立証している⁹⁾。

2-2 海外の幸福度に関する取組み

幸福度は、わが国においてはブータンの国民総幸福量（GNH：Gross National Happiness）が有名である。公益財団法人荒川区自治総合研究所がまとめた海外の幸福度指標の比較（表 3）をみると、さまざまな国や機関で指標化が試みられており、これらの指標を要素別にみると、健康、生活水準、教育・訓練の3つの要素が多く、多くの国や機関で採用されていることが分かる。またOECDは、より良い暮らしの指標として、所得・資産、仕事・報酬、住居、健康状態、ワークライフバランス、教育・技能、社会とのつながり、市民参加・ガバナンス、環境の質、生活の安全、主観的幸福を挙げ、国際比較を行っている¹⁰⁾。

欧米では、政策目標と経済業績の評価基準を国の経済規模（量）の拡大よりも国民の幸福度（質）の向上に変えるという大胆な政策転換が、米国コロンビア大学のジョセフ・E・ステイグリッツ教授が主査となってまとめた報告書『*Mismeasuring Our Lives*』が一つの契機となって行われるようになった。EUでは2010年、経済的成長ではなく、幸福度の増大を目標に掲げる長期戦略「ヨーロッパ2020」を採択している。また同時期、米国はGDPを超える新指標として主要全国指標（KNI：Key National Indicators）を開発することを米国科学アカデミーに命じている。ちなみにこのKNIで取り扱う新指標の大きな柱は教育、社会保障、温暖化防止である¹¹⁾。

表 3. 世界の幸福度指標の比較

指標名	国名・機関名	生活水準	環境	文化活動	余暇時間	健康	仕事	安心安全	自治	教育訓練	コミュニティ	経済	主観的幸福
グロス・ナショナル・ハッピーネス (Gross National Happiness:GNH)	ブータン	基本的な生活	自然環境	文化	時間の使い方	健康				教育・教養	地域共同体の活力		主観的幸福
地球幸福度指数 (Happy Planet Index: HPI)	イギリス		環境			平均余命							
人間開発指数 (Human Development Index:HDI)	国連開発計画	きちんとした生活基準				長く健康な生活				知識へのアクセス			生活満足度
個人幸福度 (Personal Wellbeing Index)	オーストラリア	生活水準				個人の健康		個人の安全、将来の安心			人間関係 コミュニティ		人生における達成
ミレニアム開発目標 (The Millennium Development Goals:MDGs)	国連	極度の貧困と飢餓の撲滅	環境の持続可能性確保			乳幼児死亡率の削減、妊産婦の健康の改善、HIV				初等教育の完全普及の達成			
カナダの幸福度指標 (Canadian Index of Well-Being:CIW)	カナダ	生活水準	環境の質	芸術・文化・余暇の状態	時間の使い方	健康			民主主義の課程への参加	教育と技術のレベル	コミュニティの活力		
WELLBEBE	ベルギー	収入	環境		余暇	健康	仕事		自治	教育	社会の相互作用		
持続可能な発展の観察 (Monitoring Sustainable Development: MONET)	スイス	社会保障および繁栄、住居、雇用	環境	文化および余暇	文化および余暇	健康		物理的 安全		教育および科学	社会的つながりとの参加、格差、移動性	社会保障および繁栄、国際貿易および競争、他生産、消費	主観的幸福 生活状況
オーストラリアの進歩の尺度 (Measures of Australia's Progress)	オーストラリア		環境			個人(健康)	個人(仕事)	共生(民主主義、自治および市民権)	個人(教育とトレーニング)	共生(家族、コミュニティ)	経済および経済資源		
地域のパフォーマンスと社会の進歩の測定に関する委員会 (CMEPSP)	フランス	物理的 生活水準	環境(現在および将来の状況)			健康	仕事を含む 個人的活動		政治的発言力および自治	教育	社会参加および関係	経済と物理的 自然の不安定	
地域の発展の質 (REGIONAL QUALITY OF DEVELOPMENT INDEX)	イタリア	経済および労働	環境	教育と文化		健康	経済および労働力		平等の機会、参加	教育と文化		経済および労働	
先進国における子どもの幸福の研究 (An overview of child well-being in rich countries)	UNICEF	物理的 幸福				健康と安全(治安)、日常生活上のリスク		健康と安全(治安)		教育に関する幸福	友人や 家族関係		主観的幸福
子ども・若者幸福度指標 (Child Well-Being Index:CWI)	アメリカ					安全/リスク行動、健康				学力	社会環境、 コミュニティ・エンゲージメント	経済的 幸福	感情的/ 精神的 幸福

資料)公益財団法人荒川区自治総合研究所「荒川区民総幸福度(GAH)に関する研究プロジェクト中間報告書」

3. 研究の方法

本研究では前述のとおり、イノベーションを担う人材が住みたくなる都市とはどのような要素を備えた都市なのか、「幸福度」の視点から調査分析する。

調査はインターネットを活用し、まず全国の動向をアンケート調査によって把握したのち、次に北九州市の動向と比較する。なお、ここでイノベーションを担う人材とは、経営企画／事業企画、調査／マーケティング、研究／開発、クリエイター／デザイナー／コーディネーターの4つの職種とし、職種の違いによる要素の重要度の強弱についてもみてる。最後にこれらの結果をもとに、都市政策の方向を示す。

4. アンケート調査

4-1. 調査要領

次の要領にて調査を行った。

(1) 調査対象

- ①職種 a. 経営企画／事業企画 b. 調査／マーケティング
c. 研究／開発 d. クリエイター／デザイナー／コーディネーター

②年齢 20歳以上

(2) 調査方法 インターネット（委託先：株式会社マクロミル）

(3) 調査期間 2014年02月07日（金）～13日（木）

(4) 設問項目 章末「主要設問項目」参照

(5) 回答数 418（うち北九州市居住の回答者48）

4-2. 回答者の属性

表4に示すとおり、「調査／マーケティング」は回答数が少ないため、検討から除外する。

それぞれの職種の特徴をみると、「経営企画／事業企画」は年齢が高く、60歳以上が約半数、50歳以上を含めると7割に及ぶ。さらに経営者層が多いことから世帯年収も高く、1000万円以上が4割を超える。また大学卒以上が8割を超える。「研究／開発」は各世代が概ね均等に回答しており、世帯年収において特徴はない。ただし、これらの職種の中では唯一大学院博士後期課程の修了者が15名（6.6%）いる。「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」は専門学校及び高専・短期大学卒業生が多く、4つの職種の中では世帯年収がやや低い（以上、章末「回答者の属性」参照）。

表4. 職種別回答者数

職 種	全 体		うち北九州市	
	人数	割合	人数	割合
a. 経営企画／事業企画	63	15.1%	13	27.1%
b. 調査／マーケティング	6	1.4%	0	0%
c. 研究／開発	228	54.5%	27	56.2%
d. クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	28.9%	8	16.7%
計	418		48	

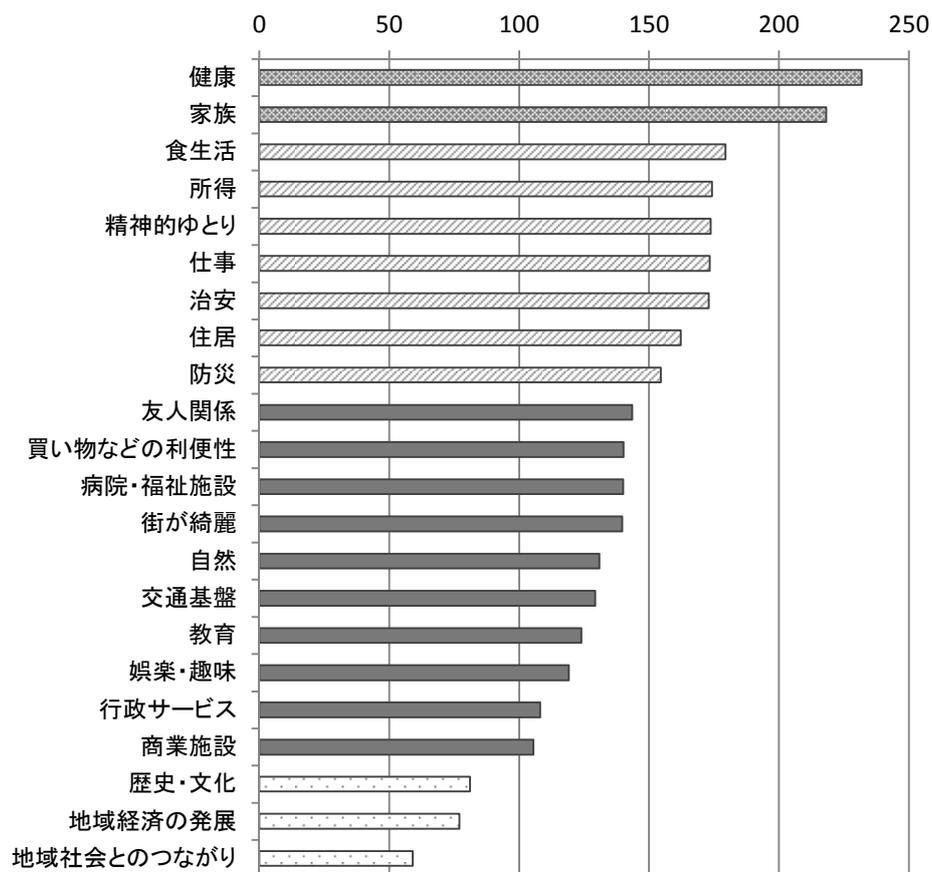
その他、回答者の地域別の内訳は、東京圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）が161（38.5%）、大阪圏（大阪府、京都府、兵庫県）が52（12.4%）となっており、大都市圏への過度な集中はなかったと判断する。また男女比は男性328（78.5%）、女性90（21.5%）であった。やや特徴的なのは未婚者が182（43.5%）もおり、よって子供がいない人が220（52.6%）も存在することであった。

4-3. 調査結果

(1) 幸せな（充実した）生活を送る上で重要な要素

図1に示す22の要素に対して重要度を評価し重み付けを行った結果、200点を超える最重要と考える要素は「健康」「家族」であり、さまざまな先行研究と同様の結果を得ることができた。またこれに続く150点を超える重要と考える要素は「食生活」「所得」「精神的ゆとり」「仕事」「治安」「住居」「防災」であり、これら職種に就く人は仕事環境や生活環境への関心が高いことが分かる。

一方、評価が低い要素は「地域社会とのつながり」「地域経済の発展」「歴史・文化」であり、自分の生活以外にはあまり関心がないことが分かる。震災以降、絆の重要性が再認識されている中で、地域社会とのつながりが最も低いのは意外である。また自分自身の仕事や生活に影響を及ぼす地域経済に対しても関心が低い。



《重み付けの基準》

とても重要である×3、重要である×2、どちらかといえば重要である×1、どちらともいえない×0

どちらかといえば重要でない▲1、重要でない▲2、まったく重要でない▲3

図1. 要素の重要度 (N=418)

以上の結果に対して、これらの職種の特徴と思われる「仕事」「所得」「地域社会とのつながり」「地域経済の発展」「歴史・文化」の5つの要素について職種別にみている。

仕事及び所得については、3者の中ではやや「研究／開発」が低い評価を示すものの、大きな差異はない。

一方、低評価の3要素についてみると、特異な結果がみられる。「経営企画／事業企画」は年齢が高く経営者層が多いことから、他2者に比べて総じて高い評価を示している。一方、「研究／開発」と「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」は、結果をみる限り自分が住んでいる地域にあまり関心や愛着がないといえる。言い換えれば、良い仕事と安定した生活があればよいのであり、これは地域にとってプラスともマイナスとも捉えることができる。彼ら・彼女らにとって地域が都合の良い環境を提供できれば、比較的容易に惹きつけることができるし、そうでなければ良い環境の都市へさっさと逃げていってしまう。なお「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」は、「地域社会とのつながり」と「地域経済の発展」については「研究／開発」と同様の評価を示すが、「歴史・文化」に対しては職業柄や

や高い評価を示している。しかし、それでも「経営企画や事業企画」には及ばない。

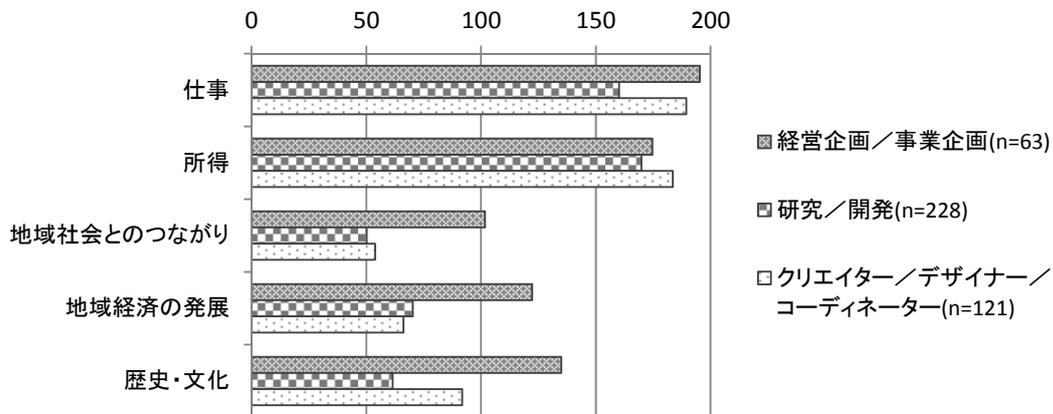


図2. 職種別にみた要素の重要度

次に北九州市の動向と全国を比較してみた。図3からも分かるように、ほぼ同様の傾向を示すものの、北九州市の方が交通基盤と娯楽・趣味を除くすべての要素に対して、全国よりも高い評価を与えている。とくに差異が大きい要素は「教育」「地域社会とのつながり」「地域経済の発展」「住居」である。北九州市においては、近年人口が僅かながら減少しており、歯止めがかからない状況にある。こういった状況に対して、多くの住民が危機意識を持っていることから、「地域経済の発展」や「教育」に対して高い関心を寄せているものと思われる。同様に高齢化率が政令指定都市で最も高く、このことは高齢化社会を是認した街づくりの必要性を住民に喚起するものであり、「地域社会のつながり」への高い関心に繋がっていると思われる。「住居」については、当地域の住民の高い地元志向と、生活コストが低い住宅を比較的容易に取得できることから、このような高い評価になっているものと思われる。

サンプル数が少ないため信憑性に欠けるものの、この動向を職種別にみると、「研究/開発」は全国に比べて地域に対して関心が高いものの、「クリエイター/デザイナー/コーディネーター」は総じて低く、「地域社会とのつながり」についてはとくに関心が低い(図4)。

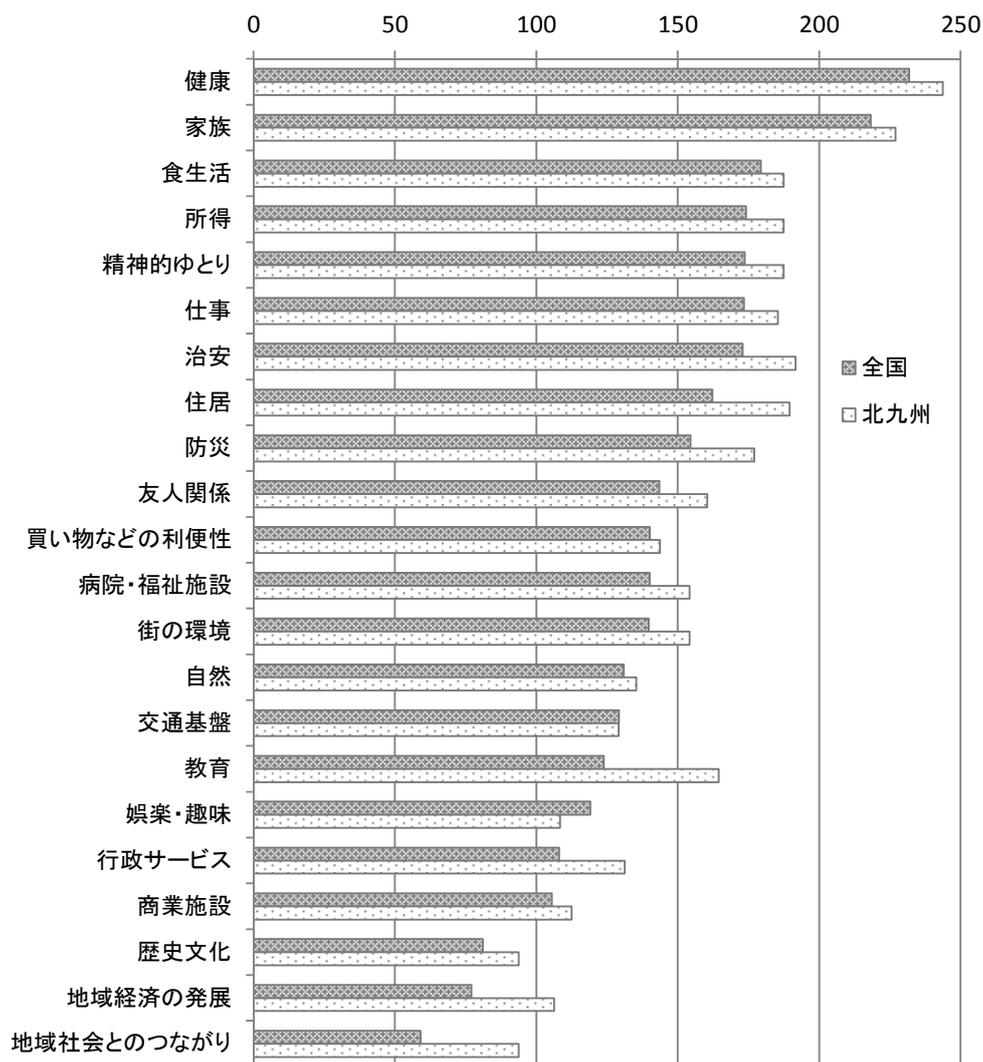


図3. 北九州市と全国の比較

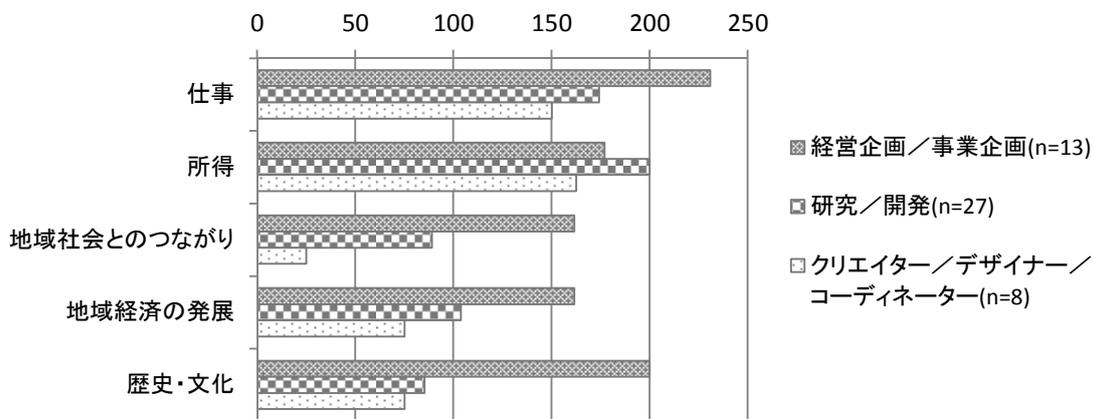


図4. 北九州市における職種別に見た要素の重要度

(2) 現在の生活満足度及び幸福度

生活満足度については68.4%、幸福度については76.1%の人が程度の多少はあれ、現在満足していることが分かる。

生活満足度と幸福度では、先行研究で言及されているとおり、幸福度の方が生活満足度よりもやや高い満足度を示している。いうなれば“多少の不満はあるが、総じて幸せである”といった感じではないかと思われる。

以下、生活満足度について詳述する。

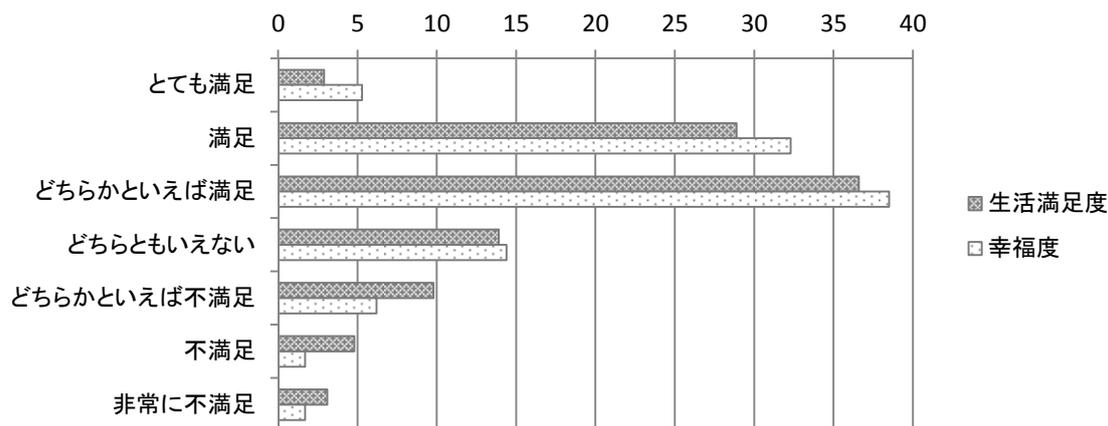


図5. 現在の生活満足度及び幸福度

(3) 生活満足度の実状

現在の生活満足度を職種別にみると、「経営企画／事業企画」は満足度が高く、「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」は満足度が低いことが分かる。なお、「研究／開発」は両者の中間に位置づけられる。

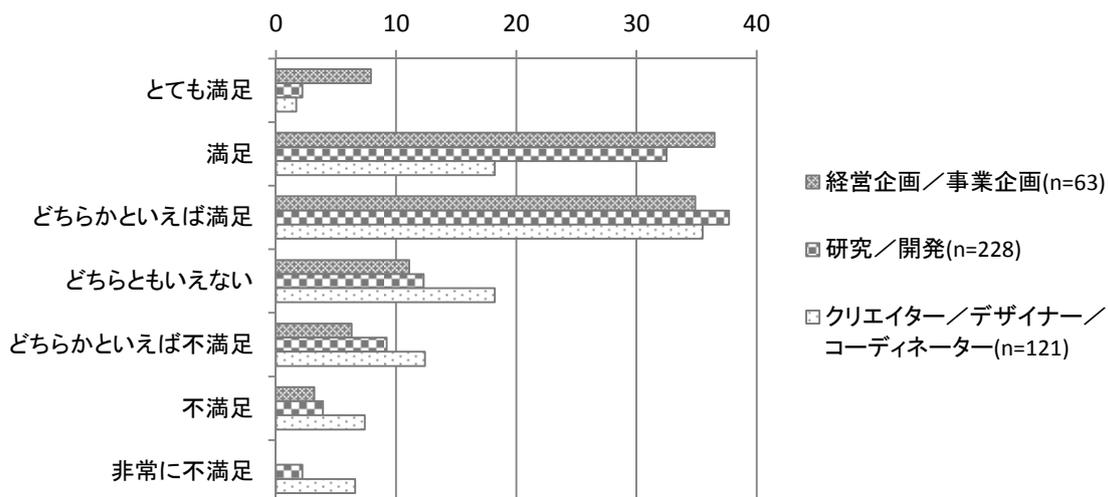


図6. 職種別（全国）の生活満足度（N=418）

それではなぜ満足しているのか、その要因を「経営企画／事業企画」についてみると、「家族」や「仕事」「健康」を挙げている。一方、「地域経済の発展」や「商業施設」「病院・福祉施設」「歴史・文化」「防災」「行政サービス」への評価は低く、この傾向は「研究／開発」においても同様である。これら商業施設や病院・福祉施設、行政サービスなど、地域（地方自治体）が整備・提供する環境（要素）はきちんとできて当たり前であり、取り立てて重要ではないのかもしれない。

不満足の原因をみると、「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」及び「研究／開発」ともに「仕事」「所得」「精神的ゆとり」を挙げている人が多く、現在やりがいのある仕事ではない仕事をし、忙しい割に所得が少ない状況にあるのではないかと思われる。

次に北九州市の状況をみると、北九州市の満足度が全国に比べて低いことが分かる（図7）。

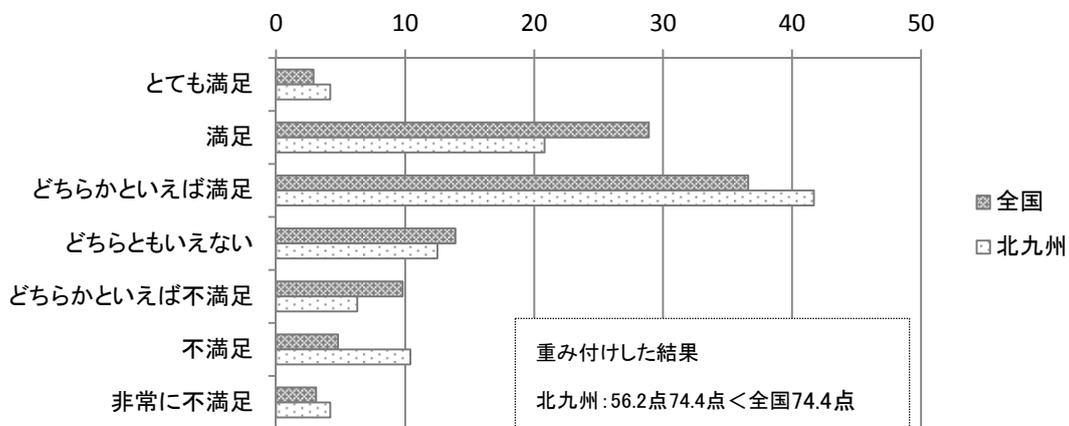


図7. 生活満足度の北九州市と全国の比較

この現状を職種別にみると、全国同様に「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」の評価が低く、これら職種においては「とても満足」及び「満足」している人がまったくいない。前述のとおり、現在の生活に満足している人は7割近くいる（図5）が、北九州市のこれらの職種においては重み付した結果、満足している人と不満足の人との割合が同じである。それではどうして不満足なのか、その要因をみると、所得と精神的ゆとりに不満があるとしており、仕事に起因していることが分かる。また家庭においてもいろいろと問題を抱えていることが推察される（表5）。

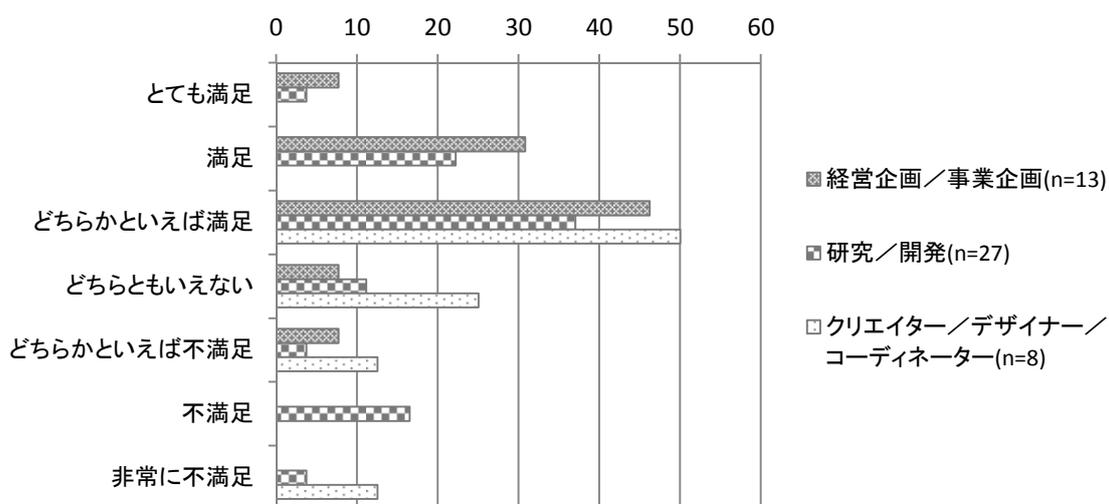


図8. 職種別（北九州市）の生活満足度（N=48）

表5. 不満足の原因（北九州市）

	どちらかといえば不満足	不満足	非常に不満足
研究／開発	家庭 住居 精神的ゆとり	家庭 所得×4 住居 治安 地域経済の発展 精神的ゆとり×2	家庭 所得 精神的ゆとり
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	-	所得 健康	家庭 所得 精神的ゆとり

4-4. 調査結果の総括

以上の調査結果を総括すると、「健康」や「家族」は生活を営む上での基盤であり、万人が最重要視する要素であるといえる。一方、震災以降、地域コミュニティや人と人の繋がり（絆）の重要性が再認識されている中で、「経営企画／事業企画」に携わる比較的年配の方を除いて、地域社会への関心が低いのが特徴的である。また、まちなぎわいを醸し出す「商業施設」や日常生活の安心を支える「病院・福祉施設」、生活に潤いを与える「歴史・文化」への評価が低い。「交通基盤」や「行政サービス」に対しても同様である。さらに「仕事」や「所得」を重視するにもかかわらず、「地域経済の発展」への関心が低いのはやや無責任な印象を感じてしまう。このことは地方自治体がさまざまな施策を講じて、あまり関心がない、言い換えれば効果が期待できないともいえる。

北九州市においても同様であり、「研究／開発」「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」において満足度が低い。原因は一言でいえば“魅力的な働き口がない”ためである。

5. イノベーションを担う人材の確保に向けた示唆

幸せな（充実した）生活を送る上で重要であると考えられる上位10の要素（図1）を体系化すると、「生きる上での土台」と「安心・安全」「魅力的な働き口」の3つに分けることができる。またこれらの要素は自分自身が直接対応すべき能動的な取り組みと、地方自治体などが対応してくれる受動的な取り組みに大別することができ、ここでは後者について考える。



図9. 生活満足度及び幸福度と要素の関係

生きる上での土台である「健康」や「家族」は、個人による能動的な行為であり、地元自治体は側面支援に徹する必要がある。具体的には病院などの施設整備や、検診制度や相談窓口の充実などが考えられる。

安心・安全を実現する要素である「治安」「防災」「住居」「食生活」については、地元自治体は住民の意見を踏まえ、優先順位を付けて粛々と実施するしかない。どちらかといえば、できてあたり前といった感覚で捉えているものと思われ、実施しなかった時の失望感は大大きく、転出のきっかけになりかねないと思われる。

魅力的な働き口の定義が曖昧ではあるが、「研究／開発」や「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」にとって、不満足最大の要因であり、地元自治体は仕事内容と高所得を満足する企業の集積に注力する必要がある。また精神的なゆとりを確保するために、企業のワークライフバランスを推進し、行政は普及啓蒙に努める必要がある。前述したが、これらの職種の人には地域への関心が低く、愛着や定住志向が弱いため、子供が転校できないなどの家族の制約などが無い限り、良い条件の都市へ簡単に移動することが考えられる。いいかえれば、良い条件を提供できれば、これらの職種の人を比較的容易に転入させることできるのではないかと考える。

6. 今後の課題

魅力的な企業の有無が、「研究／開発」や「クリエイター／デザイナー／コーディネーター」の満足度に大きな影響を及ぼすことから、これらの職種に従事する人にとって魅力的な仕事とはどういったものか、また魅力的な企業はどういった要素を備えた都市に立地したいのかといった視点から今後調査研究を進めていきたい。

注

- 1) Florida. R (2002)
- 2) 吉村英俊 (2009)
- 3) 熊本県企画振興部企画課 (2011)
- 4) ふるさと希望指数 (LHI) 研究プロジェクト (2012)
- 5) 公益財団法人荒川区自治総合研究所 (2011)
- 6) 幸福度に関する研究会 (2011)
- 7) 根本祐二 (2013)
- 8) 小林好宏、梶井祥子 (2011)
- 9) 吉村英俊 (2009) 再掲
- 10) OECD編著 (2012)
- 11) 福島清彦 (2011)

参考文献

- 1) Florida R., The rise of the Creative Class, Basic Books, 2002 (井口典夫訳『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社2008.2)
- 2) 宮川公男、大守隆編著『ソーシャル・キャピタルー現代経済社会のガバナンスの基礎』東洋経済新報社、2004.9
- 3) 吉村英俊「イノベーションを担う人材の吸引」『イノベーション構造と都市創生』海鳥社、2009.12
- 4) 大竹文雄、白石小百合、筒井義郎編著『日本の幸福度ー格差・労働・家族』日本評論社、2010.7
- 5) 福島清彦『国富論から幸福論へーGDP成長を超えて暮らしの質を高める時代ー』税務経理協会、2011.5
- 6) 公益財団法人荒川区自治総合研究所「荒川区民総幸福度 (GAH) に関する研究プロジェクト中間報告書」2011.8
- 7) 幸福度に関する研究会「幸福度に関する研究会報告 (案)ー幸福度指標試案ー」2011.8
- 8) みずほ総合研究所「日本人の幸福の源泉を探る～アンケート調査結果にみる日本人の主観的幸福度～」2011.10
- 9) 小林好宏、梶井祥子編著『これからの選択 ソーシャル・キャピタル 地域に住むプライ

- ド』北海道開発協会、2011.10
- 10) 南伸太郎 「「幸福度」を通じてみえる九州の地域課題」九州経済月報、2012.1
 - 11) ふるさと希望指数(LHI)研究プロジェクト「ふるさと希望指数(LHI:Local Hope Index) 研究報告書」2012.3
 - 12) 熊本県企画振興部企画課「「県民幸福量を図る指標の作成に係る調査研究」報告書」2012.3
 - 13) OECD編著『OECD幸福度白書ーより良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較』明石書店、2012.12
 - 14) 根本祐二『「豊かな地域」はどこがちがうのかー地域間競争の時代』ちくま新書、2013.1

【主要設問項目】

(1) 幸せな（充実した）生活を送る上で、以下の要素はどのくらい重要か。

	とても重要である	重要である	どちらかといえば重要である	どちらともいえない	重要でない	どちらかといえば重要でない	重要でない	全く重要ではない	分からない
家族									
仕事									
教育									
自然									
歴史・文化									
地域社会とのつながり									
所得									
買い物などの利便性									
住居									
健康									
食生活									
街が綺麗									
治安									
防災									
友人関係									
交通基盤									
病院・福祉施設									
商業施設									
娯楽・趣味									
地域経済の発展									
精神的ゆとり									
行政サービス									

(2)-1 現在の生活に満足しているか。

- ①とても満足している ②満足している ③どちらかといえば満足している
 ④どちらともいえない ⑤どちらかといえば不満足である ⑥不満足である
 ⑦非常に不満足である

(2)-2 前問に対して、それはなぜか（3つまで）

- ①家族 ②仕事 ③教育 ④自然 ⑤歴史・文化 ⑥地域社会とのつながり ⑦所得

- ⑧買い物などの利便性 ⑨住居 ⑩健康 ⑪食生活 ⑫街が綺麗 ⑬治安 ⑭防災
⑮友人関係 ⑯交通基盤 ⑰病院・福祉施設 ⑱商業施設 ⑲娯楽・趣味
⑳地域経済の発展 ㉑精神的ゆとり ㉒行政サービス ㉓その他

(3)-1 現在幸せか。

- ①とても幸せである ②幸せである ③どちらかといえば幸せである
④どちらともいえない ⑤どちらかといえば不幸せである ⑥不幸せである
⑦非常に不幸せである

(3)-2 前問に対して、それはなぜか（3つまで）

- ①家族 ②仕事 ③教育 ④自然 ⑤歴史・文化 ⑥地域社会とのつながり ⑦所得
⑧買い物などの利便性 ⑨住居 ⑩健康 ⑪食生活 ⑫街が綺麗 ⑬治安 ⑭防災
⑮友人関係 ⑯交通基盤 ⑰病院・福祉施設 ⑱商業施設 ⑲娯楽・趣味
⑳地域経済の発展 ㉑精神的ゆとり ㉒行政サービス ㉓その他

【回答者の属性】

(1) 職種×年代

		N/n	20代	30代	40代	50代	60才以上
全体	計	418	20.1	19.9	19.9	20.1	20.1
	経営企画／事業企画	63	6.3	4.8	20.6	15.9	52.4
	研究／開発	228	22.4	23.2	19.3	22.4	12.7
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	24.0	21.5	20.7	17.4	16.5
北九州	計	48	14.6	18.8	22.9	22.9	20.8
	経営企画／事業企画	13	0.0	0.0	30.8	23.1	46.2
	研究／開発	27	14.8	29.6	25.9	22.2	7.4
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	37.5	12.5	0.0	25.0	25.0

(2) 年代×世帯年収

		N/n	300万円未満	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	わからない 答えたくない
全体	計	418	9.1	10.0	11.7	8.9	8.6	10.3	5.7	5.5	16.5	13.6
	20代	84	20.2	19.0	17.9	8.3	1.2	8.3	3.6	8.3	4.8	8.3
	30代	83	9.6	12.0	14.5	7.2	13.3	6.0	9.6	4.8	7.2	15.7
	40代	83	6.0	3.6	13.3	12.0	10.8	12.0	6.0	4.8	15.7	15.7
	50代	84	3.6	6.0	7.1	7.1	6.0	11.9	6.0	3.6	33.3	15.5
	60才以上	84	5.0	8.0	5.0	8.0	10.0	11.0	3.0	5.0	18.0	11.0
北九州	計	48	8.3	8.3	8.3	10.4	14.6	10.4	10.4	6.3	12.5	10.4
	20代	7	28.6	28.6	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0	28.6	0.0	0.0
	30代	9	0.0	11.1	0.0	33.3	11.1	11.1	22.2	0.0	0.0	11.1
	40代	11	0.0	0.0	27.3	0.0	18.2	18.2	9.1	0.0	27.3	0.0
	50代	11	18.2	0.0	9.1	9.1	9.1	9.1	18.2	0.0	9.1	18.2
	60才以上	10	0.0	10.0	0.0	10.0	30.0	0.0	0.0	10.0	20.0	20.0

(3) 職種×世帯年収

		N/n	300万円未満	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	わからない 答えたくない
全体	計	418	9.1	10.0	11.7	8.9	8.6	10.3	5.7	5.5	16.5	13.6
	経営企画／事業企画	63	3.2	6.3	4.8	4.8	7.9	14.3	1.6	4.8	36.5	15.9
	研究／開発	228	6.6	9.6	15.4	8.8	11.0	12.3	7.5	7.0	13.2	8.8
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	16.5	13.2	9.1	10.7	5.0	4.1	5.0	2.5	12.4	21.5
北九州	計	48	8.3	8.3	8.3	10.4	14.6	10.4	10.4	6.3	12.5	10.4
	経営企画／事業企画	13	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	15.4	0.0	7.7	30.8	23.1
	研究／開発	27	14.8	7.4	11.1	14.8	14.8	11.1	14.8	0.0	7.4	3.7
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	0.0	25.0	12.5	12.5	0.0	0.0	12.5	25.0	0.0	12.5

(4) 職種×最終学歴

		N/n	中学校	高等学校	専門学校	高専 短期大学	大学	大学院 博士前期	大学院 博士後期	その他
全体	計	418	0.7	10.5	11.0	6.5	50.0	17.7	3.6	0.0
	経営企画／事業企画	63	1.6	11.1	3.2	3.2	68.3	12.7	0.0	0.0
	研究／開発	228	0.0	7.9	6.6	4.4	46.9	27.6	6.6	0.0
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	1.7	14.9	24.0	12.4	44.6	2.5	0.0	0.0
北九州	計	48	0.0	6.3	12.5	10.4	50.0	20.8	0.0	0.0
	経営企画／事業企画	13	0.0	0.0	7.7	7.7	61.5	23.1	0.0	0.0
	研究／開発	27	0.0	7.4	7.4	11.1	48.1	25.9	0.0	0.0
	クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	0.0	12.5	37.5	12.5	37.5	0.0	0.0	0.0

注：大学院博士後期課程単位取得満期退学は、大学院博士前期に含まれる

【回答結果の詳細データ】

(5) 職種×幸せな（充実した）生活を送る上で必要な要素の重要度

	N/n	とても重要である	重要である	どちらかといえば重要である	どちらともいえない	どちらかといえば重要でない	重要でない	全く重要ではない	分からない
【家族】	418	53.1	25.6	11.7	6.5	1.4	1.0	0.2	0.5
経営企画／事業企画	63	61.9	30.2	6.3	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	55.3	24.6	11.0	7.0	0.9	0.9	0.0	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	44.6	24.8	15.7	9.1	2.5	1.7	0.8	0.8
【仕事】	418	24.9	39.2	25.1	6.9	2.6	0.7	0.2	0.2
経営企画／事業企画	63	28.6	50.8	11.1	7.9	0.0	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	22.4	36.0	28.1	7.9	3.9	0.9	0.4	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	28.9	38.8	26.4	4.1	1.7	0.0	0.0	0.0
【教育】	418	11.2	35.2	29.9	17.5	2.6	1.2	1.7	0.7
経営企画／事業企画	63	20.6	46.0	19.0	11.1	1.6	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	9.6	33.3	31.1	20.6	2.6	0.4	0.9	1.3
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	9.9	33.1	32.2	15.7	2.5	2.5	4.1	0.0
【自然】	418	12.4	33.3	33.0	16.7	3.1	0.7	0.5	0.2
経営企画／事業企画	63	14.3	47.6	28.6	7.9	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	10.5	29.8	35.5	20.2	2.2	0.9	0.4	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	15.7	31.4	31.4	14.9	5.0	0.8	0.8	0.0
【歴史・文化】	418	6.9	22.2	31.3	25.8	9.8	2.9	0.0	1.0
経営企画／事業企画	63	12.7	38.1	28.6	14.3	4.8	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	5.7	14.9	32.9	30.3	11.4	3.5	0.0	1.3
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	6.6	28.1	28.9	24.8	8.3	2.5	0.0	0.8
【地域社会とのつながり】	418	4.8	15.1	36.8	28.9	8.1	3.1	2.6	0.5
経営企画／事業企画	63	6.3	33.3	28.6	22.2	7.9	0.0	1.6	0.0
研究／開発	228	4.8	8.8	40.8	30.3	8.8	4.4	1.8	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	4.1	16.5	33.9	31.4	5.8	2.5	5.0	0.8
【所得】	418	21.5	42.8	25.4	8.4	1.4	0.0	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	14.3	54.0	25.4	4.8	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	22.4	39.5	25.0	11.0	1.3	0.0	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	24.8	41.3	27.3	5.8	0.8	0.0	0.0	0.0
【買い物などの利便性】	418	9.6	39.7	34.9	13.2	2.2	0.0	0.2	0.2
経営企画／事業企画	63	7.9	42.9	36.5	9.5	1.6	0.0	1.6	0.0
研究／開発	228	9.2	35.1	36.0	16.7	2.6	0.0	0.0	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	11.6	47.1	31.4	8.3	1.7	0.0	0.0	0.0
【住居】	418	18.9	40.4	28.2	9.8	1.4	0.7	0.2	0.2
経営企画／事業企画	63	23.8	36.5	33.3	4.8	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	15.8	40.4	28.1	12.7	1.3	0.9	0.4	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	23.1	43.0	24.8	7.4	0.8	0.8	0.0	0.0
【健康】	418	55.5	28.9	9.3	3.8	1.9	0.0	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	68.3	25.4	6.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	50.4	31.6	8.8	5.7	2.6	0.0	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	58.7	25.6	12.4	2.5	0.8	0.0	0.0	0.0
【食生活】	418	24.6	42.6	22.0	8.9	1.7	0.0	0.0	0.2
経営企画／事業企画	63	25.4	54.0	14.3	6.3	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	20.2	40.8	25.4	11.4	1.8	0.0	0.0	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	33.9	39.7	19.8	5.0	1.7	0.0	0.0	0.0
【街の環境】	418	11.2	36.8	35.2	13.9	1.9	0.5	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	9.5	42.9	34.9	9.5	1.6	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	9.6	33.8	34.2	18.9	2.2	0.4	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	15.7	40.5	36.4	7.4	0.0	0.0	0.0	0.0
【治安】	418	23.0	39.2	26.8	9.3	1.2	0.0	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	27.0	50.8	19.0	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	22.4	35.5	27.2	12.7	1.3	0.0	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	23.1	41.3	28.1	6.6	0.8	0.0	0.0	0.0
【防災】	418	14.4	41.1	30.9	12.0	0.7	0.5	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	20.6	49.2	20.6	6.3	3.2	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	11.8	37.3	33.3	15.8	0.0	0.9	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	16.5	45.5	29.8	7.4	0.8	0.0	0.0	0.0

	N/n	とても重要である	重要である	どちらかといえば重要である	どちらともいえない	どちらかといえば重要でない	重要でない	全く重要ではない	分からない
【友人関係】									
	418	17.7	35.2	25.8	17.2	1.9	1.2	0.5	0.5
経営企画／事業企画	63	20.6	44.4	22.2	11.1	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	13.2	34.6	26.3	21.5	1.3	1.8	0.4	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	24.8	32.2	25.6	13.2	2.5	0.8	0.8	0.0
【交通基盤】									
	418	9.6	32.5	39.5	14.8	2.4	0.5	0.2	0.5
経営企画／事業企画	63	9.5	41.3	31.7	14.3	1.6	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	7.9	26.3	44.3	17.5	2.6	0.4	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	13.2	39.7	34.7	9.9	1.7	0.0	0.8	0.0
【病院・福祉施設】									
	418	11.5	37.1	34.9	13.9	1.7	0.2	0.5	0.2
経営企画／事業企画	63	11.1	52.4	28.6	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	11.4	32.9	37.7	14.9	1.8	0.4	0.4	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	12.4	37.2	33.1	14.9	1.7	0.0	0.8	0.0
【商業施設】									
	418	5.7	28.7	39.7	19.1	4.5	1.4	0.5	0.2
経営企画／事業企画	63	6.3	42.9	27.0	17.5	3.2	1.6	1.6	0.0
研究／開発	228	4.8	23.7	42.1	22.4	4.4	2.2	0.0	0.4
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	7.4	30.6	42.1	14.0	5.0	0.0	0.8	0.0
【娯楽・趣味】									
	418	12.4	29.2	31.3	20.3	4.8	1.2	0.2	0.5
経営企画／事業企画	63	12.7	36.5	25.4	17.5	6.3	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	10.1	25.9	33.3	24.1	4.4	1.3	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	17.4	31.4	30.6	14.9	4.1	0.8	0.8	0.0
【地域経済の発展】									
	418	5.5	20.3	32.5	31.6	6.5	2.4	0.5	0.7
経営企画／事業企画	63	9.5	34.9	30.2	20.6	3.2	1.6	0.0	0.0
研究／開発	228	4.8	18.0	32.5	35.1	5.3	3.1	0.4	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	5.0	16.5	33.9	31.4	9.9	1.7	0.8	0.8
【精神的ゆとり】									
	418	27.8	32.8	26.6	11.0	1.2	0.2	0.0	0.5
経営企画／事業企画	63	39.7	34.9	15.9	7.9	1.6	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	21.5	29.8	32.0	14.5	0.9	0.4	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	33.9	36.4	23.1	5.8	0.8	0.0	0.0	0.0
【行政サービス】									
	418	8.1	27.0	34.9	25.4	2.6	1.0	0.2	0.7
経営企画／事業企画	63	12.7	38.1	31.7	17.5	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	228	6.6	24.1	36.0	28.5	2.6	1.3	0.0	0.9
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	121	9.1	27.3	34.7	23.1	3.3	0.8	0.8	0.8

【北九州市】	n	とても重要である	重要である	どちらかといえば重要である	どちらともいえない	どちらかといえば重要でない	重要でない	全く重要ではない	分からない
【家族】									
経営企画／事業企画	13	69.2	23.1	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	70.4	18.5	3.7	7.4	0.0	0.0	0.0	0.0
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	12.5	25.0	37.5	12.5	0.0	0.0	12.5	0.0
【仕事】									
経営企画／事業企画	13	46.2	46.2	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	29.6	29.6	29.6	7.4	3.7	0.0	0.0	0.0
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	12.5	37.5	37.5	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0
【所得】									
経営企画／事業企画	13	15.4	53.8	23.1	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	37.0	33.3	22.2	7.4	0.0	0.0	0.0	0.0
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	25.0	37.5	12.5	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
【買い物などの利便性】									
経営企画／事業企画	13	7.7	38.5	53.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	11.1	37.0	22.2	25.9	3.7	0.0	0.0	0.0
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	12.5	62.5	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
【住居】									
経営企画／事業企画	13	38.5	23.1	38.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	29.6	44.4	11.1	11.1	3.7	0.0	0.0	0.0
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	25.0	50.0	12.5	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0
【健康】									
経営企画／事業企画	13	69.2	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	66.7	14.8	7.4	3.7	3.7	0.0	0.0	3.7
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	62.5	25.0	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0
【友人関係】									
経営企画／事業企画	13	23.1	53.8	7.7	15.4	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	25.9	29.6	22.2	14.8	3.7	0.0	0.0	3.7
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	12.5	37.5	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
【精神的ゆとり】									
経営企画／事業企画	13	38.5	30.8	23.1	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
研究／開発	27	18.5	51.9	14.8	11.1	0.0	0.0	0.0	3.7
クリエイター／デザイナー／コーディネーター	8	25.0	62.5	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

2013年度 地域課題研究

2014年3月31日 発行

発行所 公立大学法人 北九州市立大学
都市政策研究所

〒802-8577 北九州市小倉南区北方4丁目2-1

電話 093-964-4302

FAX 093-964-4300

印刷所 よしみ工産株式会社

〒804-0094 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

電話 093-882-1661
